

通類編

昭和二年十月廿五日第三回出版
昭和五年六月三十日
昭和七年七月一日
發行所



花王

大手

世

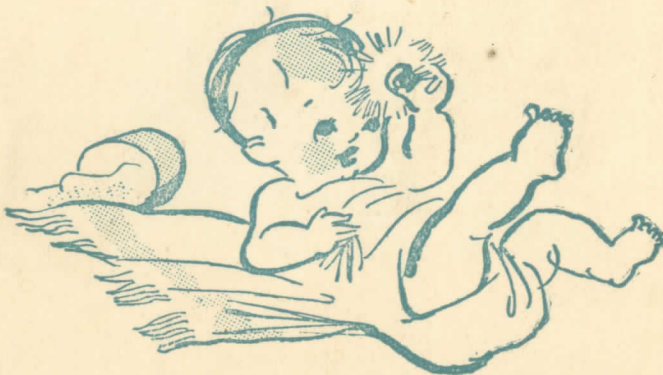
無鉛撒布藥

ミカロール

治	豫	タ	ア
療	防	バ	セ
に	こ	の	モ

効果の確實な撒布藥として
専門醫家の推奨を受けつゝあり

内務省衛生試験所無鉛證明



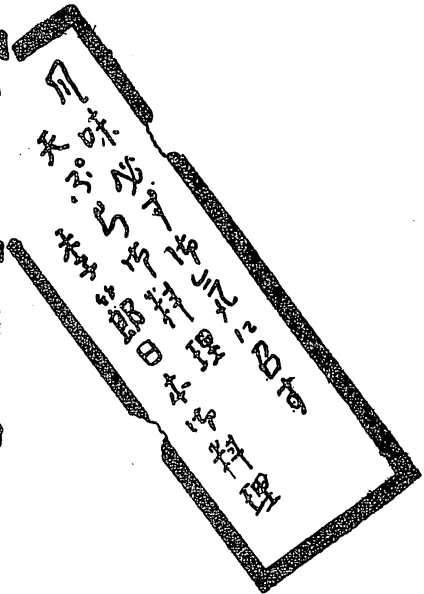
東京和光堂大坂

御芝居歸りには打揃ふて

お坐席では非御會食を



吉屋食堂



道頓堀戎し北詰

支店

大阪支店 北新地裏町
京都支店 木屋町ドングリ橋

道頓堀 昭和五年七月號

第五年
第四十六輯

◇表紙 (道頓堀船乗込みの圖)

口 繪

◆中座曾我廻家五郎劇◆「夏帽」五郎の鮮人朴正順◆「高堀」の舞臺面◆「鉦三本」五郎の鉦手蝶六の三太郎、小次郎の虎公、秀蝶の娘、一朝の綱元、大磯の妻お元◆「縁日の宵」五郎の稻田勘太郎◆「怖い眼」五郎の休職大尉、蝶六の豆腐屋、大磯の未亡人、なたねの堀田實、桃蝶の新内師匠◆名流演藝舞踊會三津五郎の供奴、長三郎の保名、幸四郎の素袍落し◆第二回「さかえ日」◆浪花座の淡海劇「謎」太郎の父追藏、淡海の進一、龜鶴の進一の母、玉川の進一の妻、歸帆の都志子の父、辨慶の石川、辨天の石川の妻◆「喜八と清六」太郎の清六、玉川の清六女房、かもめのお辰、十太郎の家主、淡海の喜八◆「人生雙六」淡海の夫、龜鶴の妻◆角座の新國劇◆「魔像」久松のお枝、島田の英右近、辰巳の神尾喬之助、小川の御書院番士◆「時の氏神」中井の相良英作、久松の妻ぬい子、山路の從妹芳子、◆劍客商賣「畑中の巻田、丸茂の新之丞、島田の鬼塚、二葉のお絹、雄島の安達、高木の仲間」◆文樂座人形淨瑠璃◆「傾城反魂香」の舞臺・「生寫朝顔話」の舞臺面・「釋迦如來誕生會」の舞臺・「伊勢音頭戀寐奴」の舞臺面◆樂天地新派劇◆「雲の叫び」の舞臺面

◇扉 (五郎劇のスケッチ) 田中滿彦 畫

◆第二回さかえ日に就て 白井松次郎 (二)

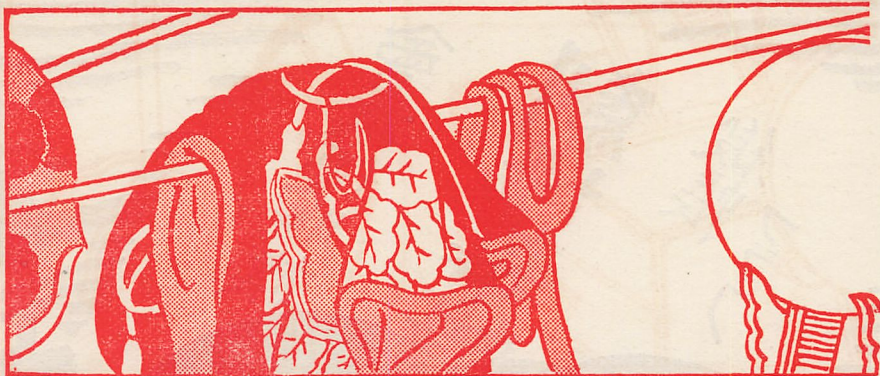
作戲 幽靈漫談會 高谷伸 (四)

◆芝居の スゴサ 山上貞一 (八)

◆浴衣の氣輕さ 吉本寛汀 (一〇)

◆雨 奇 晴 好 並山拜右 (一二)





七の月文藝

生寫朝顔話……………(一八)
 釋迦如來誕生會……………(二四)
 傾城反魂香……………(二六)

◇豐竹呂昇逝く……………(二九)

◇魔 像(芝居ばなし)……………(三〇)

芝居の錦エロミグロ紙展覽會……………(三五)
繪に残る

舞臺人の銷夏多面……………(四三)

◆熱時熱殺……………西尾福三郎(三八)

◆夏芝居漫筆……………吉田禎男(四二)

◆難波撰記……………高橋義信(一五)

□劇壇時事……………(五六)

□劇壇往來……………(五八)

戲夏 帽……………(一幕)……………曾我廼家五郎(六〇)

△挿繪カット……………田中滿彦

△編輯後記……………松本泰三(七〇)

會旗優勝旗

川島算帳

綴帳

植原商店

神戸市

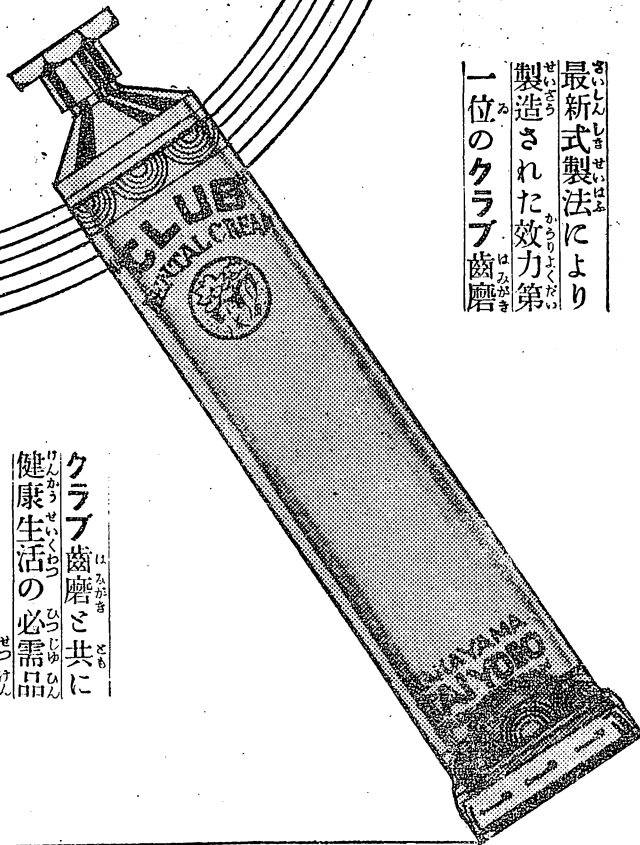
楠利西門

電話 元町一六五番

の位一第力效

磨歯煉ブラク

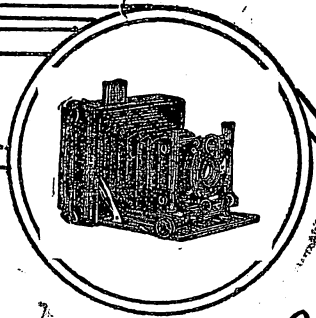
最新式製法により
製造された效力第一
位のクラブ歯磨



クラブ歯磨と共に
健康生活の必需品
たるクラブ石鹼

歯石ブラク

の良最
鹼石



より

面影残さず繪映安ふ
 なくとも白の總はれて……

肖像・風景・其他凡有る物を
 寫眞や小型映画に残したいと
 思召この時は是非共

長堀橋は南詰 小西六へ……

寫眞機は

- リリーカメラ 小型活動
- パールカメラ 寫眞機械
- アイデアカメラ
- パーレットカメラ 各種在庫

(カタロン進呈)





順正朴人鮮の郎五〔帽 夏〕劇郎五の月七座中

◆七月の中座・五郎劇◆

(上)「高 塀」の舞臺面



(中)「鮎三本」の舞臺・五郎の鉈手・蝶六の三太郎
小次郎の虎公



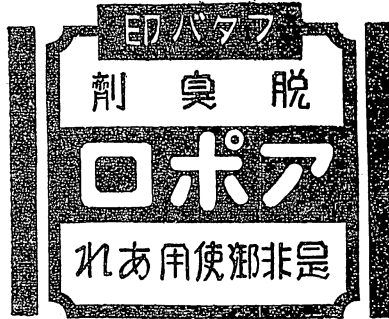
(下)「鮎三本」の舞臺・秀蝶の娘・五郎の金太郎・
一朝の綱元・大磯の妻お元

便所の防臭に困る方は今直ぐ

藥學士 林彪太郎氏創製



(定價 小瓶一圓 大瓶壹圓 拾五錢)



△用法

一回十滴乃至十數滴づゝ(場所により多少の加減を要す)一回多量に撒布するは却て効力を減ずる事あり使用後は栓を堅くし冷所に置かるべし。

到る處の藥店

各百貨店に販賣す

使用簡潔
十滴奏効
無害無毒

家庭必備品

「アポロ」ハ二つの便所に大抵十滴撒布すれば充分奏効します。

「アポロ」ハ溶かすことがありません、このまゝ撒布すれば宜敷いから少しも面倒ではありません。

「アポロ」ハ他の藥(カンブラ油、デシン、ナフタリン、クレゾール、樟腦など)と異ひ化學的變化により放臭物を無臭とします。

「アポロ」ハ毒性がなく無害で便所にアポロの臭ひが残らぬ爲め汲取人がイヤがりません。無論農作物にも無害です。

「アポロ」ハ使用法が輕便で奏効的確、用量が僅かですから經濟にもなります。

發賣元

光榮商會

電話本局三三三番
電替大坂三三三番
振替五七一七番

大坂市東區
伏見町三丁目

松竹ビルディング

各座の備品倉庫・用度課倉庫 地階

ビルの入口・大道具製作部 一階

文樂の倉庫・電気部 二階

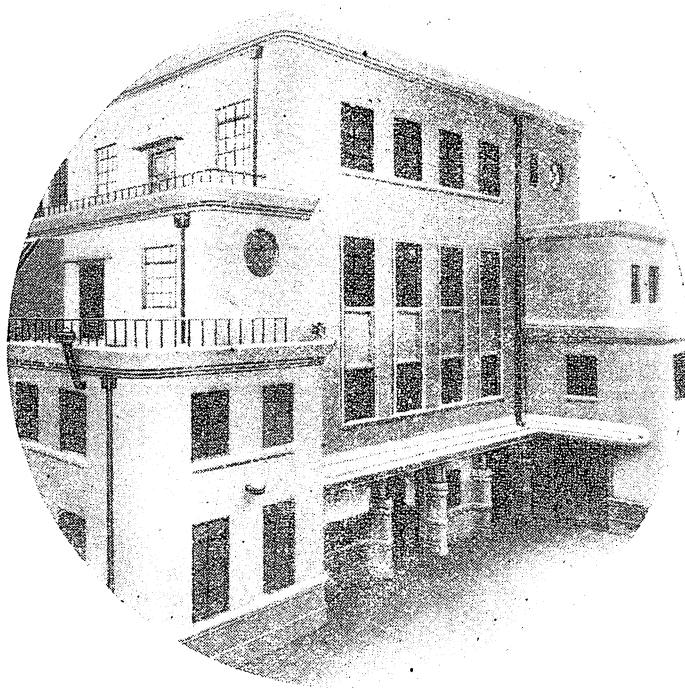
衣裳部・小裂部 三階

ガクゲキ部練習所 四階

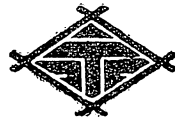
當ビル内へ

松竹衣裳部移轉

電話 戎五六三四番



あらゆる印刷



永井日英堂印刷所

大阪市西區土佐堀通一丁目

大版中央局私書函第壹壹八號

電話土佐堀

(44)

三〇八三番
四九四〇番
四九四一番

振替大阪一九三九〇番

理料所



大阪市今橋五丁目

つる家本店

電話本局(三)
六三三
三一五
二六二
番番番



郎太勘田稻の郎五 「宵の日縁」 (上)

乾尉大職休の郎五 「眼い怖」 (下)

實田堀のねたと満代喜



五郎劇の「怖い眼」

(上)と(下)は五郎の休職大尉・眼は口以上
に物を云ふの表情。まことに眼は心の窓……………。

(中) 蟻六の豆腐屋・大磯の未亡人政子・
五郎の乾・なたねの政子の實子堀田實・
桃蝶の新内師匠

DENKI RYOKAN

Tennoji Park. Osaka.

眼に青葉新緑薫る泉石の風致
閑雅幽邃水清き瀧の流れ
若鮎飛び河鹿鳴く大庭園
數奇を凝らせる風雅な座敷
電氣獨特汚ゆる庖丁の風味
滾々と湧く内湯の爽快等々
味覺に氣分に趣向に情緒に
東京の社交界まで持離さる
大阪食味王國の唯一代表店

斯界の典型



名代電
割烹

氣

天 王 寺 公 園

電話 1334 • 1335 • 1336 • 1337



スキナ あぶら取紙

皆様の

おスキナ……

道頓堀……

スピード時代の

お化粧用……

スキナ

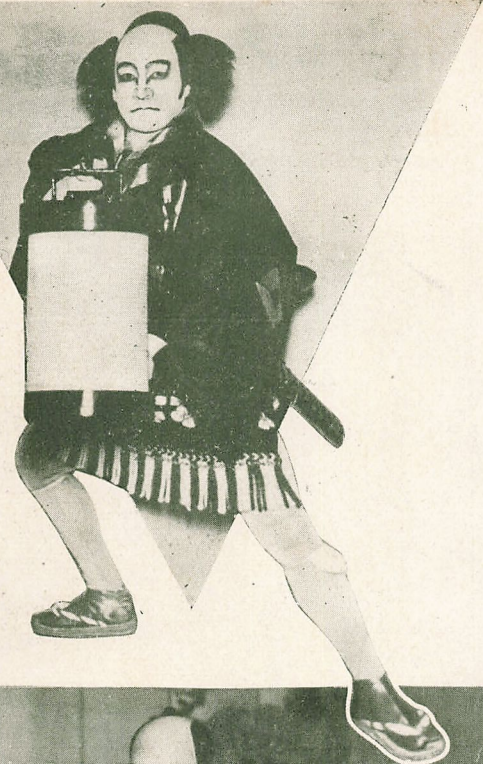
あぶら取紙

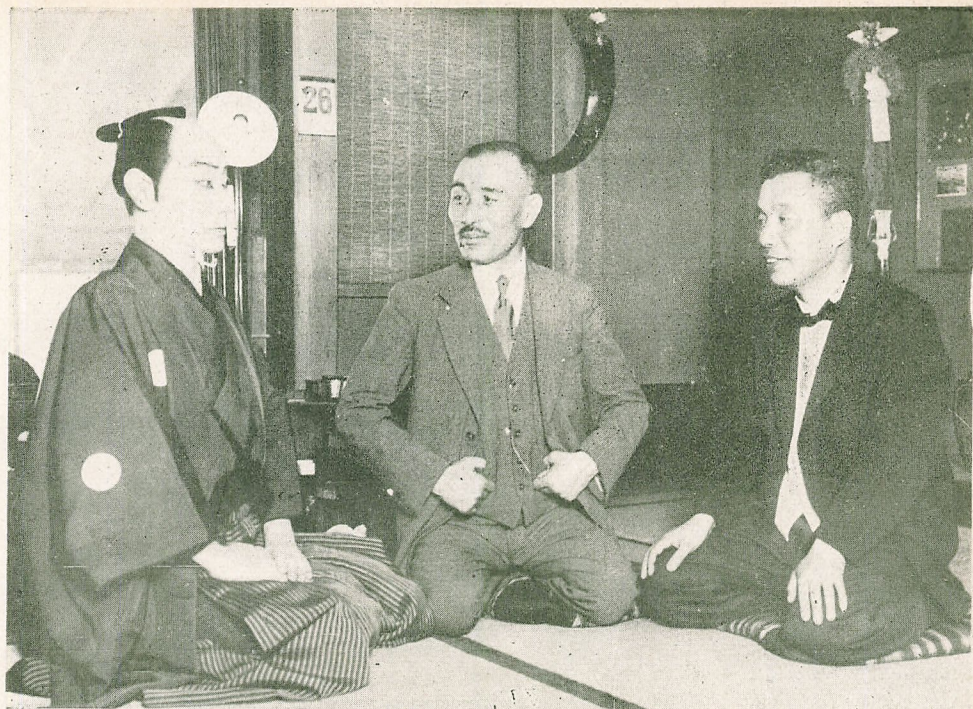
(各化粧品薬店にあり)

製造元 朝日堂株式会社
販売元 スキナ田中
大阪 大阪

名流演藝舞踊會

舞踊は松本幸四郎・坂東三津五郎・林長三郎・常磐津は松尾太夫
 文字兵衛・清元は喜久太夫・梅吉・長唄は六左衛門・佐吉・等各流
 の巨匠が相よつて七月二日名古屋を振出しに各地巡演にのぼる
 寶珠は上から三津五郎の供・長三郎の僕・幸四郎の素袍落し





第二回
[日えかさ]

「暗い世相に明るい芝居」を見せる松竹の社会奉仕として六月二十六日大阪府下カード階級者六千餘名を道頓堀、千日前の四劇場に招待無料開放されました。當日の状況をカメラにおさめて……………

(上)中座の成駒家樂屋にて(右より)白井松竹社長・柴田大阪府知事・南万十次兵衛に扮した中村鴈治郎いづれもニコ／＼顔で芝居王と知事と名優の會見
(下)「さかえ日」の檐下を並べた當日の道頓堀



(上)

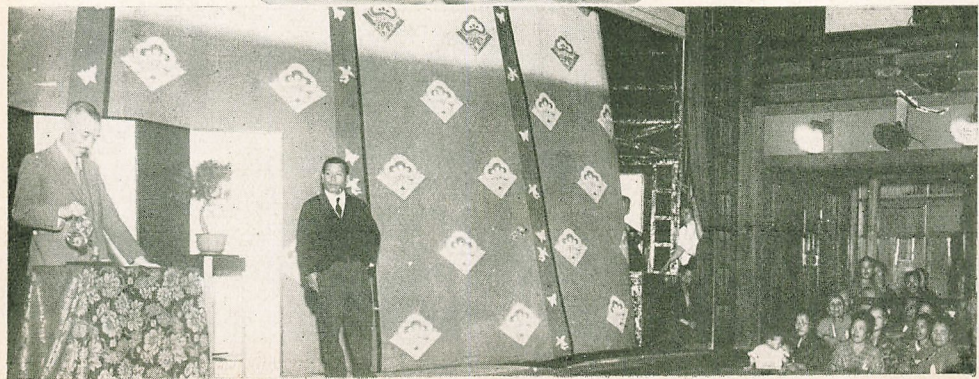
中座の櫓下(中) 中座當日の演物「引窓」に活躍する

中村鴈治郎の南方十次兵衛

(下)

中座開演前「さかえ日」の挨拶と主旨とをのべる柴田

知事とその右側は岡松竹常務





七月の浪花座に歸つてきた淡海劇——

(上) 「謎」の舞臺面・太郎の父進藏・淡海の進一・龜鶴の進一の母・玉川の進一の妻・歸帆の都志子の父・辨慶の石川英太郎・辨天の石川の妻

(下) 「喜八と清六」 淡海の駕屋喜八



colour is so important
s, hats should ref
ority of the
are in bl
ason
na

新化粧料

家庭で出来る美顔術

カザリン

カザリン・クリーム
白粉・香水
化粧水・ベラム
等 数十種
各 五十銭

of the forehead: it may slant gradually to the hair-line

美顔術料カザリン……

世界の美人國コーカサスから、
巴里の社交界に紹介されて有名
になった特殊化粧品。この匂ひ
高いバラ色のカザリンはお顔に
お塗り下さいますと特殊薬粧の
分解結成の物理學的作用により
美顔マツサージが自動的に行は
れ、表皮細胞中より汚れた脂肪
を抽出し、血行をよくして小皺
を去り地肌を整へニキビツバカ
スを癒し、しん底から色白く若
返らせます。カザリン・クリ
ムでお仕上下さいますと僅か五
分間で貴女は見違える程美しく
おなりでございます。

各デパート及びカザリン
チエンストリアに販賣

of the face in an oval, but always it leaves the forehead exposed. (note each of the
thirteen hats shown on pages 81 to 83.) The Frenchwoman was slow to accept this
new departure and no wonder for each of the following reasons: the face was the

(害無畜人) 藥取蚊の的理合・許特賣專

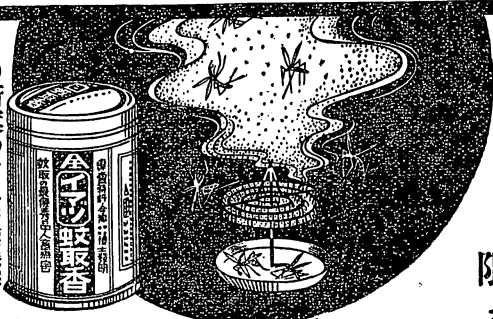
香取蚊ツマイ

◇蚊取りには、線香より

よく効いて安くつく

イマツ蚊取香に

限る。



◎新案の蚊取香燵焼器

◇昨年の燵焼器の欠點を補ひ、即座に渦巻線香にして、燵べるステキな燵焼器が發明されました。是非御使用を!

◇渦巻線香二本の効あつて安くつき

(害無畜人) 性香芳式新最

專賣特許

イマツ芳香油

▲使所くさみ止

効力Ⅱカンブラ油の二倍
片腦油

- 芳香を發し
- 臭氣を止め
- ウジを殺す

◎大掃除には衛生上

便所其他不潔の場所へ

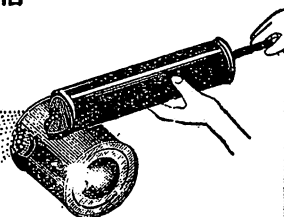
是非本品をマカれよ!

▲南京虫退治には

圖の如く噴霧器又は霧吹で

カケると即死す!

◎本品を撒布すれば、人好きのする芳香を満たし、同時に驅虫消毒の力強大にして、傳染病の豫防となる。尙毒虫に刺された時に、ツケると痛痒はすぐ治る。



大阪市西區京町堀通二丁目

今津化學研究所

振替大阪六八〇八九番



◆ 浪花座七月の淡海劇 ◆

(上) 「喜八と清六」

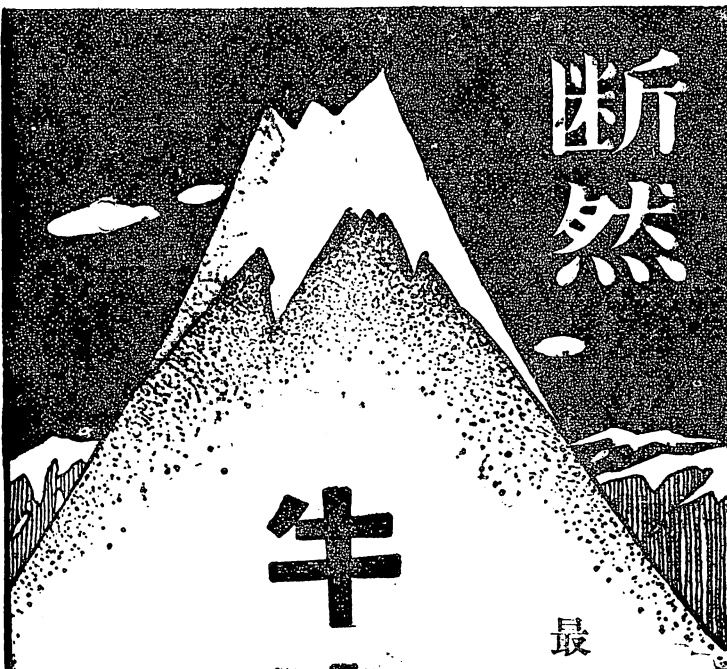
太郎の清六・淡海の喜八・玉川の清六の女
房・かもめのお辰・十太郎の家主

(下) 「謎」の舞臺面・淡海の三好進



◆—淡海劇の「人生雙六」——淡海の夫に龜鶴の妻





断然

最高の權威

最大の信用

(全國到る處の食料品店にあり)

牛肉寶來煮

松下商店

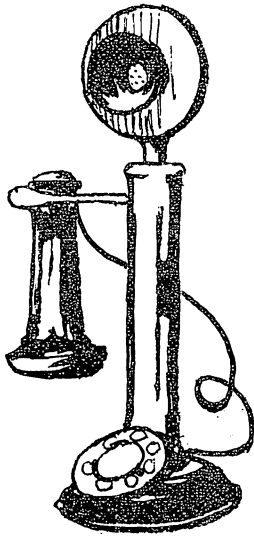
大阪高麗橋

松下商店京都出張所

京都鹽ヶ井五條

私設電話工事へ

和田電機商店へ



逓信局指定公認

和田電機商店

工場

大阪市北區中之島常安町
電話土佐堀(44)一七八七番
振替大阪一一九〇一四番
大阪市天王寺區東上町二〇地



アングロス井ス

ミルクチョコレート

コーヒキャラメル

チョコ
レート キャラメル

大阪市東區豊後町三番地

發賣元
株式會社
横山商店

電話東(94)二〇六一番





確 實

本邦最優最大の生命
保險會社として基礎
最も確實なり

有 利

低廉の保險料を以て
最も豊富なる加入者
配當を實行す

親 切

營業機關奉仕設備共
に完備し加入者各位
の質證を博す

契約高 九億壹千餘萬圓
總資産 二億壹千餘萬圓

日本生命

大坂市東區今橋四丁目



——角座七月の新國劇「魔像」——久松のお絃・島田の芙右近

松久知の知らぬの
辰巳の神之助

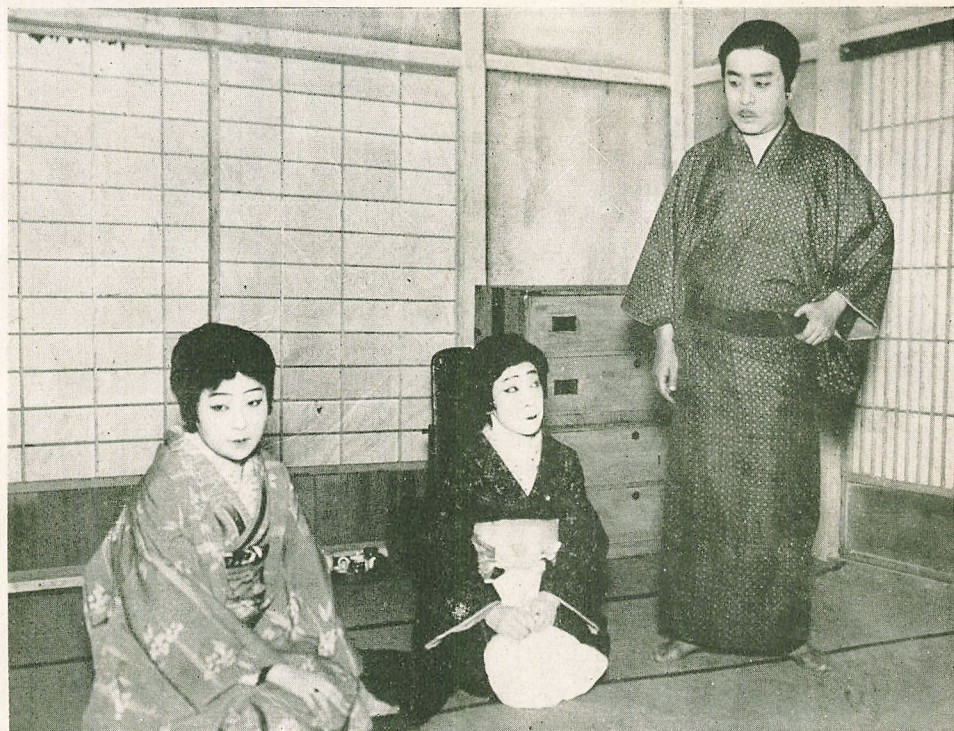
「魔像」



右(りよ)の中畑田巻・勝内丸茂之新
田島之鬼塚・二葉の娘お絹

「剣客商賣」

◆ 角座七月の新國劇 ◆



中井の相良英作・松久妻のい子・山路從妹芳子 「時氏の神」

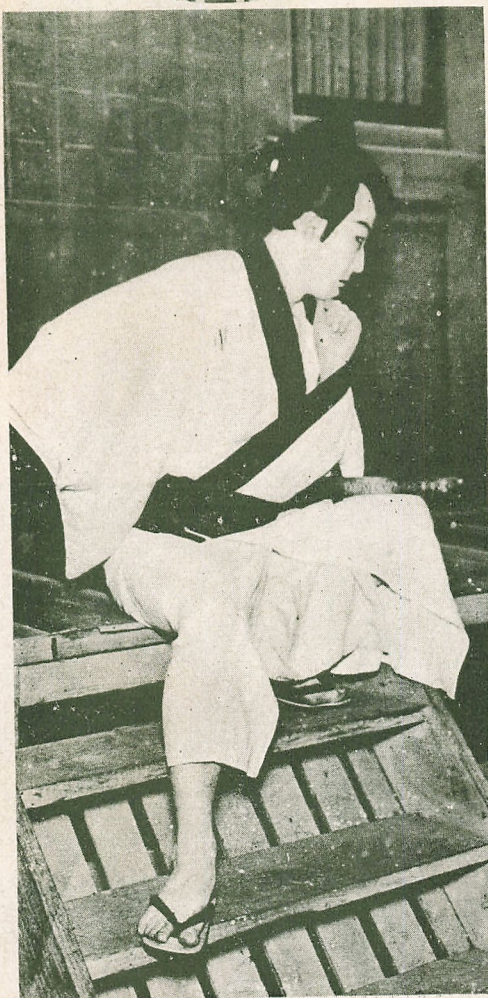
新國劇の「魔像」

上……右は小川の御書院番士大迫と辰巳の神尾橋之助
 左は久松のしらすのお紋
 下……左は辰巳の神尾橋之助



「賣客商劍」

助之軍達安の島雄
 五源間仲の木高



七月の文楽座・人形浄瑠璃

(上)「傾城反魂香」將監閑居の段

榮三の浮世又平・文五郎の妻おとく

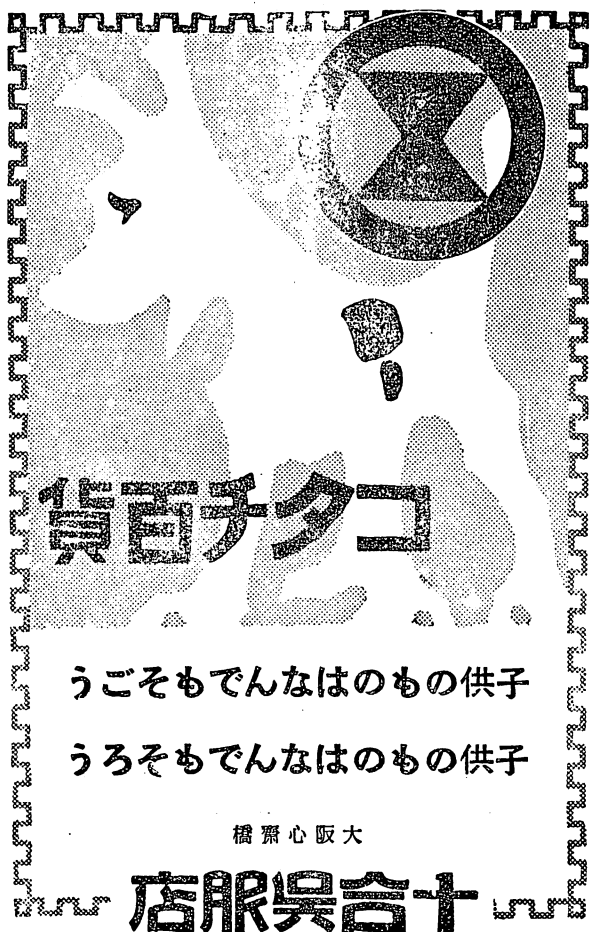
(下)「生寫朝顔話」島田驛

政龜の駒澤治郎左衛門

玉幸の岩代多喜太

紋十郎の朝顔





貨百チタコ

うごそもでんなはのものの子

うろそもでんなはのものの子

橋 齋 心 阪 大

店服呉合十



プロシイルマ

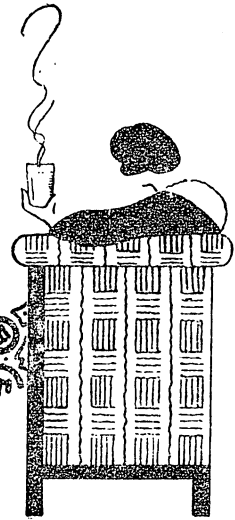
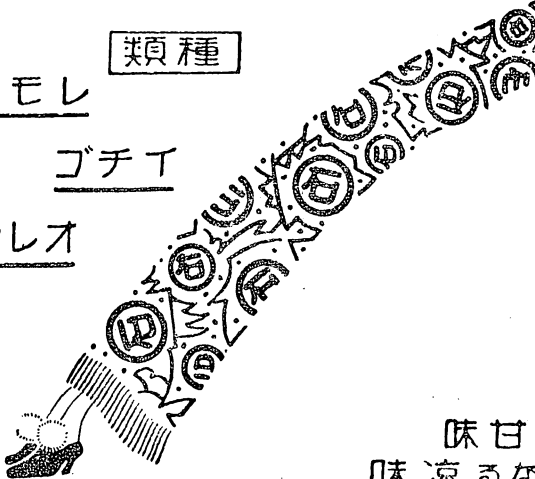
一杯の清涼飲料
の素

種類

ンモレ

ゴチイ

チンレオ

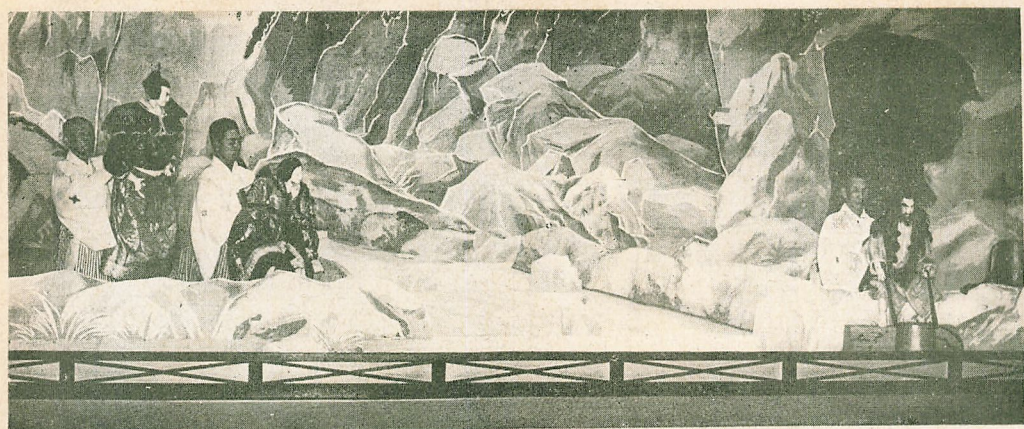


卓越せざる甘味
爽快なる涼味

大阪府東区淡路二丁目

丸石製薬合居会社

大阪本部 三バニ 四六八



(上) 「釋迦如來誕生會」

悉多太子難行の段

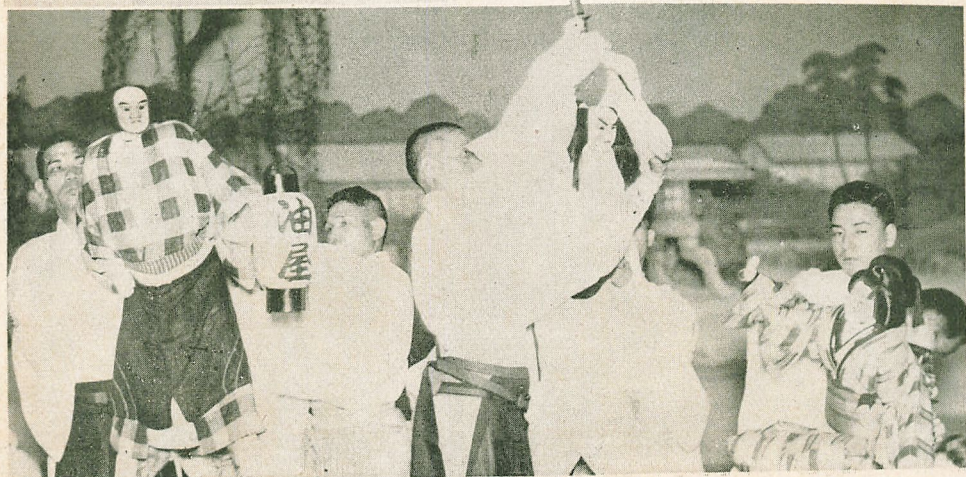
榮三の悉多太子・紋十郎の耶儉陀羅女・玉七の烏陀夷

(中)は榮三の悉多太子

(下) 「伊勢音頭戀舞」

油屋十人斬の段

紋十郎の女郎おこん・玉松の福岡貢・門造の料理人喜助



樂天地七月の新派劇

「雲の叫び」

(上) 第八場 賞品授與式

芳野の高山中尉・厚良一の棟梁岩五郎
木下の藝妓露香

(中) 第六場 飛行研究工場

都築の龍直也・木下の藝妓露香

(下) 第一場 梅の庭菖蒲園



茶

西區みさわす町

坐半

南詰所三十三番



に粧化淡な楚清

粉白水園御新

色櫻・色肌・白純

錢十五各



園蝶胡東伊 鋪本

大阪市東成區鶴橋南之町一丁目



桃谷印刷株式會社

電話天王寺(77)

二六七〇番
二六七一番

大阪市東區農人橋二丁目十二番地

合名
會社

大阪橋本組

電話 東

特長一五八〇番
特長一五八〇番
二六五五番

支店 東京市麴町區丸ノ内二丁目六番地

電話丸ノ内特長四七八〇・四七八一番

支店 小倉市大阪町十丁目（電話四三〇）

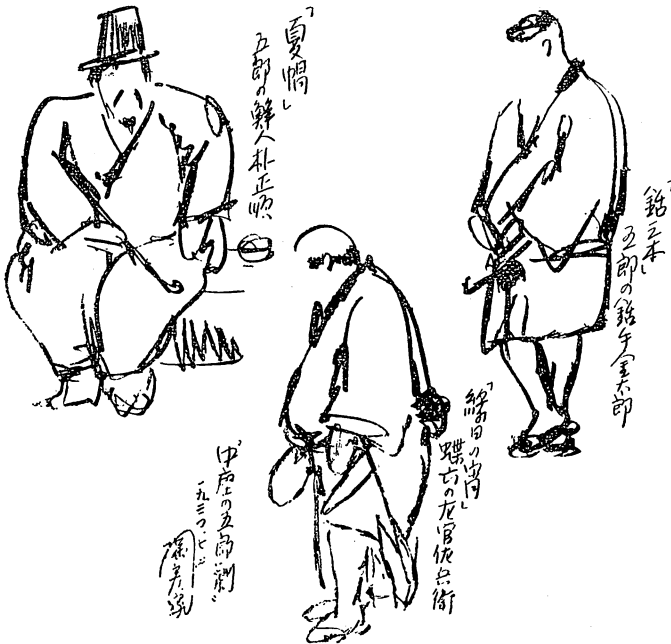
誌雜・究研劇演・刊月

七
月
號

演 類 通

第
五
年

輯 六 十 四 第



第二回「さかえ日」に就て

白 井 松 次 郎

第二回「さかえ日」は、幸ひにも柴田大阪府知事の御協賛と御懇篤なる御指導を賜り、去る六月二十六日、道頓堀、千日前の四劇場に大阪府下カード階級者六千五百餘名を迎へ、盛大裡に開催するの光榮に浴し得て、私の面目これに過ぎたるは御座いません。

この度は「暗い世相に明るい芝居」をモットーに、各方面委員諸氏の御幹旋にて、比較的芝居には縁遠いカード階級者の慰安日にあて、四劇場を無料解放致しました。中座は鴈治郎一座の「先代萩御殿」「引窓」を上場、浪花座は第一劇場の「三人の母」「マツ」を、角座は家庭劇にて「マネキン旅日記」「弟の幸福」「馬鹿野郎」の三篇、樂天地は近代座の「紋喜代哀話」に映畫等を上場して午後五時閉會致しました。

當日は柴田大阪府知事を始め半井内務部長、大谷社會課長がわざわざ御出席下さいました他、こ

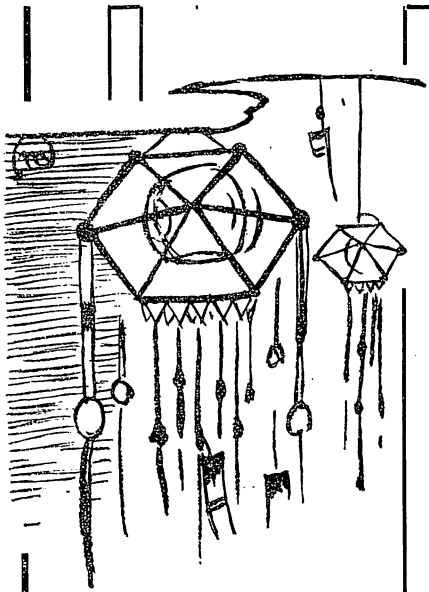
の催しを親しく視察のため鹿兒島宮内書記官並に樞密顧問官金子堅太郎子爵御一行が來阪、また林市藏氏を始め、森下博、中山太一、伊藤萬助、岡島伊八、城戸三越支店長等在阪名士の諸氏も御來席を願ひ、私共の微舉に御賛同を下され、感激裡に意外の好成績を治め得ましたことは、大正八年七月に催しました第一回とあはせ、無上の欣幸とするところであります。

×

「さかえ日」は私に一つの處世訓を與へてくれました。これは第一回當時に享けた尊い體驗ですが、當日終演真近に俄雨が降り、これがため歸途は感興を殺れ、この企てが無意義に終りはせぬかと、當時の知事林市藏氏も同じく憂慮されまして、人を四方に馳せ市内の小學校と、傘屋から狩集めた傘にて充分用を足すことが出来ましたが、數日ならずして傘は全部劇場に返されたこの物堅い徳義心にはいたく感動され「眞實には眞實が酬ひられる」の信念を深刻に與へられました。またこの度の第二回では連日數十本の感謝狀を賜り、招待者諸氏の嚴肅なる態度とその律義に自ら恐縮して居ります。

×

尙末筆ながら、これが具體化に付き、終始多大の御援助を下さいました府當局及び御幹旋の諸氏に深く感謝の意を表する次第で御座います。



作 戲

幽 靈 漫 談 會

高 谷 伸

人・所・時・

盆の丑満刻

六道の辻

お岩、かさね、お菊、小幡小平次、正直清兵衛、根津右衛門、山家清兵衛、菱川重信、鎌田又八、菊野文彌、清水清玄、法界坊、紅養上人、高山樗牛、岩藤、時鳥、宮木、お薦、佐倉宗吾、妻おさん、倅彦七、同徳松、娘おとう、平知盛、お露、お米等。

大太鼓にてドロ／＼を入れ一同現れる。

知盛 抑々これは桓武天皇九代の後胤平知盛幽霊なり。思ひぞいづる盂蘭盆のけふのよき日に方々を集めてこゝにさまざ

まの歌舞伎舞臺の幽霊話めぐらさん。

右衛門 いかにも知盛公の仰せの如く、かく芝居の幽霊ども一堂ならぬ六道の辻に會せし上からは、日頃の怨みは申すに及ばず、婆婆地獄にて目に餘る事どもあらば語りあひ。岩藤 又めいめいが身の上の懺悔話や憶ひ出を集めし骨のその數ほど語りあかすでござりませう。

知盛 やあやお菊。盂ならぬそれなる皿にて、一献汲まん持参いたせ。

お菊 この皿ゆゑに無慘にも井戸に斬り下け殺されし、怨みは深き鐵山どの。

知盛 そのセリフは舞臺のこと、こゝは親しき幽霊同志、仲間賣りは無用にいたせ。その隅の方に居る家族づれの者、その方は何者ぢや。

宗吾 恐れながら知盛様へ申上ります。私めは下總國佐倉領二百八十九ヶ村の村民共に代りまして直訴をいたしました佐倉宗吾め、これに控へまするは女房子供でございます。

知盛 宗吾か。よく存じ居るぞ、以前は東山櫻莊子の名題で朝倉當吾とも申したな。この頃娑婆にては日本最初の農民劇など、申し、なか／＼もてゐる様子ぢやな。娑婆の景氣は如何ぢや。

宗吾 あちらもなか／＼賑かで、こちらの針の山、無間、血の池などの向ふを張りまして、失業地獄だの交通地獄だの、受驗地獄だの地獄ばかりで、さながら別府へでも参りましたやうな景氣でございます。

知盛 地獄の外に何か流行りものはないか。

宗吾 流行と申しますと、麻雀、カフェ、小唄などで、

知盛 こりや宗吾、その方プロ派のトップをきりながらカフェ麻雀など、いふものを如何いたして存じ居るぞ。

おさん こちの人に限つてカフェ通ひなどはいたしません。迷ふて出ますのでさへ、親子五人づれ、決して離れはいたしません。第一そんな所へ参りましたら妾が承知いたしません。これは、劇場と軒をならべて、カフェや麻雀クラブがござり

ましたので、つい見憶えたのでござりませう。

宮木 して、その小唄とは妾のうた白桔梗のやうなものでござりますか。

彦七 そんなものではございません。東京行進曲や祇園小唄鴨川小唄アラその瞬間よといふやうな類でござります。

おさん これ、はしたない。いつのまにそのやうなものを憶えやつた母が赤面するわいの。

知盛 吐るな吐るな。若いものにはありがちぢや。そちの忤なとはよい方ぢや、娑婆には不良が多いとのこと、致盛なども都大路を漫步させたら、どんなことになつたも知れぬ。とかくモガモボが多いさうぢや。

法界坊 モボモボとさう安く踏んで頂きませぬやうに。

知盛 誰かと思へば法界坊、モボと申してもその方はモダンボーズぢや。

法界坊 モダンボーズでも、モボの端くれで、小唄の一つ位は唄ひます。

重信 雲にかけはし霞に千鳥といふ唄ですか。

法界坊 ちがふ／＼そんな古いものでなし、最も新しい所を、失業地獄は我慢がなるがナリエ、越すに越されぬアノ大晦日………交通地獄は早い性根だ。エロ事

お薦 面白い坊さんでございますね。

法界坊 ヘエ、失業地獄救済、鼻の下食ふ殿の建立、お志は

ござりませぬか。

お薦 エ、まあきかない。

清立 法界坊、法界坊。

法界坊 ヘーイ。なんだ清立か。

清立 お互ひに煩惱の犬追へども去らずで、迷ひこんだが、自

分ひとり色が色男、イヤ色坊主のやうにふるまふなよ。

紅養 戀ゆえ迷ふはおぬしばかりか。この紅養もお秀をば小姓

に仕立て、寺へ置いたが、黒田の殿とのいざこざで、慘たら

しう殺された。しかし、女はよいものだな。

小平次 生麗い坊さんたちだ。いづれを見てカスばかり成程

幽霊仲間には河内山のやうな赤い坊主の役はねえ。

知盛 騒がしい控えぬか。坊主の癖になかく甘いやつだ。し

かし娑婆ではエロだの色だのいふことが流行いたして居るや

うだが、どんな風ぢやな。重信、そちは講拙きぢや、説明い

たせ。

重信 お見出しにあづかつて恐れ入ります。婦人の美と申しま

すは第一は容色、髪などを誇つたものでござります。

お岩 その髪を梳く櫛と共に毛は抜け顔は膨れあがり。

お薦 アレー。

清兵衛 静かに聴聞いたされよ。

重信 然るに世は末世に及ぶと共に、丈なす黒髪の美しさを忘

れ肉體の美など、申し裸形の女の姿など喜び、われら世界に
見る、すらりと丈高き姿態より豊満と稱し、肉つきよき女を
賞する傾きあり、美の標準次第に下向し、今日にては脚をも
つて美の標準とするなど、美的鑑賞の下落、今日の如き甚だ
しきはござりませぬ。

知盛 脚の美とは如何なものぢや。

重信 それを説明いたしたいは山々でござりますが、この世

にはそれにあたるべき婦人はござりませぬ。

知盛 なに現在の美の標準によるべき美人は無いと申すか。

重信 まことに恐れ入りますが、幽霊と達摩とは、脚線美を

云爲する資格がござりませぬ。足そのものが無いのでござり

ます。

女一同 (大聲にて) うらめしい。

知盛 口癖を出し居つたな、靜かにいたせ。

又八 なる程、足が無うては是非がない。

かさね しかし、妾は前世でこそ、跛で苦勞もいたしました

が、こちらではみんな平等、一向に鎌ひませぬ。

知盛 くだらぬ洒落を言ふな。

突然カラコロと下駄の音がする。

知盛 ハテ不思議、下駄の音がする。

重信 幽冥境を異にして下駄の音とは思ひもよらぬ。讀めた。

知盛公。牡丹燈籠のお諸お米の靈でございます。

「ギブス固煉齒磨」



本品を使用すれば幼時より老年に至るまで歯牙を完全に保つ事が出来
ます。
何故なれば、ギブス煉齒磨は刷子がとどかぬ微細な間隙へ侵入して常
に齒を美しく清潔に齒を保つ事は取りも直さず身體の健康を計るのであ
りますから毎日二回必ずギブス煉齒磨を御用ひ遊ばせ、さすれば氣分は
爽快になられます。

本品は美しきアルミニウム罐入りで桃色の固煉製であります有名な
百貨店、藥店及化粧品店に賣つて居ります。

大形 壹個 金七拾錢 大形中味 壹個 金六拾錢
小形 壹個 金四拾五錢

ロンドン・パリ
ディ・エンド・ダブリュー
ギブス株式會社
日本代理店 株式會社 横山商店
東區豊後町三番地

知盛 如何にもあの二人ぢや。下駄の音がする以上幽霊にも足があるぞ、脚線美を発見する時も近いぞ、誰が行つて二人の女を迎へて參れ。もしや戸口に御符でも貼つてあつたら誰か行つて剝がして來い。梯子は番所の裏にあるぞ。
法界坊 ヘイ女子様のお迎えなら愚僧が行つて參りませう。
知盛 なに、法界坊、そちが迎へに行くか。
法界坊 ヘーイ。

知盛 そちのやうな助平が參り、もし女の脛の白きを見て、心を奪はれ、久米仙人にあらねども通力を失ひ、又もや奈落へ墜ちたる時は何んとするぞ。
法界坊 御心配には及びませぬ。奈落からなら、れんぢやくを脊負つて仕掛で、宙釣りになつて上ります。

(無斷で舞臺高座などにもちだす時は、たゝることあるべし)



芝居のスゴサ

山上貞一 ◆

久しく芝居を観て、肌に粟粒を生ずるやうなスゴサを感じたことがない。これは芝居が面白くなつた大きい原因だと思ひますが、それが所謂當局の干涉の結果であれば、まづ致方のないことでせう。

いま、私はこの不可抗力に對して、どうして芝居を面白くするか、つまりスゴサを増すやうな舞臺上の功果なり演技なりを發見すべきか取敢ず机上の空論を綴つてみます。

夏芝居といふと直ぐに怪談もの、水藝もの、この水藝ものに要素として怪談味を加えるヒントになります、強ち、幽霊が出現するからと言つて、スゴイに限つたことではない。

幽霊といふものがあるか、科學萬能の世の中に心理學を研究するまでもなく、確實に現存すると斷言出来るのは一人芝居國に於てであつて、その幽霊の代表委員を四谷左門町の民谷伊右衛門の妻お岩が勤めることは、文政八年七月江戸中村座で演じ

られた「東海道四谷怪談」で三代目尾上菊五郎が紛して以來、昭和の今日まで、正に重任に歴任の態で失業知らずだ。

この「四谷怪談」の芝居にしても、お岩の幽霊そのものがスゴイのでは決してない。大南北の作家としての藝術味といふと大層だが、彼が惡魔的に筆にした、血腥さや骨をしゃぶるやうな慘酷な筋と雰囲気と方法とがスゴサを持つ譯で、お岩の幽霊だつてヒョロ／＼と歩き出しては幽霊としてのスゴサはない。さりとて壁に消えて佛壇に現はれ、天井裏に吸ひあけられて提燈掛けをするのは、決してスゴサでなく、曲藝に近い愉快さがある。小平とお岩との戸板返しにしても、肌に冷汗をもよほす前に、あれは戸板の片面に身體をく／＼り、その片面に首無しの人形をく／＼つて、首の處が穴があいてゐて……と詮索づくに考える近代人には決して凄くものではない。

すると、眞のスゴサは——芝居の持つスゴサは、それは寧ろあの藪だ、みにある。今のやうにある寫實でなく、定めて昔は木綿の黒布を一面に張つた前に、申譯ばかりの竹でなく……簀であつたらう。それこそ觸ればバサ／＼と鳴る簀が粗雑に竝べられて、後の黒布が多分に見えてゐる。百目蠟燭の灯が奥までとどかない。幽霊火の燒酎が釣れてゆれる。つまりこのスゴサだ。舞臺照明が完備し舞臺裝置が贅澤になつた今日、こんな古典的な舞臺を見せたら、観客は千日前が首斬場であつた昔を思ひ出して、ぞ／＼としはしないか。卓上の空論とはよく言つたも

で、梅雨にしては雨足のひどい夜、近所から聞える尺八の音を聞いて原稿を書いてゐると、勝手なことが書ける。——處が、あの尺八はラヂオだと解つてみると、こんな事を書いてゐると編輯者に吐喝られるとはつと氣がつく。

いつも怪談ものに對して感心することだが、舞臺上でこれだけ所謂道具、小道具に氣を用ゐられてゐるものはない。青い、そして椽の赤い蚊帳、これが白であつたり、水色のほかしてあつたりすると、色がナマ過ぎてスゴくない。妙なものだ。蚊遣火、あるかなしの線香の煙だから、眼が近いと見えないうが、ふんと匂ひがするとスゴサをたすける。佛壇の灯、白い生木の位牌、木魚の音がする。卒塔婆、白張の提灯、月はとがまにかざる。お岩には有名な髪すき場がある。小平が買ひに行く油壺なんて實に考えがこゝまで來るかと思ひ人間の智慧にも敬服する。隠亡堀の釣——この釣といふことも怪談には必要な要素だ。戸板返しがなくともあの魚籃が草の上に轉るのもスゴサを増す。あれに色電氣が這入つて顔になつたりするのは寧ろスゴサを少くするものだ。

毒藥 戸板、つゞら、これは殺人補助器で無くてならぬものだが、戸板返しは「四谷怪談」の專賣物で、考えてみれば因業なことをしたものだ。お岩を先にくつたのだらうが、あの小平を縛る時にお岩はどうなつてゐる。疊の上か土の上へ身體はもとより顔を擦りつけて、死人に口なしとは言ふが思つたどけ

のでもむごいことだ——と考える人がもし私以外にありとすればあのスゴサの七十パーセントは筋にある。

お岩様ばかりに筆がへばりついて離れやうとはしない。さては祟りだな。處で芝居のスゴサは「四谷怪談」ほど有名になり普遍的になつては駄目だ、梅幸羽左の「累」も清元のい、のどや音じめでスゴサを忘れてしまふし「法界坊」は破坊主の幽霊といふので眼新しいが、坊主憎くけりやで、あの頭髮を百日近くにした幽霊には同情が持てない。

同情の點からいふと「宇都谷峠」の盲の文彌殺しは可哀想だ。眼の不自由なものが、なるほど恨むのも無理がないと思ふと殺生な氣がしてぞつとする。これと同じ不自由者の同情は「敷島物語」の遊女敷島にも持てるが、血も見ず——即ち殺人に原因を持たず——所謂當局の制限に觸れずにスゴサを濃厚ならしめるものは死靈の祟りだ「牡丹燈籠」あれだ。

出てくる人物が妙齡の美女で、手に牡丹燈籠を持つて、美男のもとへ訪て來る。良石和尚がそつと新三郎方を覗いてみたのも單なる好意だけではあるまい。あんなに男が瘦細るのはと少しエロ的な解釋もなかつたとは云へない。單純な徳川期の人達を前に話術に巧妙な三遊亭圓朝が、靜かに讀み續けて、毎夜新三郎のもとへ乳母のお米に手をひかれて通ふお露の二人の幽霊が影も見せず、カラコロと下駄の足音のみを聞かせたと話すと場内は水を打つたやうにしんと沈まつて、鬼氣人を刺す概があ

浴衣の氣輕さ

吉本寛汀

三伏の猛暑——と書くだけでも暑さを想はれる七月、八月、芝居國にとつては全く御難月だ、舞臺に働く俳優も、興行するお仕打もだが、第一に見物が堪らない、だから夏の芝居は「涼しく見せる」といふ要素を忘れてはならない。

せめて、芝居でも面白ければこの藝術の醍醐味に浸りきつて心頭滅すれば火もまた涼しの三昧境に大暑を忘れることも出来やう、曾我廼家五郎君だつたか、誰だかの藝談に、夏の芝居の舞臺から見物の團扇づかひが波のやうにヒラ／＼動くのが目に付くが、此處ぞといふ性念場になると言合せたやうに團扇の動きがピツタリとストップする、といふやうな話があつたが、其處まで見物の心を捉へ得られ、ば舞臺と観客席との呼吸が渾然と溶け合つて、假へ瞬間的でも暑さといふ感じを征伏したことになる。

だが、これと反對にサツパリ興味の持てない芝居をだら／＼

と、もしくは嫌味につぶりに演られたが最後、感じだけでも暑さ百パーセント、人殺し劇、熱殺劇、おうい助けて呉れ：だ。人殺し劇と言へば從來の習慣で夏狂言としては身の毛の竦立つやうな怪談もの、本水、宙釣、早變り等を應用した所謂ケレンもの、それから「伊勢音頭」や「夏祭」のやうな凄慘な殺し場のあるものなどが多く擇まれ、身心の機能が生理的に鈍感になつた夏の見物の氣持を刺激して、無理にも興味を持たせやうとするのが例である事人も知る通りで、これにはそれ／＼理由のある事だが、實は怪談も合理化時代の今日では少々アナクロの觀があつて、承知せぬ見物が多いし、殘虐な殺戮劇は保安課の小父さんの目から許されずして漸次凡化されて行くに違ひない。

ケレン物は近代では故人齋入翁が得意とした、その後、いま病んでゐる右團次君が養父譲り——今の右團次君は齋入翁の實子ではなく齋の上からの貰ひ子ださうだ——のお家藝として、「四つ家怪談」や「鯉つかみ」やその他で變つた舞臺を見せるが藝域の廣い延若君が往くところ可ならざる無き筆法を以つて早替りなどの器用さを見せるほかには大歌舞伎ではあまり演らなくなつた、こうして芝居の本質以外のものを賣物とする演出法も、軽いインテレストを享樂しやうとする夏の芝居に適はしくもあるが、同じケレンにしても、もつと科學的に進歩した機構によるとか、スポーツ的修練による超人的の動作を基本にする

とか、近代人の獵奇癖を満足させるやうな、ダンゼン素晴しいものでないと、明治時代のケレンの繰返しでは、恐らく興行的効果は薄いものとなつてしまふだらう。

次に夏の劇場の構造との關係だが、換氣、通風は勿論、出来得べくは氣溫の冷却裝置にまで及ぼして呉れたら、夏の見物にとつて、また俳優にとつて餘程幸福が惠まれやう、科學の力は早晩さうなる時期を齎して、夏の行樂は「山へ、海へ」のほかに「芝居へ」を大威張で叫び「中座へ避暑に行つた」といふやうになると思ふが……。

少し碎けて、夏の劇場の理想も私は言はせれば、村芝居だ、

簾張りや天幕の隙から月も星も洩る小屋掛のあれだ、夜涼を追つて露しとぐの煙道を、團扇片手にブラリと觀に行く、あの涼

しさと氣輕さが値打ちだ。

野外劇もい、蟬しぐれ降るやうな翠微の中の野天劇場、風

そよぐと袂を吹く夜の河原の開放舞臺、大自然をバックに、

大道具に鳴物を使つての野外劇は夏のものだが、しかし、効外

電鐵などが乗客吸引策にやる催しの、押すなぐの雜踏は困る

し、内容もチャチ郎兵衛なチャンバラレヴューでは……怨敵退

散！だ。

さればと言つて舞臺劇では、この暑さに生硬な「考へる芝居」

と取組みたくない、矢張り「見る芝居」の程度で宜い、こゝに於

てか軽く、明るい喜劇の存在によつて夏の見物は救はれやう、

お、五郎君よ、淡海君よ、呪はれたる夏を蹴飛ばす清涼劑を頼

んまつせ。

要するに夏の芝居はスマートな浴衣の氣分でいゝ、エロ使ひのあらひ此ごろ、素肌を透かした「うすもの」の感覺でもいい、……として置かう。

「九頁よりつゞく」

つたとは、さもありそんなスゴサだ。

怪談ものが、怪談一筋ではいけなくなつて、宙乗りをして興

を添えたり、水藝を手傳はせたり、早變りを加えたりしたこと

は面白さを増したかは知らぬが、スゴサは削減したと言つてよ

い。——とはこれは第一義的な議論で、よく解釋してみると、

水藝や宙釣や早變りで眼先きを愉快な方へ轉換しないと、とて

も怪談一本ではスゴくて、芝居を見てゐるやうな氣がしない時

代があつたに違ひない。これは南北の「東海道四谷怪談」を讀

んでみるとよく肯定出来る。

「播州皿屋敷」で皿の詮議に執念を残したお菊の亡靈が「一枚

二枚三枚」と恨しげに皿をさぶめは「うらめしや伊右衛門どの

……」と言はないだけに物凄。

このスゴサも直觀的な場合よりも、傍流的な場合に多いのと

幽霊だけに、執念の深さにスゴサを覺える。鈴木泉三郎氏の「生

きてゐる小平次」はこの點で代表的な執念を見せて、生き代り

死に代りの思ひを深くする。

楠正成や廣瀬武夫の「七生報國」は怪談ではないが、人間

の持つスゴサを感じる點で深刻なものがあつた。芝居のスゴサも

これだと、卓上の空論はやつと落着點を見つけて筆を擱く。

◆夏芝居の印象◆

「雨奇晴好」

並山拜石

「梅雨とは云ひながら、日々鬱陶敷く……昔の習字手本や作文の常識を思ひ出させる此頃の天候、いやもう、日々鬱陶しきを、降りみ降らすみ、五月雨の、そのやうに、書き流したり、書きしぶつたりする。

○ 四季折々の芝居見物にも、私は、夏の芝居見が一等好きだ。中車階級の仁木彈正が、煙硝の煙を浴びて、一卷を口に、セリ出した時の、あの凄味、それを、ハケ間敷く藝術的に玩味鑑賞せよと云ふ一味には、尤も棧敷の横の防火堀や、舞臺の隙間から目障りのものが覗いてゐるの

や、さては見物衆の咳拂ひなどに至るまで、邪魔になるのはあたりまへだらう。また西洋の流れを汲んだ模倣劇になるとその必要もないのにも思はれるもの、

も、開幕と同時にパツと電氣のスイッチを切ると見物席俄に暗黒、芝居ソツチ除けの喰ひしんほう、「劇」に對して不忠な胃擴張病者、忽ち箸で撮んだ卵子燒きを戸惑ひさせる。この見物席「暗轉」も矢張り、さつき述べた藝術的鑑賞派からは舞臺集視主義者として異母弟位に取り扱はれるだらう。孰れも尤もだ。批難すべき點は毛頭ない。だが、在來の日本の芝居が踏襲して來た、無知にして明るい、親しみのある劇場内の雰圍氣も、また愛すべきだ。宿醉の暖氣のやうにイヤに藝術々々と云はないで、花道を懸橋として役者も見物も共に楽しむ娛樂場として劇

場内を取り扱つても、劇其物を藝術的に墮落さすものでもあるまい。劇場を昔の形式にかへて、劇が藝術的に墮落するものならば、唯一人を例に取つても、團十郎は名優ではなかつた筈だ。ヒイキから送られた引幕を幕間に取りかへて見物の目を樂しますも結構、舞臺の口の一文字や、見物席の天井に五彩を色どる旗が、縦横にかけ連ねてあるもよし、上下の棧敷の手摺に、役者の定紋入りの提燈が並んでゐるのも風情がある。その他、そうした飾りつけを數へたてたら限りなからう。特に夏の芝居——棧敷の襖や板戸が取り外されて、暖簾と取り代へられた時觀世水、麻の葉雲の模様崩し、など、その色合の撰り好みは別になけれど、白と淺黄との交錯など目出度いもの。それが風にながられて、棧敷に居並ぶあでやかな人達に戯むれる情景、涼味万斛、掬んでも盡きない藝術の泉。……其處で私は、夏の芝居見が一番好きだが、今はさうした風趣を味ふには、

あまりに堅苦しい劇場内だ。——暖簾は或は昔のまゝに懸けられてあるかも知れない。また風に靡いてるやう、水道の雨も降らされてるやう、が、それにしても周囲の情景の變り方。舞臺の人、棧敷の人、椅子の人のあはたゞしさよ。そのあはたゞしさの裡に居て、椅子を持たない立ちん坊が、室に居る思ひをしながら、額の汗を拭き拭き、伸び上り、伸び上り舞臺に視入る。それも長い四五時間。粗略に出来ないホンの芝居愛好者、さてもあはれにノンキな「五十銭」

○
「上演禁止」が、大阪で瀬々として起る曰く「好色五人男」「曲馬團の娘」「民谷伊右衛門」エトセトラ。此處で、その可否をあけつらうのは、この漫筆の本旨ではない。だから、それには觸れない。唯それに以て非なる物語がある。チエエホフは、恥らく彼れの處女作であらう。習作戯曲「街道筋」を、一千八百八十四年に書いた。ところが、この「街道筋で」

は發表されずに、一千九百十四年に、檢閱官廳で發見されて、遂に公にされた。この原稿は、もと、彼が「ア、チエエホフ」と云ふ雅號で、時の檢閱官の許に差し出されたものであつたのだが、パツスしなかつたので闇に葬られ、やがて三十年も経つて、娑婆へ出されたものである。時の檢閱官は、その原稿の上へ、自分の意見を、かうかきなぐつてゐた——「鬱陶しい穢い作——不許下」三十年を経て、世の中の光を見たこの「街道筋で」は、チエエホフが戀人に對する記録である。そして彼が廿四歳の時の作である。彼が啖血した前年である。この作は、彼が好んで描く中産階級ではなくて、それこそ望息するやうな雰圍氣の中にあつて深刻な神秘と、火酒に對する熱烈な渴望とを描いたものである。見捨てられた人達や、ドン底生活を營んでゐる人達を取り扱た點に於て特色のあるものである。

○
チエエホフ序に、彼が「海鷗」の上演

された時のことを書いてみやうと云ふのは、日本では、そうした出来事は、私は聞いた事、見た事もないからである。

彼が「海鷗」を書いたのは、一千八百九十四年、メリホフオで暮してゐた折である。その作が一千八百九十六年に、ペテルスブルグアレキサンDRINSKY劇場で上演された。大失敗だつた。俳優達は役柄を辨へなかつた。劇場内は「退屈と混亂との不自然な狀態」で一杯になつた。その作者に取つては、その有様を見ては堪へられる筈はなかつた。誰にも會ひたくなくて、演技が濟んだあとは、人目を忍んで、その夜のうちに、コツソリメリホフオ村へ走る汽車の中にあつた。翌日の新聞の諸評は、的が外れてをり、愚にもつかぬものであつた。さうした経験を持つてゐる彼は、その翌日（一八九六年、八月十八日）彼の妹に、こんな手紙を送つてゐる。「私はメリホフオに今發つところだ。明日午後一時と二時との間に其處へ着くだらう。昨日の冒険は驚き

もしなければ、大して失望もしてゐない
 總稽古で、それが解つてゐたからだ。」
 と云ふのが、これだ。また、その弟のシ
 へイルにも、かう書いてゐる。「海鷗は
 ペシヤンコになつた、凄まじい音を立て
 て倒れた。劇場では、不面目と混亂との
 何んとも云ひやうのない壓迫的な張り詰
 めた感情があつた。俳優達は言語に絶し
 た愚劣な演出をした。(脚本など決して書
 くべきものでないと云ふのが、その道徳
 だ」と、以て作家の心象を知るべしだ。

越へて二十二日にその劇の關係者サフ
 オリンに送つた手紙にはかうある「君は
 僕を女らしくもあり臆病者だとも云つた
 なんと云ふ誹謗だらう。僕は演技後もよ
 く寝て、不平も鳴らさないよ、僕が臆病
 者だつたら、新聞社から新聞社、俳優か
 ら俳優へ走つたらう、そして神經的に、
 考へ直してくれと懇願したらう、また神
 經的に、無用な書き直しをしたらう、な
 ほまた興奮し冷たい汗を流し、四苦八苦
 して、私の「海鷗」をかれこれ辯護して

二週間なり三週間なり、ピーターズブル
 グに滞在したらうが……「海鷗」上演後
 の當夜、一緒に居た君は、逃げ去るのが
 上策だと云つたではないか、しかも翌朝
 「サヨナラ」の手紙を君から貰つた。どう
 して僕が臆病風を吹かしたか？ なあに
 僕はあるものを提供して、拒絶された。
 人間として、冷靜に然かも合理的に行動
 したまでだ。行くより他に何にも残され
 てゐない。さうだ僕のパニチーは傷けら
 れた、だが、それは晴天の霹靂ではない

とは分つてゐたらう。僕は夫敗は豫期し
 てゐた、その準備はあつた、前以て君に
 十分豫告して置いたように。
 ……僕はまた一つ戯曲の作に取りかゝ
 らうとしてゐる。僕はもう疲苦も感じな
 ければ、イラ／＼もしてゐない。(以下略)
 かうした「海鷗」は、俳優が、その作
 を會得した時には大なる成功を勝ち得た
 のであつた。

雨季晴好——劇界の雲行き如何？

(五、六、廿八、記)

二百餘頁なら
 脚本専門雜誌



上演脚本の發表と新進の紹介

毎月一回發行

一部五十錢

毎月一般より脚本を募集す

舞臺戯曲社

難波撰記

高橋義信

○ この間、近代座の野球チームが、強敵Tクラブと戦つた時のこと、四回の裏、近代座の守備に破綻を生じ、内野外野にエラー續出全軍麻の様に亂れて、殆ど取捨する暇のない破目に陥つた。

この事から投手Hは、すっかり氣を腐らせて、スポーツマンとして許すまじきプレー振りを見せ、全軍の士氣を頓に阻害し遂に試合は無慘なる敗北となつた。これが問題、直ちに野球部員の緊急集合となり、Hの除名、團體の統正が議せ

られ、遂に私までが乗り出さねばならなくなつた。

私はその時こんな事を云つた。

「Hの態度は丁度俳優が舞臺を投げ

るのと同じだ。自分

分がいくら懸命に

やつても他のもの

があんなでは仕方がない、自分には技術

があるんだが——の一種の見榮は賤しむ

べきである」

そのあとで私は樂屋に貼紙をした。

「打上芝居は氣がゆるむ、打上げなるが故に熱演」

○ 去年の冬、名古屋で芝居をした時、私たちの芝居

を觀に来て呉れた曾我廼家五郎氏と席を

共にして、いろいろ教示をうけた。話の末、私は質問した。

「失禮な申分ですが、若しあなたは行詰つたらどうします」

すると其の答が

「私は舞臺で十文字に腹を切ります。そしてこれが本當の喜劇だと怒鳴ります」

私はこの人には眞から頭が下る。

○ 三月から大阪で芝居をしてゐる。いつ迄たつても満員々々の盛況だ。久しぶりの出演である事丈けがその原因ではない。

私の頭は冴えてゐる。次から次へといふ知恵が生れる。

私は庄野サンに云つた。

「技ばかりの時代ではなくなりました、頭の時代ですね」

○ 灯、

ビールの泡、

ジャズ、

川、

女、

濃藍の帳に包まれたこゝ、
道頓堀の夜。(そして芝居をはねてから
の私たちへの強い誘惑)

大阪のこの一劃は、そして集ひ寄る人々、それらは一種の熱病にうかされてゐるもの、やうである。

大阪は時折り来ていゝところである。
でないと有難さがわからない。でないと性根がくさる。

○ 「芝居に映畫を何故採り入れたか？」
——と私に尋ねた人がある。

映畫の表現形式を舞臺に取り入れる試みもいゝ、創造もいゝ。然し徒らに場面を移動して大道具泣かせをしようより、映畫と云ふ新武器を利用すると云ふ點に新しい開拓がある。

だが私は
私の映畫應用劇は今私たちがやつてゐるもの、謂ではない、本當のものはこれからお目にかけらる——と敢えて云ふ。

○ 或る人が、夏の芝居はどんなものかい
か？ と私にたづねた。

劇場を涼しくすること、芝居に水を使用すること、斯うした事は崩れゆく大夏に一本の支へを入れるより愚かしい事だ。

私は答えた。
「見物をして吾れを忘れさせることが、一番の夏芝居だ」。

○ 「見物をして、觀てゐるうちに一切を忘れさせる」
これが芝居の使命である。

金を多く取る俳優の技藝、好い背景、美しい衣裳、文士の脚本上演——だけではいゝ、芝居とは云へない。

見物をして一切を忘れさせる技術であればいゝ。夫は劇團の精神から生れる。

○ 芝居道で一番悪いことは
「諸君これはどうだらう、この脚本は、この演出は、この技藝は……」——と裸

になつてブツツかる人のない事である。

此の精神に缺けてゐる者の集りである
大阪の芝居は明日が無い。

○ 演技の優劣批判は、フットライトから奥のものではない。

觀客の中にある。
私は大衆の魂にとけ込むものを求めて汗して不斷の歩みを續けるであらう。

○ 舞臺俳優は地方へ出る事を不名譽と思つてゐる。愚劣根性であると思ふ。この氣持ちは演劇が映畫に浸蝕された遠因にもなる。

劇は都會人士の専有物であつてはならない。人間すべてのものであり度い。都會の芝居たり、地方の芝居たるはその實力に依る。

○ しかも地方には晴れた大空と草の繁つた大地がある。そこには新鮮な生命力を汲むことが出来る。

地方の觀客は本當に芝居を見ようとす。私達の感激はそこにある。そして私

は地方の観客の白紙を此上なく愛する。
近代座は東京の劇團であると同時に村落の劇團である。

○ 劇團はよき團結である。

群集ではない。劇團の成長は、よき團結とよき統治者によつてなされる。よき統治者とは團體の精神を代表するボイントである。

そして劇團とは比類なき演出を生むもの、謂であり、同時に特殊の色彩が必要である。色彩は個性である。個性は人格である。

近代座は近代座としての鮮明なる色彩を持つてゐる。これが近代座の存在である。

○ 友人が云つた。

「高橋は夢に生きる男だ」

そうかもしれない。私は常にあこがれてゐる。夢は夢でも私の夢は幻ではない、明日を期待する希望だ。

山高きが故に敢て登らんとする。高橋義信である。

○

一時、定規を逸したかに見える映畫演劇の燎燭期の出現は、無自覺なる子弟を禍した。そしてその事は俳優の質を害する事になつた。俱に近頃の俳優志願者は益々その質が低下したかに見える。これは所謂俳優熱の冷醒した事の實證ではあるが、一方演劇當事者にとつては一の困難であるとも云ひ得る。

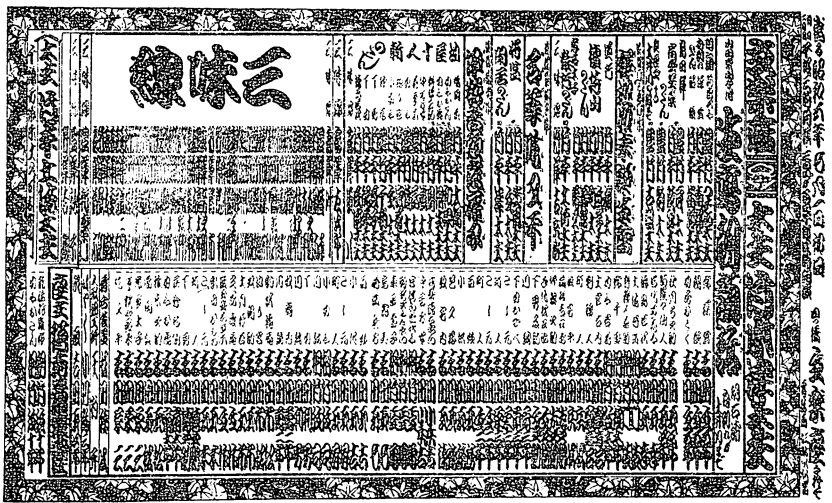
○

新派創草三十年の歴史は華かだ、この名の新しい創造の多難を想ふ。然しこの困難は、當然眞實なるもの、時代のものには襲來しないであらう。

○

友、澤田正二郎君は好い手本と、悪い手本を俱に残して逝つた。
後から歩むもの、危き足取りよ。

アサヒビール
清涼飲料
シンボルシンロト
大日本麦酒株式会社



山田案山子作

生寫朝顔話

宿屋より大井川まで

豊竹古鞆太夫
三味 鶴澤清六

〔床本〕 宿屋の段より 大井川の段まで

何國にも、暫しは旅と綴りけん昔
の人の筆の跡、徒然佐ぶる假の宿
夜の襖の透洩りて、風に瞬く燈火
の影も淋しき奥の間へ、立踳る治
郎左衛門。何心なく座を占めて、
不圖目に付く衝立の、張交の歌讀
下し。

詞ハテ心得ぬ、此の賄交ぜの地紙の
歌は先年山城の宇治にて、秋月が
娘深雪が扇に、某が、又逢ふまで
の簾にと、書いて興へし朝顔の歌
其後圖らず明石にて、船繋りせし
其砌、琴に合はして深雪が節付け

折節思はぬ互の出船、飽かぬ別
れを悲しみて、女の手づから、
我船へ投込みし此扇。然るに今
又此家に、思はずも此張交ぜ
ア何者が諷ひ傳へて、はからず
東の驛路に、見るも不思議と獨
言、其折からの忍ばれて、詠め
入つたる時しも有れ襖押開け
右衛門、小腰屈めて入り來れば、此方も扇
押隠し。

詞オ、亭主 先刻は扱々きつい働き、危き難
を遁れしも、全く其方が志、サ、是へ
ハ、冥加に餘る御言葉、エ、最前此方へ參
る砌何か三八密々話、合點行かずと忍び聞
けば、癖癖藥を茶に交て、彼方様へ差上げ
んと、ア、コリヤ、サアマ恐ろしい、巧み
エ、憎さも憎し、直に申上げうとは存じた
れど、夫てはどの様な科人が出來うも知れ
ぬと存じ、へ、幸ひ先日慰みに求めました
笑ひ藥、ヤコレ幸ひと、痺れ藥と取替へた
を、知らずに呑んだ先刻の時宜、此後とて
も旦那様、御油斷は成ませぬぞへ。ホ、其
儀は某も疾く承知致した、マ夫は格別、

此衛立にある朝顔の唱歌は、何人の手跡、何ういふことから御身が手に入りしぞエ、夫てござりますか、其歌についてマ哀れな話。エ、元は中國邊歴々の娘さうなが、何やら尋ねる人が有るとて、親元を家出し、夫より方々と流浪の上、果はとう／＼目を泣潰し、跡の月までは涼松邊に、其歌を歌ふて袖乞ひ、所に又國元から、所縁の女子が尋ねて來て逢ひました、が其女も程無う病死、夫から又獨ぼし、此邊まで其歌を歌ふて歩きました、何が盲目でこそあれ、器量は真し、聲は真し見る程の者がいちらしが、朝顔々々と言ふて、其歌を知らぬ者はござりませぬ。私もあまりの不惑さに、此宿に足を止めさせ今では宿屋宿屋の御客の御、何とまア不仕合せな者も有るものござりますと、涙片手の物語も、心に群々應ゆる駒澤、若し言ひ交せし我妻かと轟く胸を押鎧め。

詞ム、夫は扱哀れな話、身も今宵は何とやら物淋しい翹散の爲其女を、呼寄する事はなるまいか。イヤモ何が扱て易い事、只今呼びに遣はししよ、御慰みに琴か三味ム。

何分宜きに頼み入ると云ふは仔細の有るぞとも、知らぬ佛氣徳有衛門、尻輕にこそ立つて行く跡へ相役岩代多喜太、のき／＼と座に直り。

詞ヤア駒澤氏、嘸御退屈でござらう。コレハ岩代氏、殊の外早い事でござると、上へは解けても解けやらぬ、前垂掛けの下女お鍋、次の間に手を仕へ、

詞申し／＼只今朝顔殿が見えました、是へ通しましよかない。ナニ朝顔とはそりや何者だ。アイヤ、此道中で琴三味を弾き、旅の徒然を慰むる晉女とやら、拙者も何か物淋しうござれば、ちと琴でも聞かふと存じ、亭主を頼み呼寄せましてござる。アイヤ夫りや止めにされい。トハ又何故な。サレバサ、先刻身共が知晉たる萩野祐仙同席如何と云はれた貴殿、乞食をば座敷へは通されまいかい。ハテ高の知れた盲目女、萬更怪しい、ナソレ茶箱も持參致すまいと、しつべい返しにぎつくりと、言句に詰まれば減ず口。

詞ア、左程御所望ならば兎も角も、併し座敷へは叶はぬ、庭へ呼出し、琴なと三味なと

弾かし召されて、早く此場を追返されよと飽まで意地持つ執拗者、寄らず障らず駒澤が差圖にお鍋は心得て。

詞朝顔殿召しまする、朝顔殿々々と呼立つる。むざんなるかな秋月の、娘深雪は身に積る、歎きの數の重なりて、雫失ふ目無鳥。杖柱とも頼みてし淺香は脆く朝露と、消え残る身一つを、道に捨てても縁先の飛石探る足元も、危なき木曾の丸木橋、渡り苦しき風情にて、漸々座して手を仕へ。

詞召しましたは此お座敷でござりますか、拙い調も御笑ひ種、おはもじ様と會釋する顔も深雪の成れの果。不惑の者やと急り来る、涙呑み込みひかへ居る。岩代は夫とも知らず。

詞ヤア見苦しい其形で、我々が目通りへうせしたは、ム、聞及んだ朝顔めな、エ、きり／＼立つて失せ居らう。アイヤ／＼岩代氏、さうもぎどうに仰せられるな、此方に呼寄せたればこそ、思ひ掛のう、アイヤ思ひ掛け無う來た者を、叱るは武士の情に非ず。コリヤ／＼女、大儀ながら其朝顔とやらの歌、サ、早う歌ふて聞かせいと、望む心は千萬

無量、知らぬ岩代頼服し。

詞執々駒澤氏にはイヤモ強い御執心だわい。

コリヤ、目、何なりとも、エ、歌へく

サ、早くく。ハイ、ハイ歌ひますで

ござりますと、焦るゝ夫の在るぞとも、知

らぬ旨の探り手に、戀故心盡し琴。誰かは

憂きを斗爲吟の、絲より細き指先に指爪さ

へもハツ橋の、寢れ果てたる身を啣ち、涙

に曇る爪調べ。

ウタ露の干ぬ間の朝顔を、

合照す日かげの難面きに、

合哀れ一むら雨の、はらりと降れかし。

詞ム、夫を墓ふ音律の、我々が身にも思ひ遣

られて、思はず感涙致した、のう岩代殿。

如何様、琴と謂ひ器量と謂ひ、イヤモ中々

感心仕る、てイヤナニ朝顔とやらそこは

定めて冷えるであらう、身どもが傍で今一

曲、サア、所望だく、ア、イヤく岩

代殿、最う許して御遣りなさい。去りと

ては駒澤氏、身共が望みを止めさつしやる

はソリヤ意地の悪いと申すもの。イヤさう

ではござらねど、彼女も定めて疲れませう

コリヤ、女、汝もはらからの非人でもあ

るまい、身の上話も亦一興、話して聞かせ

ヨ如何だい。ハイ、能う聞て下さ

ります、お言葉にあまへお話し申すも耻か

しなから、元私は中國生れ様子あつて上

方住居、すぎし卯月の中空に、都の辰巳宇

治の船、これがよるべの蟹狩に思ひそめた

る戀人と語らふ間さへ夏の夜の、短い契り

の本意ない別れ、所尋ぬる便りさへ、思ふ

に任せぬ國の迎ひ。

詞親々に誘なはれ浪花の浦を船出して、身を

盡したる憂思ひ、泣いて明石の風待に、偶

逢ひは逢ひながら、つれなき嵐に吹き分け

られ、國に歸れば父母の、

詞思ひも寄らぬ夫定め、立る操を破らじと、

屋敷を抜けて數々の、憂目を涙き都路へ、

上つて聞けば其人は東の旅と聞く悲しさ。

又も都を迷ひ出で、何時かは巡り逢坂の、

關路をあとに近江路や、美濃尾張さへ定め

なく、戀しに目を泣き濱し、物の文色

る。

詞テ扱哀れな話、併し男日早も無い世界に、

マ氣の狭い女だな、イヤもうしゆんだ話で

氣が減つた、癪酒でも食べて氣を晴らさ

う、イヤナニ女、暇を呉る立歸れ。ハイ、

有難うござります。左様なれば御客様、最

う御暇申します。オ、朝顔とやら大儀であ

つた初めて聞いた身の上話、若し其夫が聞

くならば、癪満足に思ふて有る。ノウ岩代

殿。左様々々。ハ、ア是はマア御親切なお

言葉、有難う存じますと、杖探り取り立ち

ながら、蟲が知らずか何とやら、耳に残り

し情の詞、名残惜しさに泣くも、心は

あとに探り行く。折節奥より若侍。

詞最早餘程深更に及び候、御兩所ともに早や

お休み。如何様、明日は正七ツの出立、イ

ザ駒澤氏お休みなされぬか。イヤ拙者は今

暫し用事もござれば、御機ひなく御先へ。

左様なれば御先へ臥せらう、ドリヤム、

御免下されと、立上りしが、胸に一物、心

染か馴染所か、年月尋ねる夫でござんすわいな、斯う云ふ内も心が急ぐ、追付いて只つた一言。と、行かんとするを引止め。

詞ア、コレコレマア、待ちや、エ、折悪う雨も降り出し、此暗に一人は危い。イエ、イエ、假令死んでも厭ひはせぬ。ササ、夫はさうでも盲の身で危い。イヤ、放して、と、突退け、退け杖を力に降る雨も、合いつかな厭はぬ女の念力、跡を慕ふて。三重道ふて行く。名に高き、街道一の大井川、縁を亂して降るあめに、打交り鳴るはた、神、漲り落つる水音は、物度くも又すまじき。夫を慕ふ念力に道の難所も見えぬ目も厭はぬ深雪が倒つ轉びつ、漸々爰に川の傍。

詞ノウ川越達、駒澤治郎左衛門様と云ふ御侍、最う川をお越しなされたか未か、聞かして、と、云ふ聲さへも息切れの、聲に川越口々に。詞オ、其侍は今の先渡つたが、俄の大水で川は止つた、笑止笑止とばかりにて、皆散々に行過ぐる。

詞ナアナニ川が止つた。ハ、ア、悲しやと張詰めし、力も落ちて伏轉び前後不覺に泣きけるが、又起き上がつて見えぬ目に、空を睨んで。

詞天道様、エ、聞えませぬ。わいな。此年月の艱難辛苦も、何卒最う一度其人に逢はしてたべと片時も、祈らぬ間とは無い者を、今日に限つて此大雨、川止とは、エ、何事ぞいふ、思へば此身は先の世で、如何なる事の罪せしぞ、扱も扱も味氣無や焦れ、た其人に、逢ふても知らぬ盲目の此目は如何なる悪業ぞや。夫の跡を戀慕ひ石になつたる松浦湖、巾領振山の悲しみも身に比べては数ならず、三千世界を尋ねてもこんな因果が又と世に、有るべきかはと口説き立て、拳を握り身を震はし、流涕焦れ歎きは、餘所の見る目も哀れなり。ヤ、有つて起き直り。

詞オ、さうじや、とても添はれぬ身の因業、此川水の増きしは、所詮死ねとの事なるべし、未來で添ふを樂みに、爰を三途の川と定め、弘誓の船に法の道、急がん物と泣く泣くも、

合夫を戀し小石の敷、袖や袂に拾ひ込み、南無阿彌陀佛の聲諸共既に飛ばんす其所へ。ヤレお待ちなされ深雪様、と聲にびつくりけしとむ内。斯け来る關助、徳右衛門、斯くと見るより抱き留め。

詞マア、御待ちなされませ。イヤ、誰かは知らねど放して。マア、待たつしやれ朝顔殿、コレ關助殿とやが見えたぞや。ハ、ア下郎めてござります、まづ、氣もお静めなされませと、無理に手を取り抱退くれれば、

詞ム、さう云ふ聲は關助か遅かつた。わいの、此年月艱難して尋ね焦れた阿曾次郎様に、折角逢ふたに盲の悲しき、夫とも知らず別れたれど、何うやらお聲が氣に掛かり、戻つて聞けばやつぱり其人、おのれやれ追付かふと、跡追ふて来れば此川留、關助如何せうぞいものう。オ、お道理だ、御尤も御座居ます、何が拙者めも貴女様の御行衛を尋ね廻る内、一昨日の夜の夢に淺香殿に逢ひ、即ち貴女様は島田の宿、戎屋徳右衛門方にござると、云はしやと思へば目が覺め、シヤ何でも

不思議と、夜を日に繼いで参つた用妻有つて、既ての事に危い所を、ヤレ／＼嬉しや／＼／＼なハ、ハ、イヤモ下耶めがお目に掛る上は、お氣遣ひなされますな、駒澤様にお添はせ申す、併し浅香殿は、坂東順禮となつて、東海道へ尋ねて見える筈、だがお逢ひなされましたかな。サレバノイ其浅香に跡の月、濱松で廻り逢ふたが、其夜悪者に逢ひ、數ヶ所の手紙、死ぬる今端に私を呼び、中山の邊りには私が生みの親、古部三郎兵衛と云ふ人あり、此守り刀を證據に尋ね行き秋月弓之助が娘と名乗つて、逢へと云ふ教へ、可哀や終に死にやつたわいの。ム、スリヤ浅香殿には最後とや。ホイ、はつとばかり驚く内、始終聞き居る徳右衛門。

詞ム、そんなら御前は、秋月弓之助様の御息女様、又浅香と云ふは我娘であつたか、ムンと心に點き作の短刀抜く手も見せず、腹へぐつと突立れば、コハ何事と驚く兩人。お、御不審は尤もだが、まづ／＼一通り聞いてたべ、ハ、ア私事は其お尋ねなされる古部三郎兵衛と申す者、即ち貴女様の祖父

秋月兵部様には三代相恩、若氣の誤り、奥女中と忍び合ひ、お手討になる所を、弓之助様に助けられ、女諸共國を立退き産落せしは女の子、貧苦の中に育つる中二つの年に母は病死、男の手で育てもならず伯母の方へ此短刀を添へて養子に遣りしが、廻り／＼て思はずも、親が命を助けられし、秋月様へ御奉公、死んでも忠義を忘れず、この親を導きをつたかオ、出かしたな、又最前駒澤様の仰には、唐土傳來の目薬、甲子の年の男子の生血にて服する時は、如何なる眼病も、即座に平癒との事則 某 甲子の生れなれば、我血沙を以て件の藥に調合し、早く彼方へ、サ、早く。實にもと關助用意の水吞取出だし、手負の血沙受留め。泣き入る深雪が、懷の、妙藥取出し差寄すれば、深雪受取り、我夫の情に餘る賜物と、押戴き／＼、只一口に吞み干せば、不思議と忽ち兩眼開きあり／＼傍りの見え透くにぞ、深雪が嬉しき關助も、悦び合ふ道理なる。

詞ア、嬉しや最早此世に望みなし、何れも去らばと刀引廻し、笛の緒を刎切つて、名の

み流るゝ大井川水の泡とぞなりにける。跡や骸に取り纏り、わつとばかりに泣く涙。露の干ぬ間の朝顔も、生寫朝顔話の千ぬ間なる朝顔の小唄を原に想を構え「生寫朝顔日記」と題して竹本重太夫のために書卸したのであつたが上演に致らずして文化七年八月病歿した。その後天保三年耶麻田加々子と云ふ原作者に擬らはしい人が添作しての五冊十五段の淨瑠璃に仕組んだ。この際の外題は原作のまゝ、「生寫朝顔日記」であつたが、嘉永三年正月上演の際翠松園と云ふ人が竹本重太夫の遣子鶴澤才三、同儀左衛門等と計つて添補潤色し、外題の六文字は縁起が悪いと云ふので「増補生寫朝顔話」と七字に改題した。

生寫朝顔話は山田案山子の戲號で近松徳叟が熊澤蕃山の作と傳へられてゐる。「露の千ぬ間」なる朝顔の小唄を原に想を構え「生寫朝顔日記」と題して竹本重太夫のために書卸したのであつたが上演に致らずして文化七年八月病歿した。その後天保三年耶麻田加々子と云ふ原作者に擬らはしい人が添作しての五冊十五段の淨瑠璃に仕組んだ。この際の外題は原作のまゝ、「生寫朝顔日記」であつたが、嘉永三年正月上演の際翠松園と云ふ人が竹本重太夫の遣子鶴澤才三、同儀左衛門等と計つて添補潤色し、外題の六文字は縁起が悪いと云ふので「増補生寫朝顔話」と七字に改題した。

近松門左衛門作

釋迦如來誕生會

悉多太子難行の段

竹本土佐太夫

三味 野澤吉兵衛

切 太子難行の段

風破窓を射て燈火消え安く月疎屋を穿ちて
夢成難し秋の夜すがら物凄じき山影に岩木を
友と墨衣襦の御山の峨々とそびへ雪山の雪嶺
に満心もすみて頼もしき御悼はしや悉達太子
御法の爲に御身を捨檀特山の山籠り瑠璃の御
髪そりこぼし御名を盟雲沙彌と改め阿羅々仙
人の御弟子と成り師を尊み宮仕へ難行苦行
こけ衣裾を結んで肩に掛け肩に結んで薊野の
澤の菜摘水汲み谷に下り嶮しき峰に上りては
薪を燃せ給ひつゝ三伏の暑き日も座しては足
を伸べ給はず秋の夜の長きにも一日に胡麻一
粒供御とて聞召されず冬の夜は寒しと申せど
も衣を重ね給はねば御肌をさし通す風は劍の
如くにてやつれはてさせ給ひける。御有様
ぞ殊勝なり同じ哀れは耶輸陀羅女烏陀夷一人

にてきがしき嶺々谷々を尋ね迷ひ給へ共
問ふべき人の跡もなく疲れ果てたる組傳
ひ谷を隔て岩かげに人こそ見えしは山賤
かと烏陀夷は聲を張上てノウ物問はん淨
飯大王の御太子世も通れ給ふ御山住何處
の程ぞ教へてたべノウ、と有ければ耶
輸陀羅女も延び上りどふぞ教へてくと
さけび賜ひし御聲は谷を隔てし谷の風谷の風
の吹き連れてよその梢も嘆くべし。太子は夫
と聞き召しおもひ離れし御身に追恩愛不能
斷立つ計りふり返らんと仕賜ひしがア、無
明の惡覺我心を誰にかすなかやな愚かやな
笛に寄る鹿火に入る蟲愛慾故に苦しむる我百
敷に在りし時は太子とも言はぐいへ身は墨染
の山鳥墨雲沙彌には妻子もなし園に植ては花
紅葉深山にあれば柴薪暇も惜しや少時しもと
柴荷かたげて下露を打はらひく、猶山深くぞ
入給ふてなうあれこそ御太子有しに替わる御
姿綾や錦の花の袖墨には誰が染ぬるぞ風にも
あてぬ大事の御身重き薪を肩に置きそもお命
も有るものかせめてわらはが替はらんと谷に
おりんとし賜ふを烏陀夷袂を引止め御發心の
御底意凡夫の智恵には量り難し御修行の妨げ

イヤ／＼／＼逆も此儘見捨てにしておな
かにやどりし若宮へ御詞有りし其上は未練も
残らじコレ申と聲を限りに泣き給へど雲間遙
に隔たりてこたふるものは松ふく風聲方もな
き御有様墨雲沙彌は仙人の窟の前に頭を下げ
法性無漏の智恵の火は石に有るか燧に有るか
何を以て焚薪師匠如何と宣たまへば寂寞の扉
押開き現れ出し阿羅々仙人木の葉衣に肌荒れ
て亂れし髪は白銀の鏡の如き兩眼にてはつた
とにらみ睨あらうげ本覺大悟の智恵の火は一
切の煩惱を燒盡す汝迷ふたり故郷の妻子の縁
によつて一念愛慾起りし故修行却て罪障其業
にひかれて薪枯れてもとの生木となる。生
木を切つたる殺生罪汝に與ふる三十棒と錫杖
振上げ丁々々悟つたるか墨雲棒に耳あり舌あ
りと、押ツ取直して又丁々打つ杖は師の心法
打たるゝ弟子の六根淨御目もくらみ御息も早
たえん／＼に見えければ谷を隔てし安陀羅女見
るに見兼聲を上アレ見や烏陀夷情なや錦繡綾
羅の身に纏ひ荒き風にも當賜はぬ御有様を打
捨て衆生を助けん思召つらき苦忠を御身にう
け今打つ杖を我身にかへどふぞ詫して／＼と
烏陀夷に取付泣き賜ふ理せめて勞はしき師の

仙人の杖の音響に響く大音にて清淨水を汲み
來れと言ひすて窟に入給ふ。漸々として罽曇
沙彌起き直り給へども打たれ給ひし杖あらく
御衣も寸々に破れ亂れし玉かつら藤にて結べ
る水桶を又御肩に打ちかけて九十九折なる谷
道をよるりく。御幸有る御有様ぞ勞はしき
鳥陀夷も今は忍びかねいかに御修行成れば速
御身に過ちある時は胎内のお子には誰を父御
と呼ばすべき薪も水も我々が汲み運んで參ら
せんと泣く。流れに立寄れば太子御涙を浮
べながら水汲み薪燃る計り憂き苦しと思ふあ
さましさよ。無常の刹鬼身を離れず追來る事
の速かさ嶺より落つる車の如く驚き留めざる
玉の緒の樂み。麟つて苦患となる又胎内の胤
ばかり我子とは思はぬぞ一切衆生は我子也洩
らさず救ふが大慈大悲。榮摘水汲難行は衆生
に替はる法の水三界流轉の濁り江も底澄む水
を汲まんとてだんぶと汲み上げて濡れし
袂に影うつる月も山路を登り坂はつし。と
打ければ何かは持つてたまるべき忽ち呼吸切
れ果て絶へ賜へば遠目にも見るに忍びず耶輸
陀羅女うんと計りに息絶えれば鳥陀夷は何と
詮方も氣付よ水よと立騒ぐ師の仙人は目もや

らず倒れ伏たる罽曇の脊エしつかと踏んまへ
端座をしめ一念不記虛空本來不滅自道阿字と
滴水の法を心に觀じ又も蹴返す太子の身氣息
吹き返すと見へけるがずんと立つて桶の水大
地にがばと打あけ給ひ窟の内に入り替はり諸
法從本來生死寂滅相十方佛土中唯一乘法無
二亦無三と高らかに成道正覺悟りの金言定印
たゞし座し給へば仙人しきつて禮をなし善哉
釋迦牟尼來天人師佛世尊昔の諸願滿足
し衆生を導き賜ふべし我は大道智勝佛初成世
界の契を違へず阿羅々仙人と現じたりと宣た
まふ御堅誓ばしく光を放ち失せ給ふ釋尊微妙
の御聲にていかに鳥陀夷承はれ斯成道をな
す上は御母夫人の御爲に祇園精舎の結果より
とふり天に登るべし我姿を残さんにはばつし
や國の主なる烏天大王此弓手に生茂る檀檀香
木を斧なしてひしうかつみに作らしめ末世の
衆生に残すべし我は程經て涅槃の空闊淨に滅
す語りも有るべし筐に残す我像は南嶺不淵大
日本嵯峨清涼寺に止まつて有縁の衆生を再度
すべし然らば生身寸替はりはなくと仰は今に
都路や北野の嵯峨に尊くも衆生再度の御誓ひ
實有難き耶輸陀羅女は禮拜し悟りの道に入り給

へば强者の功德身に餘り我も我子も衆生し迷
ひも暗れて有難やと仰に鳥陀夷も實理衆生は
元來草木迄迷ひのゆめの幻しと悟りの詞に釋
迦牟尼如來オ、殊勝也出かしたり悟れば共に
佛なり我れ無量劫昔より婆娑の往來八千度今
こそ聞く智惠の門出山の釋迦無尼如來大恩教
主の御惠み御法の程こそ尊けれ。

釋迦如來誕生會

この淨瑠璃は元祿八年四月八日初日の竹
本座に書下されたもので作者は近松門左
衛門、第一段摩耶夫人懷胎より悉達太子
誕生迄、第二段太子の出家、第三段太子
檀特山道行、第四段難行苦行、開悟、出
山說教、第五段入涅槃を叙したものであ
ります。この度上場いたしますのは太子
道行と難行の段で道行は、鍛太夫が語り
難行の段は土佐太夫が獨自の藝域を開い
て語ります。

近松 巢林子 作

傾城反魂香

土佐將監閑居の段

竹本津太夫

三味 鶴澤友次郎

〔床本〕 將監閑居の段 (切)

爰に土佐の末弟浮世又平重起といふ繪師あり、生れ付て口吃り言舌あきらかならざる上家貧しく身代は薄き紙子の火燵箱朝夕の煙さへ一度を二度に追分や大津のはづれに店がりして妻の繪の具夫は盡く筆の軸さへ細もとで登下りの旅人の童むかしの土産物参錢五せんの商ひに命も錢も繋しが日蔭の師匠を重んじて半道餘りを夫婦づれ夜なく見まふぞ殊勝なる夫はなま中目禮ばかり、目禮ばかり女房傍から通辭してハア、またはおよりませぬか誠にめつくりと暖かに日も長ふ成まして世間は花見の遊山のとさはん／＼致しますることたは山蔭御浪人のおつれ／＼をいさめのため嫁菜のひたしに豆腐のにしめさ

へても致しまして關寺か高觀音へお供して春めく人でも見ませうと女夫申して居りますれども心で思ふたばつかり道者時分て店はいそがし洗濯物はつかへる爲業には、いかいかず日がな一日立すくみ何をするやらのらくらと急げば廻る勢田磯只今せうから貰ひまして練貫水の天津酒ゆめ／＼しうござりますれ共此春からお仕合が直つて鰻の穴から出る様に御世にお出でなされませほんにつべこべとわたしが言ふ事ばかりこちの人の吃りとわたしがしやべりと入あはせたらよい比な女夫が一組出来ませふア、おはもじやと笑ひける奥方も御挨拶かう祝ふてたもつた今宵は奇妙な事あつて修理は苗字を許され土佐の光澄と名乗るぞよ、又平も随分筆に心をつきや我名を上れば則ち師匠の名も出る道理ノウお徳そふぢやないかまあ／＼よい所へ酒肴幸ひ／＼盃もいたゞいてあやかりやいのと有ければ又平時節と女房を先へ押出しせなかを突我身も手をつき頭をさげ訴説有げに見えければ女房お徳心得て誠に道すがら百姓衆の噂を聞き身は貧也不具なりおとゝ弟子に土佐を名のらせ兄弟子はうか

／＼といつ迄浮世又平で藤の花がたげたおやま繪や餘おさへた飄筆のぶらん／＼生れても斐なしと身をもんでの無念がり尤共哀れ共運添ふわたしが心の内申も涙がこぼれます奥様迄は申せしがお直の願ひは此時節今生の思ひ出死ての後の石塔にも俗名土佐の又平と御一言のお教しは師匠のお慈悲と斗りにて涙にむせび入れれば又平も手を合せ將監を三拜し覺にくひ付泣居たり將監も不意に心に心は亂るれどわざと聲をあら／＼げヤア又しても／＼叶はぬ願ひコリヤよつく聞け此將監は近江國高島の御家來筋、則ち禁中の繪所小栗宗丹と筆の争ひ其上高島家の重寶雲龍の硯を宗丹達て所望すイヤきやつに持せじ我にたべと互ひに意地を言ひつりのりついに御前のお聞きに立つて 某は勘當受て此浪人住居今でも小栗に従へば富貴の身と榮ふれ共一人娘おみつを君傾城の勘させ子を賣つてくふ程の貧苦を渡ぐは何故ぞ土佐の苗字を惜むにあらずや修理の介は只今大功有そちには何の功が有る琴基書譜は／＼の藝貴人高位の御座近く参るは畫人物を得言はぬ身を以て及ばぬ願ひ似合ふた様に大津繪畫いて世を渡れ茶でも呑んで立

歸れとあいそもなくしかられてお徳ははつと力を落しコレ又平殿こなたを吃に産付けた親御を恨みさつしやれと頼みなく又平も我咽ぶえをかきむしり口に手を入舌をつめつて泣けるは理り見えて不惑なる折節表に人音して將監殿やおはする光信殿と呼はり拔刀笠戸押開きずつと入る將監目早くお身は狩野の弟子歌の助ならずや姫吉を御供せしか何とくされば館の騒動いふに及ばず存知のごとく姫君の御供仕り漸々切ぬけ爰かしに忍びしが主人四郎次郎行方しれず是第一の氣づかひと心迷ふ其内に敵手ひどく追かくるじや任せて置けと眞向に太刀さしかざし向ふ敵の腕骨脚骨嫌ひなく四角八方に切りらせしが敵は大勢こなたは一人なんなく姫君奪ひ取られ下の醜態は雲谷が館なり伴左衛門を始めとして門をかためて寄付ず刀のはがねつでかん迄とかけ入らんとせしがイヤく主人の身の心上元なし後をしたふて尋ねる所存姫君の御事は將監殿宜しく頼み存ずると詞も足も血氣の若者後をしたふて走り行く將監心も心なしザサア我爲の一大事いかゞはせんと思案顔奥方も氣づかはしくイヤくせいては事

の仕損じあらん殊に其伴左衛門姫君に心をけむたにくどくと聞く上はお命には氣づかいなしどふぞ辯舌のよき人に將軍家の御意とたばかり取かへす分別はござらぬかといふに將監げに誠せく事はない何れもいふておみやれと顔に小皺頼杖つき各々小首かたむくる又平何ぞ言たげに妻の袖引せなかつき指さすすれ共合點行かざしんきをわかし女房を引退けてすつと出師匠の前に諸手をつき唾を吞込てコ、こ、此對手にはセ、拙者が参り姫君をウ、うばひと、取つて歸りましよ將監きつと見やア面倒な吃め思案牛に邪覽入るそこ立てうせぬかと呵られてもおぢるにこそイヤ膝共ダダ談合と申す口こそ不自由なれ心も腕も天下にコ、こはい者がない拙者が分別致し叶はぬ時はゑんせう勘定あつちへやるかコ、こつちへ取るか首がけのバ、ばくちの命の相場が一分五リン浮世又平と名乗つて親もない身がら一身命ははきだめの芥名は順彌山と釣かへ悴の時から舊功なし命にかへて申し上るも師匠の苗字を繼たいばつかり拙者を遣はされて下さりませ申しさきり逆は御承引ないか吃でなくば斯は有るまいエ、くくうらめしい

咽ぶえをかき破つてのけたい女房共さりとつれないお師匠ぢやと聲を上て泣き居たる將監猶も聞入なく不具の癖の迷懷涙不吉千萬相手に成て果しなしこれく修理の介御邊向つて思案を廻らし奪返し來られよ早くく畏まつたと刀提立出る又平むつと抱きとめマ、マシマン待つてくれ師匠こそつれなく共弟子兄弟の情けじやコ、此又平をやつてくれ後とも言はぬス、ス、すぐ様コリヤ又平某やだけに思ふても師の命は力なし爰を放せイ、イ、ヤハ、ハ放しやせぬ放さねばぬいて突ぞツ突コ、殺せハツハ、ハ、放しやせぬぞ修理之介も持あつち放せくと捻合たり將監夫婦も氣をあせり放せくととむれ共耳にも更に聞入れず女房お徳總り付あれちがひやともし放せば女房を取て投げ踏付けくじだんだ踏みナ、ハ、何じや傍迄がキ、キ氣ちがひとはエ、女房さへあなどるか不具は何の因果ぞやとどうと座を組み併せて打て聲も惜まず歎きける心ぞ思ひやられたる將監重ねて汝よく合點せよ繪の道の功によつて土佐の苗字を繼でこそ手柄共いふべけれ武道の功に繪師の苗字譲るべき仔細なしならぬくと言切れば女

房はつと居直つてサア又平殿覺悟さししやれ
今生の望は切れたぞや此庭の手水鉢を石塔と
定こなたの繪像を畫きよめ此場て自害し其
後の贈號を待つ斗りと硯引よせ墨すれば又平
駄き筆を染め石面に指向ひは生涯の名残りの
繪姿は昔に朽る其名は石魂にとまれと我姿
を我筆の念力やてつしみる厚さ尺餘の御影石
裏へ通つて筆の勢い墨もきへず兩方より一度
に畫いたる如く也將監大きに驚き入り異國の
王義之趙子昂が石に入り木に入るも和諧にお
いて例なし師に勝つたる諸工ぞや浮世又平を
引かへ土佐の又平光起と名乗るべし此勢ひに
乗て姫君を奪ひかへせと有ければはつと斗り
夫婦が悦び又平は忝し共口吃禮より外は涙
にくれ踊り上り飛上り嬉し泣こそ道理なれ將
監重ねて心剛にて心ざし厚けれ共敵に向つて
問答せん事いかゞあらんと有ければ女房聞も
あへず常々臺頭の舞を好きはらば諸共つて胸
にて舞はれしがふしの有事は少しも吃申さず
サア又平殿悦びにめてたう舞て立まいかヲツ
ト答て立上り古き舞を身の上になぞらへて
こそ舞たりけれ去る程に鎌倉殿義經の計手
向ふべしと武勇の達者をゑらばれし夫は土佐

坊是は又土佐の又平光起が師匠の御恩を報ぜ
んと身にも應ぜぬ重荷をば大津の町や追分の
繪にぬるごふんは安けれど名は千金の繪師の
家今墨色を上げにけりかくて女房いさみを付
又もや御意のかはるべき早御立ちとすめけ
るヲ、いしくも申されたり身こそ墨繪のさん
すい男紙表具の體なり共朽て朽せぬ金砂子極
彩色におとらじと勇みすみし勢ひはゆゝし
頼もし我ながら 適 繪筆の健氣さよ唐繪の變
唱張良を斬についたと思し召イザお暇と立出
る將監庭に飛びおり待マ兩人吉左右の饒別せ
んと刀抜間も見せばこそ又平が像を誦し手水
鉢二ツにどうと切破つたり一座の人々あきれ
顔女房お徳恠りしコレ申將監様大事の門出命
づく身を祝ふての舞何がお氣に入ませぬ又平
殿を二つになされしは不吉を願ふお心か但し
は狂氣遊ばしたかオ、ウ疑はしくば言ひ聞か
さん昔都誓願寺の御佛は賢聞子芥子國といひ
人親子名乗の其しるし片形作り合せし御佛な
りに然るに此佛體朝暮兩眼より御涙頻成し
に時の名譽是を考へ五臓を作り込だる佛體な
れば正しく肝の臓の損じならんと二ツに分け
て是を直せば忽ち涙止まりし事今の世迄も割

符の竈陀と隠されなし此理を以て又平が魂
込し此繪姿繪は吃らねど吃るは舌。舌は元來
心の臓其心の臓調はざる故に吃る今石面の又
平を二ツに切破る此將監繪師の手の内中々思
ひよらね共コレ刀は主人より給はる名作其
名作の奇特を以て心の臓を斷切たれ、ば吃る
事はよも有らじと言ふに又平頭を下げハ、ハ
有がたし、いよ、首尾能姫君の御供申し
立歸らんと詞すばしき一言に奥方始め人々も
二度恠りに又平は我でに我口疑はしく、らり
れる、まみむめも、さしすせそ、かきくけ
こありや、直つた、いふは、何を言ふ
狸百足棒百本天王寺のたう、念佛十ヲ申せ
ば佛に成る誓願寺の佛の誓師匠の御恩を頭に
戴きどう、力足踏又平は今ぞ出世の金
願 あつばれ諸人の繪本ぞと勇いさんて急ぎ
行く。



女義界の第一人者

豊竹呂昇逝く



は聞けなくなつて仕舞つた。

豊竹呂昇の略歴

「明治七年八月四日名古屋市西區江川端町の鹽物問屋に生る。本名永田仲子といひ幼時より常磐津を習ひ、十一歳で父を失ひ母の手で育つ十三歳で當時浪越太夫といつた五代目土佐太夫の門に入り仲路と名乗り、明治二十五年十九歳で初代呂昇太夫の門下となり豊竹呂昇を名乗り、大阪清津橋の播重席で初興行に東猿、長廣呂昇の順で三枚目に据り其後、五代目彌太夫、法善寺津太夫、初代大隅太夫、五代目住太夫、團平、松葉屋廣助、五代目吉兵衛、松屋町廣助等に師事し、明治三十年二十四歳で都保美連を組織して曾根崎南詰の萬亭に出演し人氣を博す。後、地方巡業をなし、同三十一年九月東京へ初上りし茅場町宮松亭に初看板をあげ、美音と麗姿を以て名聲一時に高まり有樂座に於て東西名人會に出演するに及んで殺人的人氣を呼び女義界の第一線に立つ。大正十年母を失ひ、同十三年四月母の遺志に隨ひ、大阪中座に於て引退披露をなす。歳五十一。引退後は西宮市外の宅にて門下の養成に専念。得意の物語は、壺坂、堀川、合邦、酒屋などであつた最後の舞臺は、昭和四年十月八日攝津大掾の十三回忌追悼會で白石揚屋を語つた。行年五十七」

女義界の第一人者として、明治大正の劇壇に燦として光つてゐた豊竹呂昇は、大正十三年の引退披露をなしてから、専ら子弟の養成に力を注いでゐたが、本年四月以來腎臓を冒され、大阪醫大の小川博士に診察を受け、阪急線夙川雲井通りの自宅に療養中だったが、六月七日午後九時四十五分忽然と逝つた。これからはもう、あの銀張りの涼しい眼の表情と、あの艶つほい太いので活かして來た語口

尚、呂昇最後の舞臺は昭和四年十月八日攝津大掾十三回忌追悼會に旭嬢と共に朝日會館にて「白石嘶揚屋の段」の信夫を語り、美聲尚老ひすの感を深からしめたものである。葬儀は十一日大阪市下寺町の大蓮寺にて盛大に営まれた。

七月の角座
新國劇上演



林不忘原作

魔像

— 新版大岡政談の内 —

享保庚寅の元旦、御本丸で將軍家が新玉の歳の始め拜賀の禮を受けてゐる平和な一刻です。西丸御書院の御番詰所で神尾喬之助が、組頭戸部近江之介を始め居並ぶ番士一同から辱かしめを受けながら、黙々とたゞ平蜘蛛のやうに平伏してゐます。

その原因は——
神尾喬之助が新参者の分際で元旦といふに一番遅れて出仕し、剩つさへ古参のお歴々に一人々々挨拶でもすることか、御一統十把ひとからげに通り一遍の挨拶を述べたからです。

——神尾氏ツ！無言は非禮、何とか早速御挨拶あつて然るべしだ。

——甘いことを並べて、園繪殿を蕩し込む口はあつても吾等に應對する口はないと言はるゝのか？

——年頭早々から新参者に侮られては吾等の一分が相立たぬ……

——それとも意趣意恨あつての所業か、無言御無禮！挨拶せられい！

が、喬之助が斯して戸部近江之介から苛められるには、もつと——深い仔細があつたのです

それは、御多分に洩れず……女・女・女……お城御用伊豆屋の娘園繪といふ美貌の持主が、戸部を振つて——振りぬき、人もあらうに喬之助と祝言をしたがためからです。

——卑怯者！何とか申せ！

——金に眼がくらんで素町人の娘に買ひ上げられた野郎人形！

戸部を始め、それに雷同する番士達が口々に悪罵の限りをつくすのですが、神尾喬之助は依然として顔を上げません。茲に於てクワツ！となつた番士の一人大迫玄蕃が、喬之助の襟首を引掴んで無理矢理に起すのです。とそれまでも忍び笑ひを耐へてゐたらしい喬之助が、突如！カラ——と笑ひ出し、腰の太刀を叩きながら。
——此奴が食ひたいのか！ 此奴を食はさうか！

と、云ひ終るやあつ氣に取られて居並ぶ番士達を尻目に、きつさと部屋を出て行くのでした

——生意氣な、神尾待てツ！

戸部近江之介が、血氣にはやつて、直ぐに喬之助の後を追ふのです。と、見る間に番士達の面前へ、生々しい人間の首が投げ出されます。

——呀ツ！ 紛れもない戸部近江之介の首！ 一座が呆然たる時、お茶坊主の聲で。

——大岡越前守殿お退り！

大岡越前守に釋いて諸侯が靜かに殿中を退去するのです。

元旦！ 殿中の刃傷、下手人喬之助の逐電。その波紋の及ぶところ、喬之助の愛妻園繪とその弟琴二郎の召捕となり、人相書の配布、瓦

販賣り、そして御書院番頭脇坂山城守の閉門となつて現はれるのでした。

が、その慌たしい事件の中にも依然として大江戸の春は太平です。二日初買ひ花魁道中、三日三ツ目の三度鐘、四日四谷の宵庚申と目を經て七日吉例の七草粥の晝過ぎ頃、下谷黒門町の左官職、通稱壁辰の家では、娘お妙が下町娘の艶な容姿でお墓所の仕事にいそ／＼としてゐます。

其處へ、忽然と神尾喬之助の訪づれる聲。壁辰に弟子入りを仕儀と云ふのです。だが、壁辰は人相書の配布に依つて、早くもそれをお尋ね者の喬之助だと見破つたのでした。

「お妙！ 御自身番へ行つて早く捕物の手配を頼んで来い。早く／＼……」
と、娘に窃つと耳打ちをします。
弟子入りをさせて頂く以上はお指圖通り死に身になつて動きます覚悟で……

と、喬之助の口上。

「娘、早くしねえか。野郎はお尋ね者なんだ。だから俺の手柄にぶん縛るんだ。」
と、壁辰。

「縛る？ あの方を……」

と、お妙が父の言葉を解し兼ねてゐる時、喬

之助は、壁にズラリと並んでゐる御用提燈に氣がついて。

「壁辰どの、始めて知つた貴殿の役柄！ だが拙者にはまだこの世に用があるから、今日はひとまず引取申す。」

——何にツ！

「用と云ふのは戸部近江之介と共に拙者を今日の羽目に陥れた西丸御書院番の番士一統、第一に大迫玄蕃、次に藤木陽一郎……」

さつと身構へる壁辰、云ひ續ける喬之助。

「池上新六郎、淺香慶之助……十七人残らず討取つて生首にしてやるのだ！
——何をツ！ その前にお前さんを繩にしてやるのだ！

そこで、二人は更にさつと身構へるのでした。が、その時、お妙が何故か壁辰に縋りつくのでした。

「ま、待つて下さいッ！ お父ッあん待つて！ 待つて！」

「えゝッ！ そこ退けッ！ ケ、怪我をしねえうちにすつ込んでろし！
いゝえ、わたしや死んでも退きません。

何を云やあがる！ これお妙、汝ア氣で違つたか。
——氣が違つても何でもこの人はわたしの好

い人です。わ、わたしは、さつき一眠見た時か
ら……」

流行小唄もどきの、この「一眠見た時……」の一句が思はず壁辰をたじろがせるのでした。そして尙もお妙は。

「お父ッあん！ どうせあたしは女のことでもつかしいことは判りませんが、お父ッあんは、黒門町の壁辰のと云はれる立派なお顔役ぢやありませんか。いゝえばり／＼の江戸ッ兒ぢやありませんか。そのお父ッあんがわざ／＼壁辰を男と見込んで頼つてこられたこの人を召捕つて何の手柄になるんです。お父ッあんは江戸ッ兒の心意氣をどこへ忘れて來たんです。

江戸ッ兒の心意氣！ この言葉には大抵の江戸ッ兒が參つてしまふらしい。壁辰も竟にその一人でした。

X X

そこで、壁辰は振り上げた十手を捨て、神尾喬之助をかくまふ決心をしました。——がこの願末を窃つと立聞きしたものがあつたのです。それは筆屋幸吉といふ、お妙にいたく執心してゐる男。

お妙に、目下江戸中でお尋ね者神尾喬之助といふ情夫があると聞いては堪まりません。そ

の足で、脇坂山城守の屋敷へ訴人すると同時に丁度居合せた村井長庵に事の急を報じたのです。目明し金山寺屋音松は配下五十人を連れて、折柄の豪雨を衝いて黒門町へと押し掛ける。

壁辰の家は蟻の這ひ出るすき間もないくらいぎつしりと捕手に取り囲まれました。と踏込んだ目明し音松の前に、喬之助が自若として突ツ立つてゐる。突如！音松はカラ／＼と、大聲に笑ひ出したのです。

——こりやどうも飛んでもねえ人違ひだ。あの、それ……神田で今評判の喧嘩商賣の旦那でさア。

音松は、興力の質問に答へながら尙も大笑ひに笑つてゐるのです。

——とう／＼見破つたか、遠に眼が高い、いかに喧嘩屋の茨右近様だ！

壁辰は内心意外に思ひながら、突嗟にうまくばつを合せました。

事實間違つてか？ それとも仔細あつてか？音松の一隊がその場を引揚げる後姿を、お妙は手を合はせて拜むのでした。

喧嘩商賣茨右近の宅の表には、『喧嘩渡世——よろづ喧嘩買入申候』といふ大看板が掛つてゐる。家の中では右近とその女房のお絃が好い

氣持に酒を飲んでゐる。お絃の手首には『御意見無用』いのち知らずといふ刺青がしてある鐵火肌。

そこへ壁辰と喬之助が訪ねて來るのでした。喬之助があまりにも右近に似てゐるので、當の右近もお絃もあつ氣に取られてしまひますが壁辰の挨拶しかけるのを右近は押へて。

——挨拶なんかどうでもいいや、用事といふのは喧嘩かい？

と、たづねるのです。

喧嘩も喧嘩、お番士衆の生首が十七もコロ／＼轉がらうといふんで。

壁辰の言葉に氣の早い右近はもう立ち上つてゐます。

場所はどこだツ！ お絃、履物だツ！

これから轉がるかも知れないといふ話ですよう。

話、か。なアんだ、物ごととは落着いて申せ。

——お前さんこそ落ちついて聞くもんですよまことに嬉しい夫婦。

そこで、壁辰が一伍四什の物語りをしますと右近は大喜び。

愉快ちや。神尾氏とやら大いにやらうよ何分共に……。

——お絃、喜べ。これで當分喧嘩あぶれの心配はないぞ！

右近は快心の面持で、杯を喬之助に差すのです。

それから——

喬之助は、右近の家の食客となつて、容儀の寸分違はぬ二人の茨右近が出来上りました。そして復讐の準備が着々として進みます右近と喬之助の手は堅く／＼握られたのでした。

園繪と琴二郎が築土八幡の家へ下げられたことを探り出して來たお絃は、右近と相談をして園繪を喬之助に會はせてやらうと、喬之助には内密で家を出掛けたのでした。その留守中喬之助が右近に成澄まして留守番をしてゐるのは言ふまでもないこと。

その頃、轡を出て始めて墓參に出掛ける園繪と琴二郎は町駕に乗つて黄昏の町をひたすらに急いでゐました。

その駕をチャリと見て異様に眼を輝かせた人影が二ツ。

一人は村井長庵。他の一人は筆屋幸吉です。幸吉はさきの日の大失敗に憤激する方ない折柄とて、相棒の長庵と共にその機に至るのをねらつてゐたのですが、愈時機到來。頭はよしと

長庵が先づ駕を呼び止めました。

「琴二郎さまではござせんか、神尾様。駕の中に聲がある。」

「いかにも、してあなた様は？
七首を抜いた長庵が、その聲と同時に。」

「往生しろッ！」

と、琴二郎の駕に躍り掛る鼻先きへ、駕の中からスツと突き出る三尺の秋水。

「鉦を見ろ！」

鉦の銘に『喧嘩渡世——』とあるのを見ると長庵は『わッ！』とあとをも見ずに一散に逃出すのでした。

あとには高笑ふ喧嘩屋夫婦の聲のみが残ります。

× ×
走つた、走つた——

一散に逃出した長庵が、走り走つてもちの木坂の角屋敷、大迫玄蕃の玄關へ走し込むと、ビカリとその眼を射る玄關の貼紙。『大迫玄蕃殿お命頂戴、只今参上』

これを見ると長庵は土足のまゝ家の中へ駆け上つて、奥の一間に玄蕃の姿を見出すと。

「まだ生きておいてなすつたか。」

と、玄蕃を玄關に引張り出してふるへる手つきで貼紙を指差すのでした。

「や、一體だ、なに奴の悪戯だッ！」

と、玄蕃が氣色ばむ時、奥の間からワツハツ／＼と時ならぬ哄笑。

驚いて、二人が奥の間に入らうとすると、そこに喬之助が突つ立つてゐます。玄蕃は、内心ギョツとして立ち停るのですが、そこには早速の術策で。

「苦勞したてござらう。察する、察するな、元通り氣易ふ願はう。——だが、濟んだことは今更何と云つても仕方がない。どうだな、暫らく拙者の家に逗留しては？と、云ふのは番士一統連名で貴殿の赦免を嘆願してゐるところなのぢや。

喬之助は相變らずニヤリ／＼と薄氣味悪い笑を泛べてをりましたが。

× × ×
「首ッ！
無言で自分の首を叩いて見せる喬之助の態度にその真意を知つて、もう玄蕃は絶體絶命！石像の如き無言の喬之助の挑戦！二人は竟に刀を抜き合すのでした。

行燈の灯は吹き消された。そして闇の中に爆發するやうな狂的な高笑ひ。

× × ×
長庵は又も一散に、今度は淺香慶之助の許へ急を報じに走りましたが、玄蕃の家へ救援に赴

く途中の九段下で。

「おう淺香ではないか。
と、月を明りに自分を呼ぶ人影に。
うむ、如何にも拙者は淺香だが、さういふ尊公は？」

「ナ、何イ……神尾……」

と、同時に一同は『それッ！』とばかり月下に白刃が躍るのでした。

その深夜——

帶屋小路の茨右近の家で。

池下新太郎 山路重之進
飯野主馬 横地半九郎
妙見勝三郎 日向一學
保利彦左衛門 猪股小膳
博多弓之丞 大迫玄蕃
笠間甚八 峰淵車之助
箭作彦十郎 淺香慶之助
藤木陽一郎 松原源兵衛
長岡頼母

と、御書院番士の名を書き連ねた貼紙に、喬之助の握つた朱筆に依つて、大迫玄蕃、次いで淺香慶之助と順次抹殺線が引いて行かれるのでした。

お 盆 映 畫

林 長二郎 主演

関の弥太ッペ

原作 長谷川 伸・監督 星 哲六

鈴木 傳明 主演

大都會 爆発篇

監督 牛原 虚彦

松竹キネマ株式会社 ◆◆



柳亭種彦の

諺紫田舎源氏

光氏とからきぬの

エロ一〇〇%

る 残 に 繪 錦 の 居 芝

會 覽 展 上 誌 ロ グ ・ ロ エ



(右上) おなじみの忠臣蔵

二つ玉の定九郎・腹と口からの物談い流血……………。

(右下) 夏祭浪花鑑

泥場の義平次殺し……………現今大阪では法度の芝居。田市を隔て、「ダイガク」の灯のゆらぎに泥まみれとなつての立廻りクロ的な場面……………。

(左下) 敵討天下茶屋聚

殺す者は人もあらうに荷家來の元右衛門……………右で滅多打ちとは餘りにも惨……………。





(上)
三勝半七の芝居もかうし
て錦繪にはエロたつぷり
に残された。



(下) 傾城染分網
とんと舞臺に乗らぬが千切屋お梅
が山形屋儀兵衛にヤイノ／＼をき
め込むエロエロな情景

綱七やらぬとハガイめ

切先餘つて無理心中・グロ的な演技



• はなのあにつほみのやつふさ •

|| エロとグロのカクテル ||



今宵五つ思ひ合はし同じ毎夜毎夜……
 代手と娘だんを人目に
 遙のきはてはも
 焦を胸に
 しで
 るゐる
 口五・口五……

熱時熱殺

西尾福三郎

◎「劇場は避暑宿に非ず。」
斯く云つた所で、私は決して機數で堅苦しく畏つてお芝居を拜見してゐるべしと云ふのではない。

いや、それ所か、元來私は左様な窮屈な芝居は餘り好まない方である。

劇場は、宮や寺や教室ではないのだから、何も寺小屋の菅秀才一座の子供連をみるやうに、鹿爪らしく控えてゐなければならぬと云ふ規則はない筈だ。他人の迷惑にならない程度で充分に打ちくつろいでこそ、初めて芝居らしいのどかな氣分を味ふ事ができるのである。

舞臺だけが芝居なのではなく、見物席を引つくるめた劇場全體を渾然とした芝居氣分で包み込んでしまふ所に、昔の日本の芝居の特殊な面白味であつたのだ。

で、今やすつかり歐米風に變つてしまつた芝居小屋の中で、せめて昔作らの芝居氣分に浸らせてくれるのは、さし當り夏の涼み芝居位なものであらう。

小屋の構造は幾らか昔とは變つてゐても、まだ名残りの面影が偲ばれる所々——開け放した機數でヒラ／＼と翻る定紋入りの團扇、お盆に因んだ古風な飾り提燈、土間の天井から舞臺へかけてハラ／＼させられる宙乗り芝居や、ゾツとするやうな蒼白い焼酎火の煙や、さては満身に涼風を送る本雨の大夕立等を至極陶然とした氣持で、浴衣の袖を肩までたくし上げ、毛脛をポリ／＼搔き乍らでも見てゐられるのは、追に夏芝居なればこそである。

夕涼みの床几で、堅苦しい小理窟をこね廻してゐるやうな野暮天は暫らく問題外としておいて、何處へ行つても涼み語には凄く怪談噺か、さもなければ罪の無い笑い話と大抵相場が決つてゐる。

尤も、この頃は同じ凄く話でも、ワ印の凄いやつがすい分流行つてゐるやうだが……。

ともあれ、夏の芝居は、涼み床几の氣分をそのまゝに、理窟抜き、なるべくあつさりとした物に限られてゐる。

所で、何故私は、こんな事を書くために、「劇場は避暑宿に非ず」等と云ふ變な小見出しを振つたかと云ふ譯であるが、元來夏の芝居なるものは、いかに涼味本位の膳立をしてみた所で、所詮大都會の熱圏の中心に、多勢の人を一杯に寄せ集めた小屋が水のビルディングでもない限り、それは各自の家でだらしない寝そべつてゐる事より以上に涼しい筈はないのである。

だから、暑さを避けるのが夏芝居の目的ではなく、暑さに向つて正面から打つつかつて行つて、それを克服してしまふ所に夏芝居の眞の味ひがあるのだと云ふ私の論理になつてくる次第なのである。

登山の快味が、山の頂天に立つだけの事にあるのなら、富士山へケーブルを架けるなり、又飛行機を飛すなりしてもよからうが、眞の快味は、むしろ途中で思ひきり汗を絞出す點にあるのだ。

海水浴とてもその通り、暑い盛りを乗物や徒歩で行く内に、汗びつしよになつた後であればこそ、初めて本當に水の快味が味はれるのだ。

それと同じく夏の芝居も、棧敷でさんふ汗を流した後の、あのホツとした幕合の放心状態に一種の快味があるのだと思ふ例へばそれは、熱ついのを我慢して行水を漕した後の、あののんびりとした快味に似た氣持である。

熱はよろしく熱を以て制すべしである。

それを今日の人達は、徒らに避暑地と騒ぎ立て、避くべからざるものを避けやうとして、愚かにも海や山へ逃げ廻つてゐるのである。

熱時熱殺!! 夏はこれに限ると私は思つてゐる。

近年猿之助や故澤田正次郎の夏芝居が、未曾有の大人を取つた理由の一部も、この熱を以て熱を制し得た勝利の結果に外ならない。

いかに實のある芝居でも、夏場の舞臺は長丁場は禁物だ。

それから又、無暗に涼しがらせる事許りが目的の、例へば冬景色をねらつたやうな舞臺面の羅列も餘り智慧のあるやり方ではない。要するに熱だ。熱の縮つた芝居であればよい。

若い、元氣に充ち満ちた役者の、息が詰るやうな潑刺とした奮闘的場面を見てゐると、見物も同じやうに汗がびつしよになつてしまふ。

近年——と云つても入分以前だが、築地小劇場が初めて關西へ來た時、私はあの暑つい寶塚中劇場で、ゲーリングの「海戦」をみた時、舞臺の上で汗塗れになつて絶叫してゐる五人の水兵をみて、暑つさは全然別な氣持を感じた事を今でも憶ひ起すのである。見物も役者も思ひきり汗を流す事だ。

その後で、ホツとして我に返つた時、三斗の熱汗は忽ち萬斛の涼風と化するであらう。

「安禪何ゾ山水ヲ須ヒンヤ」と云ふが、山水所が都會人に取つては結構劇場で事が足りる。

「心頭滅却すれば火も亦涼し矣」

夏芝居漫筆

吉田 禎 男

數年前の夏、山陰地方を旅行した途次、少し廻り道して書生時代の友人の住む町を尋ねて行つた事がある。

海沿ひのさ、やかな町で、夜中にフト目を醒ますと、月の光りを一杯にうけた窓障子に日本海の潮鳴りの音が漂よつてひどく旅愁を催はした事を覚えて居る。

何んでも八月の中頃で驛から車を雇つて白く乾いた日盛かりの道を遠く其の町に行つたのだつた、低い家並の續いた町筋に駄菓子屋の赤い小旗が見へたりして居た。

こんなさ、やかな町でも時折、地方廻はりの旅役者の一座がやつて來た、そして毎日狂言變はりで四五日興行してはまた何處ともなく去つてゆくのだつた。

私が其の町に行つた時も恰度旅役者の一座が興行して居たので其の夜友人と一緒に出かけた、勿論、そんな小さな片田舎の町だから劇場等のあらう筈がなく芝居のある度に町はずれの廣

場に蓆と板とで急ごしらへの芝居小屋をたてるのだつた。だから雨の日は云ふまでもなく芝居は休みだ、見物席で振り仰ぐと蓆天井の隙間から天の川に遊ぶ星の姿がよく見られた。

芝居は「四ツ谷怪談」をやつて居た、役者の藝といつたところでは田舎廻はりの臭い、場あたり澤山の、お話しになつたものではなく道具もあり合はせの、そしてうす汚ない衣裳だ、それでも私は終りまで辛棒強く見物した。

町から町を流れて行く旅役者の群れ、うす暗らい急ごしらへの芝居小屋、そこにうごめくお岩や伊右衛門や小平や、それらのうすら寒い空氣が役者の藝以上の陰慘さをもし出して私に不思議の興味を興へてくれたのであつた。

町の人々は一日の仕事をすましてそれから行水でもして芝居に出かけるのだ、だから芝居は初まるのが遅く終るのは十二時に近い頃になる。芝居が終つて太鼓の音を後ろに森閑とした町筋の暗らいところを歩るきながら私は「四ツ谷怪談」の人々の姿を幻の如く行くての闇に見るやうな氣がしたものだつた。

それからもう十年近くの年月がたつて居るのだが夏芝居という不思議に此の片田舎で見た「四ツ谷怪談」を思ひ出すのである。梅幸や右團次のお岩を幾度も見たが夏芝居を思う時、旅に見た「四ツ谷怪談」が不思議と私の記憶の中に蘇がへつて來るのである。

旅芝居で見た「四ツ谷怪談」——

旅芝居で見た「四ツ谷怪談」——
其れを思ふ時私は、錦繪其のまゝの名優達が縦横に活躍した昔の舞臺をなつかしき居られない、梅幸のお岩等は勿論當代での逸品である。だが族に見た芝居程の感銘が残らないのは何故であらう？ 私はそれを考へる？

歌舞伎——時代の流れに漂う一存在の運命の姿である。

近代科學が、其の科學で養はれた理智が、そして其の世界から離れて住む事の出来ない現代の俳優達が昔のお化け芝居が持つ怪奇の領分をだん／＼と滅滅して行きつゝある事は事實だ。

◇ ◇ ◇

私は夏芝居として現代の劇場向き、現代の観客向きのお化け芝居がほしいと思ふ。

青葉が其のまゝ、夜の闇に包まれると灯をはらんでフワ／＼と流れる蚊遣りの煙、幽かに油の匂ひを漂はして軒にゆらめく盆提灯の灯影、等、等、等、それらは昔ながらに今も尚ほ怪談劇のいゝ道具ではあるまいか。

新様式の怪談芝居、それは夏芝居の興味をつなぐ有力なる一存在だ、である事を信ずる。

だが然し夏芝居は興行者にとつても脚本作家にとつても苦手であるらしい、兎もすれば暑さから来る倦怠が観客席を占領する時、其の暑氣を押しきつて客を劇場に呼ばうとする苦心、それは並々のものでないらしい、五瓶が戯財録に書いてある文

句を讀んで見てもそれがわかる、夏芝居で傑作と稱し得るものは數へて見て、あまり澤山に残こつて居ない。

◇ ◇ ◇

昔の夏芝居と云へば怪談もかアツサリとした變化の多い乃傷ものが多いやうだ、ひるがへつて現今を思ふと、大抵は喜劇か劍戟か夏芝居の領分を占めて居る、七月の道頓堀各座も浪花座の淡海劇、中座の五郎劇、そして角座の新國劇だ。劍光、間髪をいれぬところに命を爭ふ、其の瞬間、洒落も冗談も無い其の瞬間の快味が劍劇の價值だ、だがそれよりも夏芝居（敢て夏芝居と限らないが）として喜劇の天地はより廣くより趣味深かいやうに私には思はれる。

作りごとの笑ひであつてはならない、何處までも眞實でなければならぬ、明かるい笑ひ、涼しい笑ひ、さわやかな笑ひでなければならぬ、其の笑ひが夏芝居として有力の一分野を持つ、持たしてもいゝと思ふ。それが全部でなくても夏芝居の一つの理想として擧げ得られるものである事を私は堅く信じて居るのである。

怪談劇の多かつた昔、喜劇の多くなつた今、

そこにも時代の移りが見へるではないか、そして慾を云へば七月の芝居街には新様式の怪談劇をもう一つ加へたい氣持ちだ喜劇はいゝと云つたところで其が理想の全部でないだけこれだけでは淋しい氣がしてならないのである。（五、六、二五）

舞臺人の銷夏多面

東西の俳優諸氏に今年の銷夏法やこれに就ての御感想思ひ出をお伺ひ致しましたところ、早速御返答に接しました。茲に特輯夏の讀物としてその到着順に掲げます。

中村鴈治郎

さうだんな、避暑には毎年行きますがこ
としは何處にしまほ……

夏場は休演の成駒家は、本年も矢張り避暑
には出かけるさうだ、そして、何處へ行く
にしても、必ず京成駒家(扇雀)と一所に行
く同僚は
今年はまだ何處にするか、相談してまへ
るので、何れ打ちあげたら(六月興行)一回相
談して何處に行くか決める考へだす……

勝元といろは新助で、六月の中座で健闘の

大成駒家は、いそがしい舞臺の閑にそれだ
け……

松本幸四郎

若い頃は両親に連れられて、ひと夏は箱
根、伊香保などへ避暑に行くのが例でありま
した。ある年、輕井澤へ参つた時、爰へ来て
ゐる外國人達が、朝の散歩、日盛りのテニス
と、身體をたへず動かしてゐる生活振を見
て、今迄眺められた、日本人の温泉場などに
於ける起臥、晝寢して汗になつたから湯溜へ
飛び込む、出ると直ぐ物をたべる、又廢轉ぶ
といふ様な避暑地氣分とは大變趣の變つて
ゐる事を感じました。流れる汗を拭つたあと

の心地よさは、夕顔棚の下すびみにも負ます
まい。

最近十幾年の夏は、引續いて地方巡業をし
てをります。時には夏休みらしい事をして見
度いとは思ひましたが、自分が休むが爲に、
私に附隨してゐる人達に、それこそ欲せざる
休息をさせるのも心ないことであり、又自分
に備はつた徳を敢て捨てるやうにも考へまし
た。

嘗て帝劇創業の頃でもありましたが、澁澤
子爵のある折の談に、健康體の者は働かねば
ならぬ、世の中には大勢の人間があるが、中
には既に戦ひ終つた老者、これから働く者
なる幼者、若しくは病者が澤山あるので、そ
の人達のおぎなひに丈夫な者は働かねばなら
ぬ、そしてその報酬は必ずある筈だ、例へば
健康といふことにても現はれるては無い。か
人間は働ける時は働くべきだ、とかういふ意
味の事を云はれましたが、それを多大に心
に感じました。

その頃以來夏は引續いて働いてをりました
が、その秋は身體の調子が非常に良好であつ
たと思ひます。
近頃、地方の人達が農村を捨て、都會へ出

る者が多くなる、それに連れて失業者は多くなる農村は疲弊する、その一つは農村には慰みがないからだといふやうなことで、民謡盆踊等の復興を叫ばれてまゐりました。

私達演藝に携はる者も、東京の一俳優とならず、日本國中を品賃先にして、多少なりとも地方の人達の慰めとなり度いと考へて、此の夏も旅へ出てまゐります。本年は、殊に緊縮を叫ばれてゐる折柄でもありますので、いつもとは趣を變へ、三津五郎、長三郎等を語らひ、演藝舞踊會といふもので此の七月を巡業することになりました。又舞臺で暑い思ひをした汗を拭つた後の心よさを充分味はへることとせう。

片岡ひとし

又暑い夏がまいりました。どうして暑い日を送りましょうか……私等の演劇にはよく夏の世界を取り入れた物が御座います、四谷怪談、夏祭團七、岩井風呂、縮屋新助など私は女形ですから他のお方にくらべて一倍暑く御座います。昭和三年の夏でした、中座で私等の若い人計りで伎藝座と云ふのが開演仕ま

した、暑さなんかには負てはゐられませんが毎日／＼猛練習で種々と木谷先生の御指教や父や先輩の御方の御意見を聞き暑い部屋で皆さんと一しよにやつてゐました。開演中も一生懸命でした。狂言は近松の「心中萬年草」で木谷達吟先生の監督でした。

あの時など夏はどこへ行つた何ぞと思ふ程でした、自分の熱度が高かつたのでしよう。ですから夏はよく働くと云ふ事が夏の暑さを征服する事に成ります。其時は笠屋町の家です。夜中の町を散歩して夜店など見る位でした。昨年から六甲に住みました。

昨年の夏は父と一しよに松島八千代座で打つてゐました。開場後風呂に入つて白粉を落し阪急までタクシーを飛ばして電車の人に成ります。スピードの電車、走る／＼涼しい風は顔をうち乍ら夙川で下車して又自動車で山の上まで……急勾配の山道を……ひやとする様な時……この走つてゐる瞬間が一ぱん涼しくたのしい時です。暗い山道山の風に木の葉が音をたてゐます、真白なヘットライトの光自動車はうねり曲つた道を走つてゐます。その内に家に着きます。もう大阪の様になにぎやかさは有ません、静寂そのものの様

な山の家……。自分の部屋で好きな人形をいぢつたり麻雀などをして夏の夜を送ります。夏の海も好きです。でも女形の私、色が黒く成つたら困りますから……毎年夏に成りますと芝居へ通ふ間の行程がたまたまなく好きです。

走る自動車……風を切つて……今私はそれを夏の思出に考へてゐます。

市川中車

昨年と、一昨年は相州の葉山へ出かけました。その前年は三州の蒲郡へ行つたが、蒲郡が一等好きでした、旅館の設備のいゝのも好きになれた理由の一つだが……。避暑といつても、涼しい座敷で一日中トラップを弄る事が好きな私は、餘り避暑地では歩けません。

日が落ちてから、家族を連れて、散策に出る位が、避暑地に於ける日課の一つです。然し、本年は、何處へも行けません。麻布の今の家が、去年の秋に新築が成つたばかりですから本年の夏は、この新居でゆつくりと過すつもりで居ます。

林 長三郎

病氣の保養に八ヶ月ばかり三州の蒲郡に出掛た事がありますが、其の他では避暑なんて寛いだ氣持で、出かけた事はありません。それに五ヶ年間毎年九月に松竹座に出演が契約されてあつたので、八月はそれの按舞で来る年も来る年も汗みどろでした。

本年はそれがなくなりましたから、何處かで身體を少し養ふつもりで出かけ様かと思つて居ましたが、幸四郎さん、三津五郎さんと私との舞踊大會が決まりましたので、また行けなくなりました。

身體さへ健康なれば、避暑なんか行き度くはありません、いゝ曲でも聞き乍ら、終日按舞の構想にでも耽つて、夕方汗みどろの身體を湯に流して食膳に向ふ方が、何れだけ愉快か知れません。

元來身體の弱い私は、一年中の活力素を舞るために、避暑にも行つて見たいといふ氣持はありますが、そうできなれば避暑などは考へません。

曾我廼家辨天

折角の御照會に接しましたが、私は銷夏法と云ふ事に就て格別必要を認めませぬので、従つて考へて見た事ありません。甚だ天の邪鬼を云ふ様ですが、事實十六年前銷中毒に冒されて以來人様程基を感じた事がありません。寒さは其代り人一倍感じ易くなつて居ります。孰れ病的的作用でせうが左のみ苦痛を感じるでもなく、場合に依れば即ち夏中などは却て大きに助かりますので格別氣にも留めません、この病的？は私一人でもないと思ひえて確か曾我廼家大藏君も夫れの様に記憶して居ります。偕て銷夏に就ての感想ですが之も前述の次第で先づ門外漢とも云ふべき私が彼れ是れ云ふのも潜越な沙汰ですが、避暑旅行などの銷夏法は先づ贅澤な事だと思ひます。尤もこれも私自身が職業の關係上人様が金を費つて出掛けの所へこちらは營業旁官費で出掛ける事が多いのですから。そして、それが今日迄かなり汎く歩いて居るだけに海外へても出掛けぬ限り珍らしい風光に接すると云ふ事も少いでせうから、そふ云ふ風に考

へるかも知れませんが、厭つて一年中一つ所に一つ業務に提はれて居る方々から云へば其の旅行が唯一つの避暑方法であるかも知れません。然し世間一般に避暑の目的地とせらるゝ様な場所を選ぶよりは寧ろ手近で安價で人の餘り行かない所に、却て大自然の風光に親しく接する事が出来るだらうと思はれます。私は目下一年中殆んど休みなしに働いて居りますので唯一人の母親の許は素より、多數の御蟲屑先きへも文通のみに依る他は御無沙汰をして居ります、そこで暑中休暇の一月は誠に私に取つては有意義な機會で先づ母の許へ四五日、それから各地の御蟲屑先へ夫れから夫れと御挨拶に出掛けます、それが少くとも一ヶ所に二三日或は四五日づゝはかります、それで私は一年中の禮を盡して先方にも御満足を頂いて結構な御別荘などに官費の滞在を續ける様な事になります、全く一ヶ月間の避暑旅行の様ですが前申しました病的の私決して避暑の目的から出たものでない事は御了察を希ひます。

曾我廼家小次郎

鐵道省のポスターではないが「海へ山へ」なんて云ふ題をつけましたが別に、海に千年山に千年、と云ふ甲斐の生へた怪物の物語りでもありません。筆無精な私へ「銷夏法」一つと道頓堀雜誌社からの御依頼に恥も忘れて思ふたまゝを書かせて頂く譯で御座います。例年夏の休暇を利用して旅行するのを何よりの楽しみにして居ります。私は六月の月にはいと海へ山への何れかを選びます。少年時代から海邊に育つた私も、現在では寧ろ山、登山、テント生活を好む様になりました、河童であつた私が山登りを好む様になつたのも三十年代の尖端を行くと云ふものでせうか？日盛りに海へ入り陸へ上つて焼砂に轉がると云ふ事は銷夏でなく却て暑さの苦痛を増して行く様なものですからね。それよりも生駒、信貴の美山をはじめ、六甲、金剛、高野等々々、山に恵まれた大阪に住む私にはその冷氣の魅力を感じずには居られません、一度金剛山へ登山して以來、六甲のテント、高野の御坊、伊勢の朝熊に、京都の比叡と、次から次へ山の征服、と云へば大仰ですがそれ程勇敢な事もありません、汽車を利用し、又自動車の便をかり、最後にケー

ブルの御厄介になると云ふ山の勇者で御座います、ケーブルの御厄介になつたからと云つて一概にケーベツしたものでありませんよ、今年は一ツ元氣を出してアルプスか富士へでも登山をする覚悟です。海で、裸體の婦人の海水着に糸の仙人ならぬ私の心を亂されるよりも美山の威力を慕ふ尖端的男子でありたいと願つて居ります。私の銷夏法は山へ、山へ、山へ……で完結いたします。

曾我廼家 太郎

ある年の七月でしたが、避暑方々伊豫の吉田へ行つた事がありました、其時宇和島の頭取で房助が來まして涼みがてらに働いて呉れと頼まれて行きましたのが宇和島より三里南の岩町です、小屋はむしろ張りの掛小屋です、芝居は嵐三津十郎、尾上幸若、瀬川乙女兄弟の一座です、藝題は忠臣蔵、私は原郷右衛門を付けられました。四段目まで進みまして、判官が切腹して落入り、薬師寺石童も退場し顔世御前も登場しました、由良之助が左に扇子を持變へ要の處で倒れた判官の頭へかけると判官は身軀と共に顔を上げる、由良

の助は眼をしばたゝき、臺詞になる「町人でも大名でも自分の女房を人に問男言ひかけられ何と辛棒が」とこゝで臺詞を切つて、扇子を左にもち變へ、左の手に扇子の上を握りて臺詞「出來ませう」と泣き落します、此れを見て顔世が懷劍に手をかける、臺詞「御臺所には何となされます」顔世の臺詞「殿様の御最後も元はと云へばわらはゆえ」由良之助の臺詞「その仰せはもつともなれど今御果なきれては殿様の臺守りは誰が致しまする」と右手で扇子の上を持ち、要の先きを上下に動かし、臺詞「草ばうく」と生やす氣か」と扇子を高く音を立てゝ下に置き、膝に兩手を付いて目を刺くのです、私も思はず吹き出しかけるのを堪へました、言ひ忘れましたが判官は幸若、由良之助は三津十郎、五六七段目まで打出ししてもう午前二時でした、岩松の土地は波が荒い上に舟付場ですから海の方は石崖になつてゐますが満潮の時は足元より海面まで三尺ありません、その道を五六丁通つて宿に歸るのです、その日に入座した土佐の男で友十郎と連れ立つて小屋を出ました。由良之助の珍形、判官の惡口などを興に乗つて笑ひ話しにし乍ら歩いて居ますと、いきな

り後から私と友十郎を海へ付きはめた者があ
ります。私は泳ぎを知りませんので、水を飲
み、あぶくしてゐますと、幸ひに友十郎が
救ひ上げて呉れました。大勢どや／＼と駈け
付けて来て色々手當をして呉れましたのでや
つと蘇生致しました。放り込んだ加害者は判
官役者の幸若てした、自分の悪口を聞いて腹
立ちまぎれにやつた藝です、私の方にも罪が
あるのでそれからすぐ仲直り致しましたが、
眞に苦しい避暑で御座いました。今思ひ出し
ても寒けが致します。

曾我廼家致雄

ある年の春。一寸したこと身體の調子が
狂つたのでその道の人に脈をとつて貰つたが
薬を信じないわけでもないのに一向利き目が
ない、知人に禪の奥儀を極めた僧があるの
で洛北の庵に門を叩いて心の脈をとつてもら
つた處、病氣とは氣の病であるから薬は第二、
心の養生が第一である、命が欲しければ一週
間わしのもとに通へとのことに參禪して悟道
に入つた處、不思議と氣分が爽かになり十日
にして舞臺に立てる様になつた。

その中に春も過ぎ橋のしのぶに夏の涼を趁
ふ頃になつて、久し振りの休暇があつたの
で、家内が手製のふきの鹽昆布を手みやげに
訪づれて久淵を詰めて、いろ／＼と雑談の
折、何氣なく禪師の姿に氣付くと酷暑八月と
云ふに白木綿の袴、襷も亂れずに威儀正しい
態度に、自分は明石に紹羽織、それでも止め
度なく流れる汗に激しい扇使ひ、少し不思議
に思つて銷夏も心の修業ですかと一問を發し
た處、禪師は大きく首肯して、左様と答へら
れた、凡そ衣は寒暖に與ふと雖と心季に順ぜ
ざれば敢てその用なし、即ち暑を感じる時顔
に汗し、寒を思ふ時脊に水を浴びるの感あ
り、寒暑即心氣と云はれて、成る程と思ひ、
努めて、それに處してみた處、禪師の言の如
く酷暑中綿入にネル裏の足袋にても過ごせば
過ぎせるもの。

一日、ある人にそれを話した處、その人喜
んで早速實行にとりかゝつた。まではよかつ
たがその頃流行の登山熱にコールの冬服に部
厚いオーバを着込んで近郊の族に杖を曳い
た。同志の嘲笑も意とせず意氣揚々として八
里の行程を三里までは無事に歩いたが急坂四
分頃から玉なす鼻の汗玉を舌で舐めて肩息も

爽しく氣息奄々たるものである。同行の一人
が輕装をすゝめたが受賣りの禪にさも得道し
たらしく吹いた手前今更それならず、意地
を通して道を進めた處、頂上も極めずして八
分目でとう／＼倒れた。そのまゝ日射病に罹
つて歸宅の後、結果水の枕に醫師の厄介、妻
君は急を告げての迎ひに宙を飛んで病床に見
舞つた處、苦しい息の下から、
「致雄君、人間心の修養も自然の威力に抗ひ
難し、眞の養生は寒暑に處して過ぎずにあ
る」と遺してその友は逝つた。
十年前の夏の思ひ出、河鹿鳴く聲、せゝら
ぎに涼を趁ふ頃になると、いつもこの話を
床几の上でしみ／＼したくなります。

片岡我童

銷夏法なんてむつかしい事は書かれませ
んから、たい暑い夏を過ごして來た思ひ出を。
四五年前までは毎度別府或は兵庫縣下の垂
水などで夏の幾日を過ごしました。明石の海
から吹く潮風に青色の海を見て天幕生活でな
事は出来ませんがでも自分でよく散歩の歸り
に新しい魚とか食物店で買つて來た物をそれ

を料理つて家族と一しよに舞臺からはなれた家庭の人と成つてマアホテル生活とキャンピングの延長の様な具合でして……数年から六甲苦樂園の悪ヶ池畔に別邸を作りました。雑音の都會生活をさげると云ふ意味で……新しい狂言についての演技衣裳の考査などは大抵この山の家で静かに考へて見ます。毎年夏は家族を連れて來てゐます、昨年からは都合上大阪の家を引越して全部がこの山の生活を仕始めました。にぎやかな巷になれた私達の生活がだん／＼と自然に親しめて行けさうです、殊に夏は又格別です、大阪よりは五度以上は違ひます。涼しいつたらお話しに成りません、森や林を散視して遠く海を望み、脚下には西の宮市が見へます、青色の木葉……後には茶色の山を背負つてたてられました家屋、子供の便利を思つて洋館を新築致しました。空色のカーテンに清楚な部屋で藤椅子にもたれて冷たい水菓子など……月の有る夜など露臺に立つて眞下から昇る月を見る時の心持は避暑旅行しての旅先の味はひよりは居るに於けるの銷夏法でせうネ。

山の生活それほど土と自然に親しめる物は有りません、又この苦樂園附近の水質はラヂ

ウムをふくむそうですから體質上にもよい譯です。夏に餘りうちわを使ひませんから變な時が有ります。夏の夜……一浴の後夏知らぬ青木の木立笥の静かに囁やく水の音……遠く或は近くに見へる海と山の夜……明滅する漁舟の火……西の宮市の灯……それを見乍ら一家團圓の物語りに耽ります。「この風に不足を云ふな夏座敷」と俳人一茶の句に……私は山の夏を——こうして過ごして行きます。(昭和五年夏、六甲恵ヶ池畔にて)

志賀廼家白石

肅復銷夏に就つての御下問斯界の大家がた數多き中に小家にも足らぬ小生迄賜はりしは冥加至極然しながら金も閑も學も力もない小生今迄に夏はどう云ふ暮し方をしやうかと考へた事も之無く、云はば盲目の賞花か啞の唱歌却つて諸家の御禮書と存じ候へども之れも金條玉縷の附け生姜と思召し御章加被下度候も

夏は暑いものとは誰れが極めたか知らぬが大昔から世の中の掟だ、その世の中へほんの

一時うよ／＼とわいて出た人間がその掟を破つて夏を忘れるやうの、暑さを征服しようのとはそも／＼の不量見とは思ひながら、なまじ生身を以て生れただけに云ふても初まらぬ事だがやつぱり暑い。そこであわよくば己れだけ夏中は死なずに居て世の中から離れたいと蟲のよい分別をして様々に思ひを凝らすのが銷夏法と云ふやつ、海に山に温泉に扇風器に暑さを免れようとしたり、詩文や茶事園藝や魚釣、スポーツと様々の趣味に夏を忘れようとしたりするが、これも有閑者有産者の獨專するところ、瘦我慢の無理算段で眞似て見たところ、結局苦しみが増さうと云ふもの、折角の避暑もお供の格では結構で御座いますと云ふのは據るなしの御追従、所詮は一種の優越感と云ふものが必要らしい、避暑のお供で涼しい奴はおんぶさした所に自己満足を以て居る。

人並に暑中休暇を貰つた吾等、イヤ貰つたのじやない休ませられたのだ。世間様の手前と即ち無理算段の避暑と同筆法の然もお附合ひに(吾々レベル以下の俳優は總てこの御都合主義に支配されるのだ、空腹を抱て歌を唄ふ千松もどきに)

されば先づただけは萬人平等に暫し浮世を離れる事を許された自然の恩恵而も貴賤貧富も喜怒哀樂も思ひの儘の華胥の國へ一旅行歸つたら五銭を齎發して温泉にでも浴し、更に縁日で一圓を投ずれば山水明媚の風景も掌中に收め得べく、十銭の水からくりを千丈の瀑布と見ればたゞ鹽の水を萬里の波濤と眺むるもよし、但し總てこれで自己満足を要する事。そして休暇が済んだら、イヤ働かして貰へる様になつたらあの山はどうぞ御座つたの、どの海は斯うぞ候の、彼處の温泉は卑俗だの其處の瀑布は人工的だのと苦しい中から乏しい見聞の知識を絞り出してこの御都合主義に迎合し、首尾よくそのお附合ひを有難がる處、こゝでも千松毒饅頭を頂く一場面さて今から考へても夏向きに暑い狂言。

曾我廼家大磯

私は貧血で人様より暑さの感じがにぶる様に思はれます。其の精か餘り汗なぞは出ませんです。デモ夏の方が身體にこたへると見へましてやめます、暑い時にブラ／＼してゐると餘計に暑いですから晝中は浴衣一枚で義太

夫が常磐津の一段も語る汗ビツシヨリにかきます。そこで行水をしなすとスーッと涼味を覺へ何ともいへぬ氣持です、夜は芝居が終つて入浴して宅へ急いで歸つて冷へたビール但し冷蔵庫では餘り冷へ過ぎてビールの眞味を缺けますから井戸に冷やした程度のを大コップで息もつがず、コク／＼と飲み干す此味はたまりません。一日中の暑さを一時に忘れまます、之れが私には一番の銷夏法です。

(帝劇樂屋にて)

中村政治郎

夏が参りました。御存じの通りの身體です人一倍暑さが身に滲みます。夏が來ておひ出すのは一昨年八月の暑い最中にひとしきさん等と伎藝座をやつた時です。殊に女形で随分暑苦しい衣装で二十分以上も踊り直に引拔て石橋と約四十分も踊りつゞけた事です。元來暑がりやの私しがこの身體で本當に閉口した事と御想像がして頂けませう。私は夏は大嫌いです。誰でも云言草です矢張り冬の方がましです、人が避暑だとか避

寒だとか遊び廻られる時は私等は踊つたり眠るをむいたりしなければなりませんので本當に避暑を味はつた事が無いのです。

眞夏に芝居をするのは苦しい中にも爽快です。夏になれば私等の天下が来るのです。どんな大役でも出來ます。研究さして貰えます。ですから自然夏を待ちます、が夏は大嫌ひです、二ツ好きな事はありません。今年は芝居も休みと極まりましたので此の夏をどうしてすごそうかとそのプランを考へて居る處です。海水浴……讀書……麻雀……こんな事が日課となつて毎日繰返す事だと思ひます。昨今櫻梅會と名付た朗讀會を若い人々とやつて居ります、夏に折柄御めいわくて御座いますらうが一度お聞き下さいまして御批評をお願ひ致します。

只今でも舞臺へ出れば汗づくです。暑い暑いと口辭に云つてゐます。(中座樂屋にて)

市川市藏

夏が來た。海に山に温泉に旅行には好期である。焼付けく様な白砂海水に浴するも又夏の魅惑である。然し私には登山が唯一の楽しみ

である。山又峻嶒なる山道を登り詰めたる時凡ゆる社會の繁煩な出来事を忘れ神聖なる心に轉じた時流汗の努力は終に己を山頂に慰はしめ目まぐるしき社會を一目に睥睨した時宏大無遠の境に入るのである。涼風颯と吹く時疲勞も忘れ己が努力の酬ひられたる喜びに人生の悅樂を味はふのである。斯くて幾多と知れぬ諸國の山を登つた。山は私にとつては銷夏^{しょうげ}の好對象物である。

近くは鞍馬愛宕比叡を二日間にて連涉せし事もあり勿論その當時は乗物の便も少かつた中國筋を眞直ぐに關門を迂りて九州路に入れば天下の奇勝耶馬溪に至り羅漢寺附近峽々絶たる巖或は走狗せるもの龍驤せるものあり、絕佳の風致正に宏大なる一幅の繪畫である。日田盆地に至れば阿蘇山近く山頂よりは盛んに煙渦巻き物凄じく唯感嘆の外なく登山の勇氣は更になかつた。次に經路を東に沼津に至れば富士の靈峰を車窓より眺む四時白雪を頂き尊大優美なる容姿に見とれる登山の意あれ共その機なく唯眺めて賞美すべき山と斷念した。妙義山に登る。奇岩重疊誠に奇觀を呈し鐵鎖を便りに登る。案内者尻垂阪と説明す誠に

適宜である。岩の妙仙境に遊ぶ如く登山の苦痛も畫趣に打忘れた。

一昨年の夏北陸へ行つた。温泉廻りも興なく黒部峽谷を探勝す宇奈月より猫又に至る間の車道面白く人命の安全を保證せずの揭示も又風變り溪流急にして巨石磊塊と起伏し樹影は森々として深くその間を縫ひ猫又より鐘釣温泉へ行く又壯快である。彼方日本アルプスの連山翠えアルプス踏破の夢想を抱かしめた然し未だその友を得ず近き將來には是非實現する積りである。

昨年は方面を土佐に大歩危小歩危の奇勝を見物した。

斯くて年々日本の津々浦々の名勝を探索し或は山に或は海に旅行し以て私の唯一の銷夏法としてゐる。

偕て本年も正に盛夏旅行の誘惑に朝鮮金剛山も可アルプス連峰踏破も亦可今日日本全圖を擴げて何處を目指して旅立たんか目下計畫中である。

曾我廼家十太郎

晝夜興行の忙しさは暑い寒い區別も判

らん程で有ります。冬よりも夏は自分の身體の肥えて居る故に一層思ひ出します、いかなる暑い中にも軍隊生活以來私はシャツを放さない習慣です。

其の御蔭か暑い最中にシャツを取りますと暑いよりはむしろ身體がこそばい程です、又八月は例年の暑中休暇がやつて來ます。此の暑中の休みは身體の置き所に實に困ります、永年二回興行の多忙さに太陽を受ける事が少ないです。

休みの日外出すれば目がまばゆくフラ／＼として歩けん程です、昨年箕面の親類へ参りました時その四五日は實に冷かな思ひがしましたがつて、ねが生れ就いての芝居好きです、から、早やもう舞臺に立ちたくて、思ひ掛けると後の日が實に永い思ひです。さて芝居をすればカズラの頃から汗がぼと／＼出てむし暑い日に何千燭光と云ふ電熱の光りて照らされて着物と身體の間からえも云はれぬ暖みが出て來ます、それを思ふとその辛さも思ひ出されます、それを切り抜けて閉場後入浴を終り表に出た時家に歸り冷いビールを呑んだ時、この味は一寸私達の稼業でないとい味はれません。

これは昨年の暑中休暇の時箕面に居りましたその中或る人から教はりました。

つまり暑くてたまらない時聲を出して「雪や氷冷い水」と節をつけて三度以上云ひますと全身ヒヤーツとすると云はれました。

私は其夜九時頃に戸外に出て風のイヨ／＼吹く時にこれをやつて見ました、ほんに成る程……コレツツの「銷夏法」と私は思ふて居ります。此の銷夏法を宣傳願ひます。

嵐橋三郎

私の銷夏法は幸いにして拙宅は近所まれなる涼屋にて皆々の羨望の的でありますので本年は讀書三昧に暮します。

思出は例年の全國中等野球大會に甲子園通ひを朝早くよりするのと夜の心ブラを楽しんで居ります。

田村樂太

「ヤア暑おまんどうしてはります」

「もうこう暑いと叶いまへんな、これやつたら寒い方がよろしいな」

人間で勝手な者です、寒い時には夏が好いと云つてその夏が来れば寒い方が好い……これや神様もうろが来ますね……銷夏——人の顔さへ見れば暑い／＼と云うのがまるで日課の様に知らず／＼の間に口から飛出して仕舞います。毎日舞臺に上つて御客様の方を見ると扇やウチワがまるで時計のふり子の様に動いてゐるのを見ると急に涼しくなつた様にも思ひます。私の毎夏になつて思ひ出すのは、こんな都會の暑苦しい所の劇場を引拂つてアルプスの山上へ劇場を建てゝそこで涼み芝居をしたいと思ひますな、それ共大きなガラス張の劇場をこしらへて海の底へ入れてギヤマン海底劇場とかなんと云つてね……一寸普通の人は考へつゝかかん名案ですやろ？それに考へてゐるのは夏を寒くする方法？これは一寸むづかしい事ですな。毎年夏が近づいて来ると今年は一いつ何處かへ避暑にと思つて居るのですけれど、そんな氣の利いた事もようせず、やつぱりむし暑い家の中で暑い／＼と云ひながら暮してゐます。一日の汗を夕暮れの錢湯から歸つて涼しうに打水のした庭をながめ御膳の前へ坐つて冷へたビールに冷奴の味は銷暑でないとい味は

う事の出来ないものですな、そんな時には夏の好い氣持ちがします。

夏の暑いと云ふ事は今に初まつた譯やなし別に不思議もなく文句のないのですけど、いやなものですな。

けれど此の夏も今に必ずなくなる時が来ると思つてゐるのです、それは毎年／＼太陽が弱く小さくなつて来て仕舞に節玉の様になつたら、夏も冬も同じになるやろと思ひますなまあどちらにしても辛いものですなア。

えらいくど／＼と阿呆な事はつかり云ひましてすみまへん、もうこれで愚痴は中止にします。ほんまに暑おまんア。

中村魁車

これまで夏休みは、大てい有馬へ出かけたのですが、今年は方向をかへて、何處か海濱へ出かけるつもりです。

それは、どうしてだか、自分にも、その理由に判らないが、多分有馬にあきたのでせう海濱で、海水着の色でも見て、大いに着返るんですな——まだそんな年でもないが……場所……演寺あたりです……？

いけないく、あんまり大阪の近所だと若い連中が度々やつて来て、にぎやか過ぎるだらう、それでは避暑にならないだらうし……。須磨？ 明石？ サア何處に仕よう！ まアいゝ、出かける前の日に所はきめませう……。

中村 成太郎

「今年はどちらの方面へ御避暑です？」

「サアどこに仕ませう？ なあ——」

ナンテ涼しいお答へは表向き

「役者の避暑」夫れはあんまり樂なものでは有りません。たとへ一月でも遊ぶ間があるとしてもいつも商賣の事斗りを考へて居ます、先ず第一に身體を丈夫にする事、是れ迄演つて來た事を考へなほして見たり、いそがしくつて平常讀めなかつた本を讀んで見たり、無沙汰を仕て居たお友達の家を訪ねたり、夫れからそれと中々いそがしいです。芝居を見物に行けば出て見たく成る。活動を見ても演りたく成る、どうしても商賣の事斗り考へて居る（夫れはどなたでも同じだらうと思ひますが）そうして早やく芝居が開かないかと夫れを待つて居る、ヤツバリ私は役者が好き

なのだ。（六月二十五日記）

嵐 吉三郎

父の主義がよく勤めて、よく遊べといふ風で、夏の休みだけは、ウンと保養するために、毎年、の如く必ず避暑には出かけました、處が昨年の七月などは、輕井澤に伯母を訪ふて、ついでに避暑を兼ねると、八月の九州巡業に加はる事になり、一ヶ月遊んだ身體に、酷暑の巡業で、環境の極度な變化が、健康を毀すにまで至りました。——だから、本年は何處へも行かないつもりで居ます、避暑の思ひ出としては、毎夏葉山、熱海、鹽原、那須、輕井澤等大抵の所へは父と共に參りましたからその度毎に思ひ出も随分ありますが、一番忘れられないのは、一昨年の八月那須温泉へいった時です、仕事の都合で父としみんと話し合ふ機會は毎年の避暑地より外にはありませんでした、其の時も父と一緒に。當時、丁度、盛んに流行つてゐる湯のみ唄が、本場の温泉ではやりかけた時でした、父はその唄が好きで、湯に浸りながら毎日「お前一人か、連れ來はないか、連れはあとから駕

て來るくく」なんかを樂さうに聞いてゐましたが、そして、その年の十月父は亡くなりましたが、年に一回の父との打とけての會合——その會合も一昨年の那須が最後だったのです。

それから少したつて、大阪でも京都でも各地方でも至る所で、あの「チョイナ〜」が唄はれる様になりましたが、私はその唄を聞いたに、那須の湯槽に浸つて樂さうにその唄を聞いて居た父の面影が眼前に浮んで、覺えず、知らず合掌する氣にされます。

曾我廼家 龜鶴

私は是迄銷夏法等考へた事はありません。私達の様に晝夜二回の興業に追はれてゐる者にはそんな悠長な事は實現出来ませんから考へた事ありません。併し私達のやつてゐる事が銷夏法の一つだらうと思ひます。五キロの電光サン然として輝いてゐる灼熱地獄その物の如き舞臺で働いてゐる間は何物も忘れてゐますが幕が下るや最後流汗十斗、もう立つても居ても堪まりません。高々とべた丸帯もナイフで切り捨てたい様な感じがします。樂

屋に飛込むや早速衣裝を脱ぎ捨て……浴場に飛び込み全身の汗を洗ひ落して自分の部屋に歸り窓越しの風に當つてゐる時の涼味は私達職業以外の御方様には味はえない事だらうと思ひます。

一昨年の八月暑中休暇を利用して山陰道の佐津に避暑した事があります。邊陲の海岸だけに餘りに世間的でなく避暑客も少いので骨肉たるむ程緩く避暑が出来ました。そして思出す儘に道樂の魚釣りに出かけました。面白い程澤山釣れます。或日それは舊盆數日前の事でし程よき處に釣糸を垂らしてゐますと多勢の小學兒童が鉈、鎌を持ち海邊の小高い山に在る村の共同墓地に莊々然と生え繁つてゐる雜草を刈り取り海岸より白砂を運んでまだらなく敷き詰め綺麗に御掃除をして地下に眠る幾多の靈魂を慰めて居るのを見ました。實に美しい行ひではありませんか。併も其行動が級長の號令に従ひセコンドの動きの如く瞬く間にあの廣い墓地が潔白されました。そして氣を付け番號禮右向け右前オイで足音高く歸つて行かれたあの小國民のいたいけな行ひは私に色々の教訓をして下さいました。兒童より有難うございます。其子有て其親有るを

つく／＼感じました。又訓導の善き教化も察しられます。隊伍亂さず歸つて行かれる兒童達が崇高な感を放つて私は思はず敬禮せざるを得ませんでした。餘り感じ過ぎて其日は獲物は有ませんでした。が美德といふ偉大なる得物の有つた事を今でも喜んでゐます。

實川延若

夏場の休演時には、毎年引き續き巡業で、近年來避暑などと云ふ落ちついた時間を持つた事はない。

元來避暑などはふだん體の壯健でない人若くは病氣保養のためにするものである。

壯健で働ける人には、わざ／＼避暑地など選ばなくとも、仕事をしながら充分に避暑の氣分も、壯快な涼味も味はふ事は出来る、それに、自分達の様に比較的累の多い商賣で、しかも集團的な仕事に當つてゐるものに、とつては、避暑等は考へなくてはならない。一人の避暑のために、多くの弟子や一門の人々にまで休演を餘儀なくさせる事は決していふ事ではないから……。

だから、毎年夏場は、一家一門を引き連れ

巡業に出かける、それがために、幾分でも人々の生活の安易が得られれば、自分一人避暑地に納まり返つて味はふ快よりも數等すぐれた愉快を味はふ事が出来る。

しかも巡業先でも涼もとれれば、効果的な銷夏法も得られる。

當る七月興行（河内家一行巡業）

八日——十四日
丸龜戎座、松山國伎座、廣島、新天座

【狂言】壹番目「夏祭浪花燈」住吉より泥場迄三幕 中幕「近江源氏先陣館」盛綱首實檢之場、三番目食滿南北作「心中かつら川」三場實川延若二役早替にて相勤め申候、大切「かづばれ」長門連中

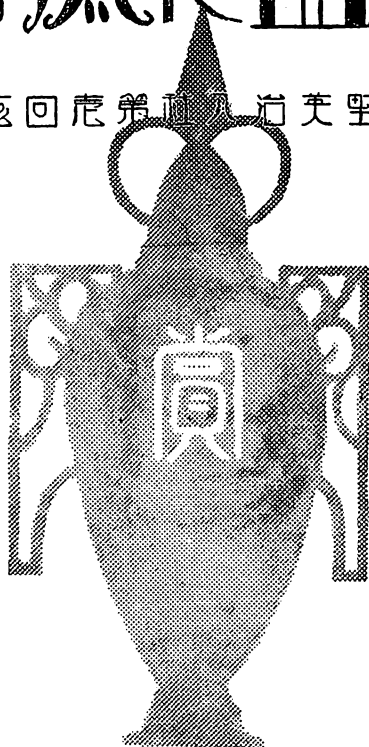
【役割】一寸女房お辰、高綱妻篠火、宗兵衛妻お瀧、重坊主（霞仙）團七女房お梶、信樂太郎、信濃屋お半、宗兵衛娘お雪、太朗坊主（成太郎）一寸徳兵衛、和田兵衛秀盛、羽室の幸次、喜久坊主（橋三郎）役人堤藤内、竹の下孫八、佛檀屋才次郎、八坊主（八百藏）玉嶋磯之丞、注進四宮藤太、雁坊主（官屬）なまの八女房おつぎ、妻早瀬姉おきぬ、關坊主（奥山）でつち庄吉、高綱一子小四郎（小廝）こつばの權、古郡新左衛門、延坊主（延郎）大島佐賀右衛門、北條時政、法印傳法、駒坊主（鷹正）釣舟三郎、三河屋義平次、母微妙（大吉）團七九郎兵衛、佐々木三郎兵衛盛綱、帶屋長右衛門針の宗兵衛此二役早替り（延若）

新登場 赤キネ 恒品

若き血に燃るもの

中堅美道 入道 弟虎 回恒品

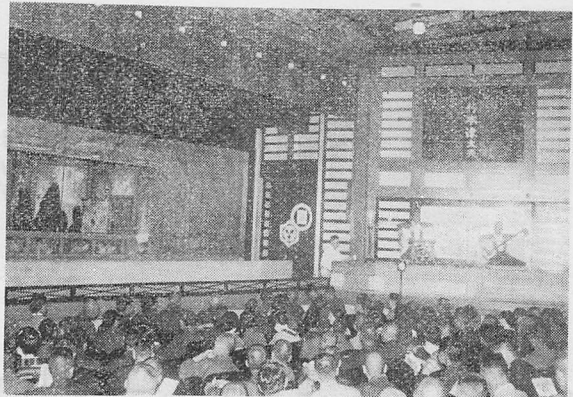
八日・芦邊劇場に封切



木村恵吉 監製

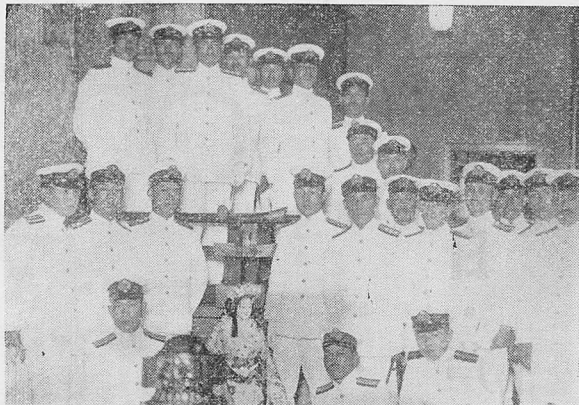
「沼津」の中継放送

四ツ橋文楽座の六月興行では、土佐の十種香と津と古靱の沼津が呼物となつて絶讃を博した。これよりさき大阪の放送局では各興行に吉例的に、文楽の舞臺を全國中継してゐたが、この空前の「沼津」を全國のファンに聞かせたいといふので、古靱、津の兩巨頭を説伏して、愈よ六月七日午後七時四十分から中継をなした。因みに沼津の語り分けは明治十年、先代津太夫と住太夫以來のものである。



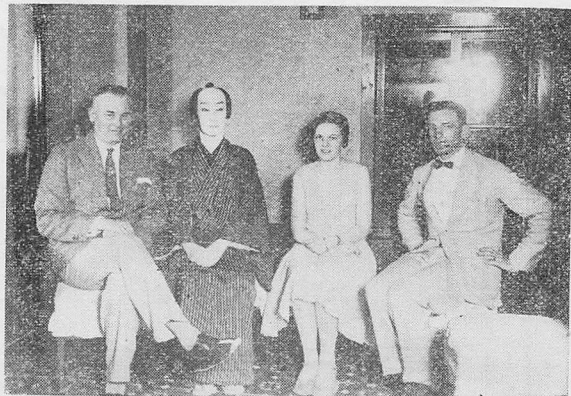
文楽の艦隊招待デー

大阪には珍しい艦隊入港——六月十四日から三日間淀泊——府市民はこれが歓迎に全力を注ぎ、各方面ともに遺憾なき歡待ぶりを見せてゐたが、劇界では各劇場を半額で開放した他、四ツ橋文楽座では、折よく郷土藝術の人形淨瑠璃を開演中だったので、第一艦隊の將校連を淀泊の三日間を割つて六百餘を招待した。寫眞はその時の記念撮影である。



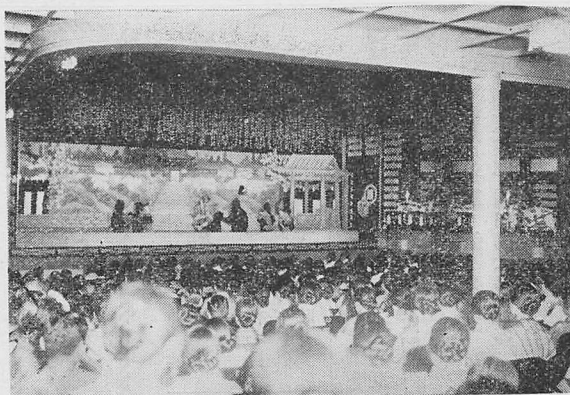
鷹治郎と獨逸領事

獨逸領事のドクトル、ビシヨフ氏は六月十八日道頓堀中座の東西合同大歌舞伎を観劇してから成駒屋の部屋を訪れ、刀屋新助に扮装した鷹治郎とビシヨフ氏が會見して握手した。この時の演物は一番目「伽羅先代萩」、新歌舞伎十八番の内「鏡獅子」、二番目「いろは新助」、新歌舞伎十八番の内「大森彦七」、大喜利上「羅越路東諷」下「天下祭」だった。



「人形淨瑠璃教育會」生る

文樂の人形淨瑠璃を中心に「人形淨瑠璃教育會」といふ新しい會が生れた。この會の主旨は「若い國民に藝術教育をモットーに専ら男女中等學校生徒徒に、藝術の普及とこれを通じての教化運動をなすべく、發起人は素人淨瑠璃の大家加藤博士、松竹常福、福三郎、橋詰せみ、三氏、第一回公演は廿九日文樂座で舉行、人物は「加賀見山舊錦」で太夫は南部以下、人形は紋十郎以下若手連であつた



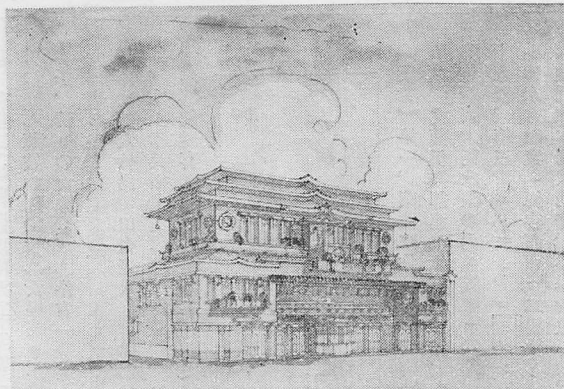
マネキンとスカイサイン

宣傳戰線の失行として新時代の流行「マネキンカー」の使用が劇界にも侵入して來た。今度浪花座の七月に歸演する淡海劇一派では、役者の顔を出さないのでシヤール、モダンな戦法で、大いに宣傳しやうぢやないかと云ふ事で、大阪マネキン俱樂部のマネキン嬢十名を雇込んで市内の盛場をねり歩かせた。此他、角座では、是も新時代の流行である。心齋橋のスカイサインを使用して宣傳を試みた。



朝日座の修築と設備

修築の噂があつた道頓堀相合橋畔の朝日座は、六月三十日夜、板垣ひを了し、橋本組の手で工事に着手したが、工程は二ヶ月、九月上旬竣工の豫定である。階は全部三等席に開放、二階は馬蹄形の學客席、三階は樂屋、劇場設備は近代科學の最善と衛生第一を期すると、また切竹賣場から接待氣分を出して夏は涼風、冬は暖風を客の頭から浴せるといふのは、劇場に魁けた新しい試みである。



劇壇往來

曾我廼家五郎劇

中座
一日 初日
初日四時半開幕
平日五時開幕

【狂言】第一、「高塀」武場・第二、「夏晴」武場・第三、「鋤三本」武場・第四「怖い眼」武場・第五、「縁日の宵」武場

【役割】老爺朴正順、鋤手金太郎、休職陸軍太尉乾喜代滿、稻田勘太郎(五郎)聞き合せの人戸張市造、人夫小頭佐々木市松、鋤手三太郎、豆腐屋主人鶴見徳助、左官佐兵衛(蝶六)お若の母お元、未亡人政子、妻君お吉(大磯)地主淺井八兵衛、鋤手虎造、散髮屋GS軒庄吉(小次郎)洗服屋主人東坂文平、綱元磯野權右衛門、殺蟲劑屋衛松(一朝)炭屋主人萩原太一、鮮人土工甲、村長田代喜代松、西瓜屋與吉(五樂)道路人夫、徳助女房お久、GS軒助手(林蝶)正順の悻朴正鈴、幼稚園々長(時雄)正順の娘朴李葉

志賀廼家淡海劇

浪花座

七月 一日 初日
正午、五時半、二回開演

お元の娘お若(秀蝶)洗服屋若者、鮮人土工乙、見張番幾松、職業紹介所事務員(時右衛門)萩原の娘糸子、鮮人の女、平八嬢おむつ、金魚屋おまき(時和)聞き合せの老婆おしげ、鮮人土工丙、漕手平八、職人光公(五郎丸)炭屋の若者、助手田村某、漕手鹿六、植木屋李兵衛(笑將)魚人土工丁、田代の下男七助、紹介所小使、虫屋甚七(宗蝶)鮮人土工戊、漕手三千造、紹介所事務員、青年甲(蝶太郎)三十造嬢おせつ、新内師匠お春、佐兵衛の妻お作(桃蝶)

【狂言】第一、「子は寶」壹幕・第二、喜劇「喜八と清六」壹幕・第三、「謎」壹幕・第四「人生雙六」十一景

【役割】母親おみつ、妻(龜鶴)兄市之助、石川英太郎(辨慶)樽屋七兵衛、隣り亭主(樂太友人藤村白石)姪お辰、妻比奈子(かもめ)會社員憲太郎、父豐作、職工(歸帆)友人藤川(樂祐)監視人(浪縁)腰元松ヶ枝、ウエター(富士野)近所の後家お増、糊屋婆おかん(式部)勸誘員吉田、米屋(紫雪)店員新

新國劇

七月公演
一角 座
一日 初日
正午、五時半、二回開演
夜五時半

助、事務員(新樂)藝妓葛次(千代子)藝妓光勇(靜子)藝妓政彌(友子)女房おさが、妻都志子、隣りの女房(春江)伴省(小文樂)憲太郎妻お卷、石川妻鶴子(辨天)侍女山吹(多景島)仲人竹内、田舎老人(源五郎)父岩次郎、家主幸兵衛(十太郎)駕屋清六、父進藏(太郎)駕屋喜八、二階借り三好、夫(淡海)

【狂言】第一、菊池寛作「時の氏神」壹幕第二、文藝俱樂部連載林不忘原作、小堀雄脚色新版大岡政談の内「魔像」(前篇)五幕十五場、第三、エドモン、ロスタン原作、小林宗吉編案「劍客商賣」二場

【役割】大岡越前守、心學者魚心堂、小説家相良英作(中井)平淡路守(野村)壁辰(金井)大目附近藤相模守、目明し金山寺屋音松(南)英右近、劍客鬼塚玄菴(島田)筆屋若江之助、卷田新之丞(丸茂)組與頭戶部近江太郎、卷田内膳(畑中)脇坂山城守、仲間勇助(秋月)番士大迫玄菴(小川)番士淺香慶之助、門弟鏡丹波(伊藤)老中久世大和守、町醫村井長庵、安達軍之助(雄島)神尾喬之

助(辰巳)老中牧野備中守、銀客神保造酒、仲間源五(高木)知らずのお絃、相良の妻ぬい子(久松)造酒妻市松お六、ぬい子の従妹芳子(山路)安達娘お絹(二葉)侍女松枝(永島)山尾妻園繪(初瀬)娘お妙(四條)

新組織大新派劇

樂天地

六月三十日 初日
正午、五時半、二回開演

【狂言】第一、高橋霞樵作「比翼しほり」
壹幕・第二、羽様荷香作「雲の叫び」八場
【配役】藝妓露香(木下八百子)山園磯路子(藤岡登喜次)洲崎の久五郎、子爵山園諸繼(竹川誠一)堀江杉之助、春海金策(河上欣也)三里的長松、番頭傳吉、職工の留(間敏夫)子分鐵砲洲の八藏、教官岡武彦、春海金右衛門(原田孝)半玉若葉(伊井肇)棟梁岩六郎(原良一)百武弘成、審判官花村少將(吉田健一)弘成妻芳枝、金右衛門妻お友(加納巖)子分櫓の太郎、小使彌七、來客柿田(大山次郎)執事新田讓(高橋宮二)岩五郎女房お藤(桃木吉之助)不動の榮五郎、高山恭輔(芳野靜霞)瀧直也(都築文男)仲居お定中大路花子、藝妓鶴子(山路淺子)室井玉枝藝妓お千代(三條久代)仲居お品、藝妓千代

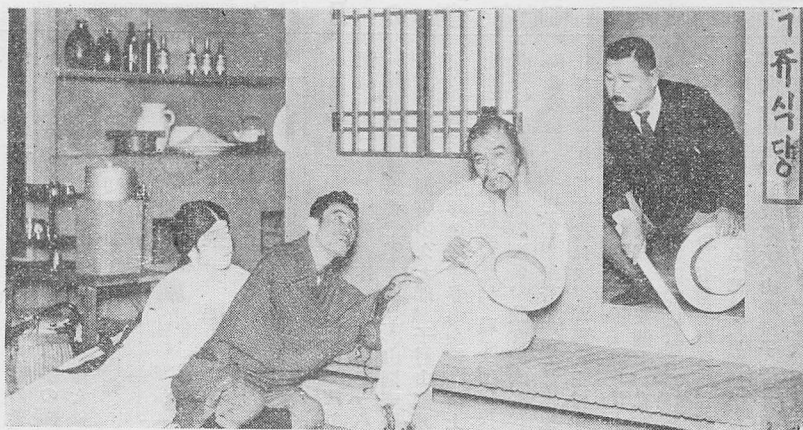
松(前田房江)來客光子、見物の貴婦人(岡田梅子)飛鳥信子、藝妓久子(三輪徳子)杉之助妹澄枝、西條雪子(紅谷京子)仲居おきぬ、藝妓お染(登喜岡八千代)花魁花扇、中院月子(福岡君子)

文樂座七月興行

一日 初日
初日、二日目三時開幕
三日目より四時開幕

前、山田案山子作「生寫朝顔話」明石舟別れのだん 阿曾次郎(つばめ太夫、勝市)深雪(南部太夫、吉彌)船頭(播路太夫)琴(新之助)人形、宮城阿曾次郎(政龜)娘深雪(文五郎)船頭(大せい)島田驛宿屋の段中(辰太夫、清二郎、陸路太夫、可太郎)人形駒澤治郎左衛門(政龜)岩代多喜六(玉幸)朝顔(文五郎)戎屋徳右衛門(小兵吉)萩野祐仙(扇太郎)手代松兵衛(文之助)色久藏(玉松)奴關助(玉市)下女お鍋(覺三郎)川越(大ぜい)笑樂のだん、次(駒太夫、重造)奥座敷より大井川のだん段切(古靱太夫、清六)琴(勝芳中、近松門左衛門作「釋迦如來誕生會」檀持山道行のだん、(鑑太夫、文字太夫、町太夫、源路太夫、龜久太夫)(新左

衛門、仙糸、猿糸、團六、歌助、勝平、綱右衛門、猿太郎、友衛門可、人形、悉多太子、車匿童子(政龜)悉多太子難行のだん、切(土佐太夫、吉兵衛)ツレ(寶市、友作、吉三、友二)人形、悉多太子、後ニ釋迦如來(榮三)鳥陀夷(玉七)阿羅々仙人(玉次郎)耶憐陀羅女(紋十郎)次、近松巢林子作「傾城反魂香」土佐將監閑居のだん、中(貴鳳太夫、文太夫(芳之助、友平、友若)切(津太夫、友次郎)ツレ(友之助、友造)人形、土佐將監(門造)將監奥方(玉七)吃又平(榮三)女房お徳(文五郎)雅樂三助(玉松)修理之助(光之助)百姓(大せい)切、近松徳叟作「伊勢音頭戀寐乃」油屋十人斬のだん、福岡貢(大隅太夫、役毎日替り、女郎おこん料理人喜助(和泉太夫、島太夫)女郎お鹿(相生太夫)仲居萬野(鏡太夫)喜多六(富太夫)女郎(綾太夫)泊り客(浪花太夫)小女郎(文太夫)仲居(千駒太夫)下男(長子太夫)下女(岡榮太夫)徳島岩次(長尾太夫)(道八)人形、福岡貢(玉松)女郎おこん(紋十郎)仲居萬野(小兵吉)料理人喜助(門造)徳島岩次(玉幸)藍玉屋喜多六(文之助)女郎お鹿(扇太郎)泊り客(市松)女郎若菜(紋太郎)料理人男(飄壽三)仲居(覺三郎)小女郎(紋司)下男(傳之助)下女(利男)



(版
無
斷
所
有)

喜劇夏

帽 壹場

曾我廼家五郎作

中座七月興行上演

登場人名

息

朴

正

正

李

葉

淺井

八兵衛

衛

神田

某某

某某

田村

某某

某某

佐々木

市松

同卯

子

同丑

同寅

同辰

同巳

同午

同未

同申

同酉

同亥

同戌

同

同

同

◎夏

帽

一場

茶店ちやんてんの老爺おや父ちやう朴正順はくせいじゆんは地主ぢゆうの淺井あさひに我家わがやを抵當ていどうに五十圓ごじゅうえん借りたが今日けふでは元利もとどろ積づみつて百圓ひゃくえんとなり返済期限はんさいきげんも先月さきづきすみ昨日けふではその代償たひやうに娘むすめの李葉りえつを嫁よめにくれと迫せまる、親娘おやめの困こるを見みた土方小頭ひがしむちがしらの佐々木ささきは同情どうじやうの餘あまり部下ぶくわに支拂しはらひふ日當ひじやうの百圓ひゃくえんを貸かし興きやうへる、正順せいじゆんには正鈴せいりやうと云いふ息子こゝろが、ありその子こが今日は内地うちぢよりその百圓ひゃくえんを持ち歸かへる事ことになつてゐるので佐々木ささきは正鈴せいりやうの歸かへりを待つ事ことになる其處そこへ正鈴せいりやうは歸かへつたが大事だいじの百圓ひゃくえんは夏帽なつぼうの裏皮うらかわに入いれたまゝ道連みちづれの男おとこにすりかへられたと物語ものがたりる、その男おとこが偶然ぐうぜんにも佐々木ささきであつたので佐々木ささきを盗人だうじんと間違まちがへたが、夏帽なつぼうの裏皮うらかわにもそのまゝ百圓ひゃくえんが入いれてあつた、親

子も佐々木も只呆然とするので幕
本舞臺平舞臺上手に葉の繁れる大樹其下
に朝鮮式の家屋二重飾り上手は出縁、中
央は庭傳ひに奥へ通ずる道下手は茶店用
の道具一式を置く向ふ一面森林をみたる
平野をへだて、遠山を見る大樹の上手に
土橋を架けて細き流れを見せるすべて朝
鮮の或る田舎の飾付け、初夏の日盛りの
光線眺へのはやしにて幕開く

鮮人土工、甲、乙、丙、丁、戊、
丙は好みを着附けにて辨當を喰つ
てゐる。娘李葉は甲斐々々しく茶
をつぎ廻つてゐる。

一同 毎度／＼すまん事じやのう。

李葉 まあ／＼ゆつくりと休んで行きなさい
ませ。

甲 おゝきに／＼、何時も晝飯は御邪覽はか
りして、その上茶の御馳走まですまん事じ
やの。

李葉 なんの／＼熱いのをもつといれて上げ
ようねへ。

茶釜の前へ行き、茶を入れかへてゐる。

乙 ア、飯食ふ間が極樂じや、あの鬼の様な

旦那の眼を忍んで、此處で一服するだけが
樂みじや。

丙 そうじや／＼なんぼ夏の日盛りでも、こ
の大樹があるで、我々がどの位助かるかも
知れんわい。

丁 とところでこの大木も今度いよ／＼内の旦
那が伐り拂ふて此處らは家が立ち並ぶとい
やい。

戊 ハ、ン、鐵道が引けるので邪覽になるの
じやな、だん／＼、この村も賑やかになつ
て来るな。

丙 そうや／＼鐵道が敷けたら山の木材は皆
伐り出せるわ、お蔭で此國もだん／＼太つ
て来るな。

甲 太つて来るのはよいが、我々の休み場所
のこの木を伐りとられるのは我々も困るし
この木も可愛相じやな。

乙 オイ／＼其木よりまだ可愛相なものが丙
の旦那に伐りとられるわいな。

丁 ハテナこの樹の外に何を伐とりなさる
のじやい。

甲 知らんのかいあれじやがな。
李葉を指さす。

丁 ヒエツ、李葉をかい。

乙 そうじやがな。

戊 李葉の髪でも切りとるのかい。
李葉の髪を切り
違ふわい。まだつばみの花の李葉を切り
とつて仕舞ふとしてなさるのじやわい。

甲 ウン知つてる／＼、内の旦那はこの娘に
惚れてゐることは、我々奉公人て知らぬ者
は一人もないわい。

丁 ハ、ン成程、それで内の旦那はこんな汚
い家へチヨイ／＼見へるのじやナ。
甲 あの年をして子供の様な李葉さんに惚れ
てゐるとは可笑しいな。

乙 第一あの顔を見やい、女に惚れる顔じ
やないわい。何の事はないラツキヨの鹽漬
じやがな。

一同 アハ、ハ、

大聲になる、この一寸以前より淺
井八兵衛が老けた内地人の拵へに
てヌーと出る。

八兵衛 ヤツ貴様等何時までなまけて飯を食
べてゐるのじやいッ。
一同 ヒヤツ旦那／＼。
皆々驚く八兵衛はねめつけて中央

へ来り。

八兵衛 旦那じやないわいラツキヨの鹽漬じや、主人に向つてラツキヨの鹽漬とは何奴が吐したッ。

乙 ヘイ私でへ、。

甲 コレ何を云ふのじやいへ、イエ此處の李葉がラツキヨが好きじやと云ふてゐますのでラツキヨが好きなら旦那の様な顔が好きじやるナアと皆て話をしてゐましたのじや。

八兵衛 フン内地では可成り女に好かれる私じやが朝鮮の女も私の様な顔が好きかいな乙 ヘイ、あんたの様な顔は朝鮮人にも一寸珍らしいお顔でまあ貴重品ですナ。

八兵衛 フン左程でもないわいへ、。

この時李葉前に出て。

李葉 旦那様いらつしやいませ。

八兵衛 オ、李葉かい今日は、お前ラツキヨが好きじやと、今町へ出たのじやで買ふて来てやればよかつたに。一寸これを見い今流行の洋傘じや内地の東京から着いた計りじやと聞ゐたてお前に買ふて来てやつたどうやよい模様じやる、サア、これをさ

して一處に散歩しような。

李葉 イエ妾はこんな立派なものを頂く譯が……。

八兵衛 あるもないも夫婦の仲で遠慮するな。

甲 ヘーン旦那、夫婦と仰在るといよく結婚なされたので……。

八兵衛 結婚はまだじや今地ならし申じやい今に夫婦と云ふ二本のレールが敷けるのじやい。李葉が御父は？

李葉 ハイ今朝から山へ柴かりに……。

八兵衛 婆は川へ洗濯にと云ふ面倒な婆はなしお前と俺と二人限り外に邪覓になる奴はヤイお前等何時まで油を賣つてゐるのじやい早ふ行かんかい。

一同 ヘイ。

八兵衛 ヘイ、じやないわいこんなラブリンになつたらすぐ氣を利かして行つて仕舞ふのにヤイ今日中にあの地ならしを片付けねば飯を食はさんぞ。

一同 ヘイ。

ねめつけられて土工皆々オゾくして下手へ入る李葉も内へ入りか

ける手をとつて。

八兵衛 コレツ何處へ行くのじや。

李葉 ハイ一寸。

八兵衛 コレこんなチャンスが又あるかいコレサ二人で其處ら散歩しようか。

李葉 イエ内には誰も詮せんので。

八兵衛 よいなが、盗人ははゐつたととられる様な品物があるじやなし、よしや家ぐるめ持つて行かれても俺がお前の親父から百圓の低當にとつた家、私が損をすればよい話じやがな。

李葉 イエ其金も兄さんが内地から歸りましてら急にお返しすると云つて居りますので八兵衛 阿呆らしい内地へ働きに行つてゐる兄貴が何時歸るか判るかいな。

李葉 イエ、昨日電報が参りましておそくも今日中に此村へ着く筈になつて居りますので父も今日は山を早ふ仕舞ふて歸ると今朝インとして出て行きましたのですよ。

八兵衛 そんな事が當てになるかいそんな當てにもならぬ事を待つてゐるより當てにも便りにもなる俺にじつともたれて仕舞へ百圓の貸しも何もあつたものかい此家も新築

してお前に流行の洋装でもさして内地へ新婚旅行や、俺も流行の洋服で舶來のカバンをこふさげてお前は此洋傘をボンと開いてコウ手をとつて……

箕盆をカバンのかわりに提げて傘を李葉に持たさんとする李葉はとびのいて。

李葉 アレ嫌で御座いますわ。

八兵衛 コレへ逃る事があるかい。

舞臺を大まわりに追まはして居る時上手より道路技士神田某、助手田村某を先に工夫子、丑、寅、卯辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥各自計量器を持つて道路の面積を計る。

子 オイ 邪魔になる。

工夫一同 退いた。

兩人を追まわす内李葉は茶店の中へ逃てはいる。

子 オイ 君、測量の妨害をしては困るな

ア。

八兵衛 君方こそ我輩の妨害をしては困るなア。

丑 オイ君の何を妨害したのや。

八兵衛 何をツて……神聖な戀愛を妨害するのは絶大な罪惡だツ。

子 オイ其男一寸氣が變やないか。

寅 そうかも知れんぜ女の洋傘と箕盆を提げて目を血張らしてゐる様子ではハ、ン精神に異狀があるな。

卯 ハ、ン若い女を追ひまわしてゐる様子では色情狂かも知れんぞ。

八兵衛 色情狂とはなんだツ。

神田 すみません。オイ諸君失敬な事を云ふものじやない。貴方すみません今のは貴方の娘さんですか。

八兵衛 馬鹿仰在い、あれは僕の妻ですよ。

神田 ヘーン貴方の奥様ですか。

田村 ねへ先生、此方が今の若い鮮人をワイフにしてゐられるとは内地では見られない圖ですねへ。

八兵衛 内地では持てず共朝鮮では持てゐるですツ。

一同 イヨウ 朝鮮の色男。

手を打つて笑ふ。

神田 諸君 諸君 サア あの寄場で一息仕舞

「モウこれで測量もすんだからね。先生まだ測量が残つてゐますよ。

田村 何處ですか。

神田 此親父の鼻の下が……。

田村 曲き尺を出して顔へ當てる。

八兵衛 失敬な事を云ふなツ。

一同 色男々々アハ、ハ、ハ。

八兵衛 大笑ひの捨せりふにて下手へ入るあるところ社會へ發表した以上お前は俺の妻だ、夫の命令だ此方へ来い。コレ来いと云ふのに……。

季葉 アラ嫌ですわ。

再び逃るを追ひまわす内上手より工夫小頭佐々木市松、遅れた心にてツカへて出来りよろしく氣味合。

八兵衛 よふ邪魔がはゐるなア。

佐々木 モシ今此處を工夫連が通りまへんだか。

李葉 ハイ今お通里になりましたあの寄場で

一イキして居られます。モシ貴方もどうぞ

一イキしてゐて下さいねお願いですから……

……..
目顔で助けてくれとの思入れ市松
はのみ込んで。

佐々木 ハン。よしッ休んで行こ。

兩人よろしく氣味合にて上手へ腰
を降ろす。

李葉 有難う御座います。

佐々木 オ、丁度時間や、オイ、サンドウキ
ツチを持つてゐるのじやがビールが欲しい、
ないかいナ。

李葉 ハイ、御座います。

茶店の内へとりに行く八兵衛は下
手へ腰を降ろして一人言の様に。

八兵衛 人の戀路を邪覺する奴は馬にけられ
て死ねばよいか。アハ、ハ。

佐々木 オイ耳障りな事を云ふない、俺は人
の戀路の邪覺をする様な暇人じやないわい
八兵衛 エライお氣が廻るなお前に云ふてゐ
るのじやないぜ耳に障ると云ふ以上神聖な
戀愛を妨害してゐると自覺してゐるのか。

佐々木 何ぬかしてけつかるのじやいオイお
つさん恥を知れよ、よい年をして 鮮人の若
い女を追ひ廻して變なまねをしてくれるな

い、日本人全體の恥になるわい。

八兵衛 オイ君、日鮮人結婚は併合上の一
大精神だ夫れが恥になるのだ注意して
口を利けッ。

佐々木 フ、ンスルと君はあの人の亭主かい
八兵衛 無論ッ。

此時ツカ、とビールを持つて李
葉前に出て。

李葉 イエ嘘ですよ。
八兵衛 コレ、何も恥しがつてかくす必要
はないこふ云ふ判らない内地人に併合の精
神を説いてやるのが我々鮮地に住む内地人
の義務なんじや。

佐々木 フームするとお前は此茶店の亭主か
い。

八兵衛 エ、そうだ此邊の地主であり此茶
店の主人なんだ夫れがどうした。

佐々木 此茶店の亭主なら俺は客やぞ客なら
客らしふ扱へッ。

八兵衛 ア、左様か、これは、今日はへ、
よふおいでヤース。

佐々木 オイ亭主ビール持つて来い。

八兵衛 ヘエ、毎度大きに……。

無理に李葉よりビールを取つて。
へいお酌。

つぐ顔をじつと見て。

佐々木 此代物一寸變つてゐるナハ、ハ。

八兵衛 へ、エライ今日はお暑い事でへ、
。

弱て佐々木をあほいでゐる内下手
より柴を肩げて父朴正順ターと出
來り。

朴 今歸つたぞ。

李葉 オ、お父さんお歸り。
嬉し氣に柴をとる八兵衛も傍へ來
て。

八兵衛 イヨ、お父さんお歸り、おつかれ
でしたやろな。

朴 モシ、旦那様御冗談なされますな、
罰が當ります。

八兵衛 ハテ親子の仲に何が遠慮が入りませ
ふ、サザやおつかれでせうなア。

腰をかけさして云ふ。

朴 モシ、大抵にしておくれなされませお
見うけ申せば貴方様もお客様じや御座りま
せんか。

八兵衛 イヤ／＼私の客じやない店のお客じや。

朴 ヘーン、コレ李葉よ店のお客さんならお前が出てお酌でもせんかい旦那様に何をして貰ふてゐるのじやい。

八兵衛 お父さん／＼親子の仲で水くさい事おつしやりますな。

朴 モシ／＼旦那さまお父さん／＼なんて旦那勿體ない私よりあんたの方が年が上ですがな、あのお方がお笑ひになりますかな。

佐々木 オイ／＼とつさん其人は君の處の婿ぢやないのかい。

朴 滅相もない事仰在りませ此方は此邊の地主さんで淺井八兵衛さんと仰在る方で我々とは身分違ひのお方で御座ります。

佐々木 デモ今此處の亭主じやとハツキリ云ふたぜ。

朴 何時も見へてはあんな事計り云ふてゐられますのじやがな。

佐々木 フ、ハンスルとまだ話も何もきまつてないのじやなア。

八兵衛 そつちは極まつてのふても此方は極まつてゐるのじやサアモウこふなつたら最

後の談判やオイ朴、サアかんたんに返事せいでよ李葉を俺に呉れるか呉れぬかサアハツキリ返事せいつ。

佐々木 よしハツキリ返事してやる、嫁になつてやらんよつてそう思へツ。

八兵衛 コラツ何の關係もない通りがりの赤の他人が餘計な處へ口を出すな。

佐々木 親父さんが言ひ憎さうにしてゐるよつて俺が變つて云ふてやつたのじやい。

八兵衛 オ、夫程立派に口を利くなら元利積つて丁度百圓今耳を揃へて此處へ出せツ。

佐々木 ナニ百圓、百圓とは何の事じやい。

朴 夫れは私が此家を抵當にかりました五十圓元利つもつて丁度百圓になつて居りますのじやモウ返済期限も先月にすんでゐる、

夫れをかへすか娘をよこすかと此間からのきびしい談判、せつばつまつて内地の大阪へ働きに行つて居ります、これの兄の處へ手紙で云ふてやりましたらまだ内地で成功

もして居らんが百圓位のお金ならやつと此頃貯金が出来たせつばつまつた家の爲なら

その金持つて一先づ歸ると嬉しい返事、今日か明日かと待つて居りましたら、やつと

昨日電報が釜山から參りまして遅く今日中には此處へつきます答今にも兄が歸りましたら直ぐにその金を持つてお返し申しにまゐりませふと思つてゐましたのじや。

佐々木 フーン。
兩手を組んで考へる。

八兵衛 オイ／＼下手な考へは休むに似たりやせ立派な口を利くのならその金をボンと出してそれからハツキリ物を云へオイ粹な親方たゞさへ邊な面構へをその上男を下げんとおいてや。

佐々木 よしツ、その百圓俺が出さう。

朴 滅相もない見ず知らずの貴方からそんなお金を出して貰ふてはすみません。

佐々木 イヤ出さして、こんなしがない土方やけれど意地もあれば口利いた責任も知つてゐる。サア百圓。キツト今日俵どんが歸るにきまつてゐるなア。

朴 それは體に間違ひはござりません。

佐々木 キツト百圓持つて歸るなア。

朴 ハイそれは體に手紙に書いてござりました。

佐々木 大丈夫じやなく。

にツカ／＼と李葉前に出て

佐々木 エライお世話になりますな。

今かくと今朝から待つてゐるその御無事

お父さんく兄さんが歸つた。

これにて上手二重より朴とんで出

朴 オ、倅よ歸つたかく。

正鈴 オ、お父さんく。

互に抱き合ふて思ひ入れ。

正鈴 永い事留守をしてすみまへんだなア

朴 なんの、何から話てよいやらアノソ

ノ、これ李葉水を一杯くれ。

李葉 ハイ。

水をとりに茶店へ入る。

正鈴 お父さんいらくお話は歸つてからし

ます一寸先へ警察へ行つて來ますからな。

朴 ヒエツ、警察へ何をしに行くのじヤツ。

正鈴 エ、イエ心配な事でもありませんが

一寸聞きたい事があつてなア……。

朴 オ、そうかく、それでは行つて來ても

よいが丸一年内地で働いてヤツト百圓餘り

はたまつたと手紙に書いてあつたな。

正鈴 フン耻かしい事がわづかそれ程より

貯まらなんだモウ一年辛棒したら三四百圓

持つて歸れると楽しんでゐたがあんたの手

紙で心配して妹の身に變な事があつては
と残念乍ら思ひ切つて歸つて來た。

朴 ア、すまぬ親や兄弟が手足まとひで

お前の成功の邪魔をしてかんにんしておく

れや大抵の事ならお前にも心配さすまいと

思ふたが去年の秋に俺が病氣してせつば詰

まつて此家をなア。

正鈴 イヤ手紙で知つた淺井から金を借りた

のやろ夫れを恩に妹を自由に仕様として

ゐると手紙で知つて吃驚して歸つて來た。

朴 サア今の先も此處へ來てサア金を返すか

娘をよこすかと、のつびきならぬ談判をう

けてゐると恰度此處に休んでなされた内地

のお客さんが見るに見かねて百圓かして下

された其方も急ぐ金で今日中になければな

らぬので先きから奥に待つてござるのじ

ヤサア早ふ金を出してお前も一處にお禮を

云ふておくれくサア早ふ金をノ。

正鈴 お父さんその金は道中で盗まれたツ。

悲痛の思入れにて云ふ。

二人 ヒヤツ。

正鈴 お父さん心配しなや一本道の此街

道今の内に警察に届けたらキツつかまる

に決つてゐる心配せんと待つて居てや

立上る手にすがりつき。

朴 エ、倅よ一體何處でとられたのじやい。

正鈴 サアそれが内地で云ふ土砂流しのすり

かへにかゝつたのじや。

李 兄さんなんでそんな油斷をしたのじやい

正鈴 油斷をするかい正金持つた道中は危な

いと釜山の銀行で百圓札にかへて貰ふてふ

ところに入れてはかへつて險吞と此帽子の

ピンカワへ入れて冠つて歩いて居たら滅多

に人にも知れまいと思ふて居たのが却て間

違ひ此ツイ先の森の中から道連れになつた

内地の男何時の間に見つけられたやら一寸

帽子をぬいで汗を入れてゐる内に此帽子も

すつかりかへられた俺が握り飯食ふ内に一

足お先へ行つて仕舞ふた後で氣がついて

吃驚仰天追つかけても追つつかれず引返し

て警備のたまりへ届けたら先の憲兵分署へ

すぐに行け夫れから先きは電話があるから

必ず捕へて貰へると聞いて來たツ。

朴 待つてッお前のとられたのは百圓札か。

正鈴 そうじや新しい百圓札じや。

朴 フンその盗人の人相は知つてゐるか。

正鈴 知つてゐる共年の頃は四十位、人夫らしいなりをして今から考へたら餘り人相のよふない奴じや。

朴 其男の左の目の下にほくろはないか。

正鈴 フ、ン慥にあつたお前何故それを知つてゐるのじや。

李葉 兄さんその盗人なら内にゐるツ。

正鈴 ヒエツ。

朴 シイツ。

押へてよろしく氣味合。

朴 これモシ人違ひじやつたらどうするのじや心を靜めてソツトすき見をして見い。

正鈴 よしツ。

朴 靜かに。

よろしく抜き足にて正鈴は二重の奥を見てハツト驚き其まゝ茶店の中より棒を持つて出来りふんどまんとする手を朴は止めて。

朴 コレ何をするのじやい。

正鈴 何も彼もあるかい、うまゝ俺を土砂流しかけやつて高いびきもないものじや殴り殺しても承知は出来んわい。

朴 待て、心のはやるは尤もじやが今お前に

話をしたせつばまつてゐる場合に百圓を投げ出して助けてくれたはあの盗人ツ罪を憎んで人を恨まず殊更親子の難儀をば助けてくれた大恩人お前に恨みのある人でも俺の娘は恩がある。何れ拂はねばならぬ百圓をお前の手から拂ふかあの人の手から拂ふかの違ひじやないか盗られたと思へば腹も立たうがこつづけたと思へば腹もすむ物はあきらめ思ひ憐れ事をしてくれるないツ。

正鈴 フーム、お父さん一體どうすればよいのじやいナア。

朴 どうするもこうするもあるものかい何も云はずに此まゝに間道を教へて上げて逃がしてあげるがせめて恩返しお前の顔を見ては逃憎かる、李葉よ兄さんを裏へ連れて行つて早ふわらじでもといてやれよ。

李葉 ハイ兄さん裏へ入らつしやいな。

正鈴 夫れでも何だかむしやくしや腹で胸が納まらんわい。

朴 何も彼も俺に免じて堪忍して。

正鈴 フーム、畜生メツ。

李葉 兄さん堪忍して上げて頂戴よ——。

無理に兄の手をとつて兩人庭の中の入口へはいる、朴はツカゝと二重へ上りて市松の手をとつて出る。

佐々木 オイ、何じや吃驚するがな。

朴 その吃驚は此方の方じや、サアあの森ぬけて祠の後を細道づたいに走つたら間道づたいに逃られる恨みは恨み恩は恩、サア今の間に逃なされ。

佐々木 オイおやじさん何を云ふてゐるのじやいまだ息子どんは歸らずかい。

朴 コレそれを聞かぬが花、此方も云はぬが花ア、あた男の花盛りを浅間しい事をして一代送る人じや動けば動ける丈の立派な身體を持ち乍らなせそんな不心得をなされます入らぬ他人のお世話とおつしやるか知らんが恩があればこそ意見もしたいどうぞまじめに世の中を渡つておくなはれコレ此通り兩手をついて頼みますアイゴウ、佐々木 コレお前氣が違ふたのじやないかまだ息子は歸らんのかい日が暮たら困るがな朴 フームお前さんまださつきの百圓を持つて歸る氣でゐるのじやナ。

佐々木 當り前じやがな。

朴 何ッ當り前じや。夫れを當り前と思ふてゐなさるかそう云ふと此方の方も嫌な事を云はねばならぬぞ。

佐々木 コラッ俺がお前に何を云はれるのじやい。

朴 夫れを云はすかッ。

佐々木 云はさいでかいッ。

朴 云ふぞッ。

佐々木 サア言へッ。

朴 オ、云ふぞッお前さんが手に持つてゐる其夏帽ッ、誰の帽子か知つてゐるかッ。

佐々木 エ、ア、コリヤ帽子が變つてゐるらしいナ。

朴 跳める帽子を朴はとつて。

土砂流しめッ、これは内の息子の帽子じ

やわいッ。

佐々木 フ、ンするときつき道中で道連れになつたのは君の息子かッ。

朴 サア好事門を出でず、悪事千里を走るのたとへ倅が内地で一生懸命働いた汗と油のかたまりをよふも〜。

云ひつゝビン皮をあげると中に百圓札がある正鈴、李葉、も中よりヌーと顔を出す。

皆々トタン氣味合。(木頭)。

朴 倅あつたがな。

あきれる、佐々木は不審らしくじつと見る、兄妹は前へ出て禮心にて頭を下げる、此模様よろしく眺へのはやしにてキザミ拍手木。

演劇雑誌

歌舞伎

毎月一日發行
一部三十錢

◇…本誌の姉妹雑誌…各地書店に發賣…◇

發行所

東京市京橋區木挽町三(歌舞伎座内)

歌舞伎出版部

大野醫學博士 實驗推定

乳兒に一番良

パームオイル

松竹炭

編輯後記

松本泰三

×

七月號の發行は、バカに遅れた。まことに済まぬと思つてゐるが、本屋の軒へ出るにはまだ二三日は要する。

七月五日——けふ漸やく編輯後記を書くところまで漕ぎつけた。新聞、ラジオは「十八年ぶりの酷暑」だと告げてゐる。暑熱焔々たる折柄讀者諸彦の健在を祈る。

×

芝居は銷夏陣をしいて、中座は五郎劇の歸演、淡海劇が一月をいて浪花座に歸つて來た。道頓堀は喜劇鑑賞のカタチを呈してゐる。

角座へは新國劇が再度來演して、劍の猛演だが本水使用の舞臺で涼味萬斛たり、文樂も夏にふさはしい狂言を出してゐる。

×

何處かに歌舞伎が窺ると聞く。幸ひこれを的に狂言連名のきまるを待つ、待つこと數日にして風聞に停まる。ええ、この暑いのに研究考證の記事でもあ

るまい——ひとつ「道頓堀」も七月の銷夏劇場にならつて、避暑納涼の浴衣がけ編輯に出かけることにプランは決つた。編輯部全員が活躍、近來にない活躍ぶりを見せる。

×

「エロとグロの展覽會」は芝居の錦嚮を綴蒐してみた。これも夏の讀物の一つになる。

ひろく東西の俳優に「今年の銷夏法」を伺つて、「舞臺人の銷夏多面」を特輯した。幸ひ多數の執筆が願へて、紙上は賑はひを呈してゐる。これで夏の讀物が二つ出來た。

×

この他高谷伸氏の「幽霊漫談會」山上貞一氏の「芝居のスコサ」を始め、西尾福三郎、吉田頑男、吉本寛汀、高橋義信の諸氏に夏芝居の印象に就て執筆を願つた。狂言の考證記事とちがつて、くつろいで読んで載れるだらう。

×

曾我廼家五郎氏が目下中座に上場中の「夏帽」一幕の脚本を本誌に寄せられた好意を感謝する。これはかつて五郎氏が滿鮮旅行の際に目撃された事實を劇化したものであると。

昭和五年七月一日發行

雑誌『道頓堀』第五年
第四十六輯

◇誌代は前金でお拂ひを願ひます。

◇郵券代用は一割増にて御註文を願ひます。

◇御相談の上廣告掲載の需めに應じます。

廣告取扱所

大阪電報通信社

大阪市北區中之島二丁目

廣告の御用は電通または常編輯部廣告係へ御申越し下さい

特價金參拾錢(郵錢五厘税)

昭和五年六月二十日印刷
昭和五年七月一日發行

大阪市南區久左衛門町八番地

編輯者 島江 鏡也

大阪市東區滝橋南之町二丁目

印刷者 松本 米藏

印刷所 桃谷印刷株式會社

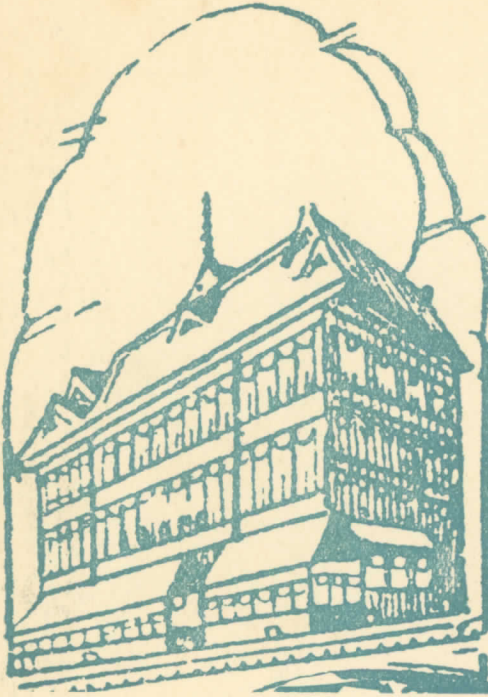
大阪市南區久左衛門町八番地

發行所 松竹土地建物興業株式會社
道頓堀編輯部

電話(一四四〇番)
(六六六五番)

南一温泉料理 川

|| 文樂座南一 ||



大阪四つ橋

宮河計之助

電話南

七〇一
 番
 五二九
 番
 長一三二
 番
 西六三〇番

昭和五年六月三十日印刷
昭和五年七月一日發行

第五年七月號

一部金參拾錢

美は輝く

クブラ白粉

鏡に向ふ朝な 夕なを歡びよ	この品位ある 眞の化粧美は クブラ白粉
------------------	---------------------------



め止ケヤ白
いよ揃一に

ムーリク美ブラク